

愛媛県越智郡上島町

豊島明神遺跡

2016年3月

愛媛県越智郡上島町教育委員会

序 文

豊島明神遺跡のある豊島は、中世の「塩の莊園」として知られる弓削島から南東へ4kmほど離れた海上に浮かぶ東西に細長い周囲約4kmの島です。この小さな島で、芸予諸島の島嶼部での遺跡の踏査を重ねられてきた考古学者の長井數秋先生（愛媛考古学研究所）によって、古墳時代の製塩土器が多数発見されてきました。

その後、島嶼部の製塩業史の解明に向けて地道な調査と研究を重ねてきた愛媛大学の村上恭通先生を中心とした法文学部考古学研究室の皆さまの献身的な発掘調査が始まりました。

本報告書は、平成19年度から22年度にかけて4次にわたって実施された豊島明神遺跡の発掘調査の成果を報告するものです。発掘調査では古墳時代前期の脚台式製塩土器及び古墳時代中期から後期にかけての小型平底製塩土器といった今後の芸予諸島の土器製塩を研究するうえでの基礎資料となるべき遺物が出土しました。また、国内最古ともいえる古墳時代前期の供献用鉄滓が確認され、祭祀遺跡として著名な魚島の大木遺跡よりも時代の遡る祭祀遺跡として注目されました。古墳時代の製塩土器や祭祀について多くの示唆を与えてくれた記念碑的な発掘調査となり、その成果は、その後の佐島の宮ノ浦遺跡の発掘調査でも活かされています。このような多くの成果を得ることができたことは本当に喜ばしく、発掘調査及び出土遺物等の整理を担当された愛媛大学の皆さまに心から謝意を申し上げる次第です。

本報告書が、連綿と続く瀬戸内海地域の製塩業の歴史を紐解く資料として、郷土の歴史や文化への理解、さらには教育、学術研究に活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本調査実施にあたり、多大なるご理解とご協力をいただきました関係機関および地権者、地元住民の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成28年3月

上島町教育委員会

教育長 亀 山 和 磨

序 文

2015年10月、国宝東寺百合文書がユネスコの世界記憶遺産の登録された。この文書には中世において東寺に塩を貢納した弓削島荘の様子が克明に描かれており、上島町としても先祖からの恩恵に驚き、また喜んでおられることであろう。今から約20年前、初めて弓削島に渡った際には、島に東寺との関係を感じさせるものはほとんどなく、まして中世の考古資料は皆無であった。島で中世を実感することはなかったのである。

それが微々たる契機であるが、少しずつ考古資料が歴史を語り、地域の方々ともその歴史を共有し始めたのが豊島明神遺跡の発掘である。豊島の海岸で龍泉窯系青磁の小片を採集し、この1片が弓削島時代遺物として中世を物語る、いう多少誇張気味の説明に耳を傾けていただいたことを思い出す。

そもそも豊島明神遺跡は長井数秋先生にその存在をご教示いただいた。芸予諸島において古墳時代の製塩遺跡を発掘調査したいという強い願望がかなったのは長井先生のおかげであり、また遺跡の存在をこの目で確かめたいと豊島まで同行していただいた弓削島のみなさんのおかげである。豊島明神遺跡の試掘調査後、「弓削塩文化を伝える会」が発足し、考古学研究室と島との関係もますます強くなった。

肝心の豊島明神遺跡であるが、結局、古墳時代前、中期の製塩土器を発掘できたものの、製塩跡の存在は明らかにし得なかった。むしろ祭祀活動の痕跡であり、祭祀と塩との関係を考えさせる遺跡であることがわかった。折しも発掘調査期間中、古墳時代中期の祭祀遺跡として著名な同町魚島の大木遺跡で採集された祭祀関連遺物に触れる機会を得た。今回、この報告書の中で大木遺跡遺物の再整理成果を紹介できることはなにか強い縁があるのであろう。

現在、毎年発掘調査している佐島の宮ノ浦遺跡は、この豊島明神遺跡の調査がなければ巡り会うことがなかった。宮ノ浦遺跡では自然環境も視野にいれながら古墳時代の製塩活動を明らかにしつつある。弓削における初めての発掘調査はあまりにも小規模であるが、島の歴史研究にとっても、塩をめぐる地域住民の活動にとっても大きな一歩となった。調査を理解し、御協力いただいたみなさまに感謝しながら、本報告書の刊行を喜ぶたい。

2016年3月10日

愛媛大学考古学研究室

村 上 恭 通

例 言

1. 本書は愛媛県越智郡上島町豊島に所在する豊島明神遺跡における3次（2008年～2010年度）にわたる発掘調査の成果報告書である。また附編として同町魚島に所在する大木遺跡採集遺物の再調査報告も掲載した。
2. この調査は福武学術文化振興財団（現、公益財団法人 福武財団）および伯方塩業株式会社の多大なる支援により実施できた。
3. 豊島明神遺跡発掘調査参加者については本編第2章2に示すとおりである。
4. 豊島明神遺跡報告書出土遺物の整理作業は次のメンバーが行った。
亀澤一平（現、松野町教育委員会）、芝本里美、藏本諭（現、大学院修士2回生、大洲市教育委員会）、宮下垂季、小野隼弥（今治市教育委員会）、斧香菜子、大山裕矢（学部4回生）、織田誠司（学部4回生）
5. 図のトレースは亀澤、藏本、織田が、写真撮影は村上恭通が担当した。
6. 遺物のX線撮影は愛媛大学考古学研究室所有SOFTEX M-150Wで行った。
7. 文章については各担当者の氏名を文末に記した。なお出土遺物のうち縄文土器の説明に関しては福永将大氏（九州大学大学院）に担当していただいた。
8. 土層の色調は『新版標準土色帖』（農林省農林技術会事務局監修）に依拠した。
9. 本文中における緯度、経度は国土地理院の地図情報データに基づいている。
10. 大木遺跡採集鏡のX線CT画像の撮影に関しては九州国立博物館 今津節夫先生の御協力を得た。
11. 豊島明神遺跡の集石遺構および大木遺跡採集の石製模造品の石材については愛媛大学理学部地球科学科 榊原正幸先生に鑑定いただき、多々御指導いただいた。
12. 本報告書の作成に際し、次の個人・機関よりご指導・ご協力いただいた（敬称略）。
梅木謙一（松山市考古館）、柴田圭子（愛媛県埋蔵文化財センター）、柴田昌児（愛媛大学埋蔵文化財調査室）、中野良一（愛媛県埋蔵文化財センター）、北條芳隆（東海大学）
13. 本書の編集は村上恭通が行った。

豊島明神遺跡発掘調査報告書

目 次

序 文 例 言

	頁
第1章 遺跡の位置と環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	2
第2章 調査の経緯・体制・経過	5
1. 調査の経緯と目的	5
2. 調査体制	6
3. 調査経過	6
(1) 第1次調査	6
(2) 第2次調査	7
(3) 第3次調査	7
4. 謝 辞	7
第3章 調査成果	9
1. 遺跡の概要	9
2. 調査区の設定	10
3. 調査の成果	10
(1) A区	10
①層序	10
②遺構	14
(2) B区	15
第4章 出土遺物	17
1. 土器陶磁器	17
(1) 縄文土器	17
(2) 土師器	18
(3) 手捏ね土器	25
(4) 製塩土器	26
①脚台式製塩土器	26
②コップ形製塩土器	27
③小結	27
(5) 古代・中世土器	28
①須恵器	28

②土師器	29
③瓦器	30
④瓦質土器	30
(6) 土錘	30
(7) 管玉	31
(8) 鉄滓	32
第5章 まとめ	33

附編 魚島大木遺跡採集遺物調査報告書

第1章 遺跡の位置と環境	37
1. 地理的環境	37
2. 歴史的環境	38
第2章 採集遺物	39
1. 遺物の概要	39
2. 製塩土器	39
3. ミニチュア土器	40
4. 石製模造品	40
(1) 概 要	40
(2) 有孔円板	40
(3) 勾 玉	42
(4) 白 玉	42
(5) 愛媛県内出土石製模造品	43
(6) 大木遺跡採集石製模造品の位置付け	43
5. 青銅製品	45
(1) 小型青銅鏡	45
(2) 西日本の祭祀遺跡における小型青銅鏡	46
6. 鉄製品	47
(1) 鉄剣	48
(2) 鉄鏃	48
(3) 鉄鋌	48
(4) とくに鉄鋌について	50
第3章 総 括	53

図 版

図 版 目 次

―豊島明神遺跡―

- 図版 1 1. 豊島明神遺跡遠景（北から）
2. 遺跡近景（北から）
3. 磯明神社（北から）
4. 藪に廃棄された歴代の蛸壺（2の
右手藪）
- 図版 2 1. 調査前状況（北から）
2. 調査前状況（東から）
- 図版 3 1. A区集石遺構・焼土跡・土器出土
状況 1（北東から）
2. A区集石遺構・焼土跡・土器出土
状況 2（北から）
3. 集石遺構（西から）
4. 鉄滓出土状況（西から）
- 図版 4 1. 集石遺構北側の脚台式製塩土器・
土師器出土状況（北から）
2. 攪乱孔（SK6）の管玉検出状況
（北から）
3. 管玉出土状況（西から）
- 図版 5 1. A区発掘終了状況（北から）

2. A区西壁（東から）
3. A区南東部自然礫出土状況（北か
ら）

- 図版 6 1. B区発掘終了状況（北から）
2. B区東壁
3. B区北壁

- 図版 7 縄文土器

- 図版 8 土師器・手捏ね土器

- 図版 9 1. 脚台式製塩土器
2. コップ形製塩土器
3. 古代・中世土器
4. 管玉
5. 鉄滓

―大木遺跡―

- 図版 10 製塩土器・ミニチュア土器
- 図版 11 石製模造品
- 図版 12 臼玉
- 図版 13 小型青銅鏡
- 写真 14 鉄製品

挿 図 目 次

―豊島明神遺跡―

- 図 1 芸予諸島の位置と上島諸島及び魚島群島
…………… 1
- 図 2 豊島の遺跡分布図…………… 3
- 図 3 豊島明神遺跡周辺の地形図と調査区の位
置…………… 4
- 図 4 豊島明神遺跡地形図…………… 9
- 図 5 A区の平面図・土層図…………… 11・12

- 図 6 集石遺構平面図・立面図…………… 13
- 図 7 集石遺構と共伴土器の出土状況…………… 14
- 図 8 B区の平面図・土層図…………… 15
- 図 9 包含層出土の縄文土器…………… 17
- 図 10 集石遺構に伴う土師器…………… 18
- 図 11 包含層出土の土師器 1…………… 20
- 図 12 包含層出土の土師器 2…………… 22
- 図 13 包含層出土の土師器 3…………… 24

図14	手捏ね土器……………	26	図22	石製模造品……………	41
図15	製塩土器……………	26	図23	白玉……………	43
図16	古代・中世の土器・陶磁器……………	28	図24	愛媛県内出土の石製模造品……………	44
図17	土錘……………	31	図25	小型青銅鏡実測図（1）・3次元計測図（2）・X線CT画像（3）……………	46
図18	管玉……………	32	図26	西日本における小型青銅鏡の分布図…	47
図19	鉄滓……………	32	図27	鉄剣・鉄鏃実測図・X線画像……………	48
—大木遺跡—					
図20	魚島群島の遺跡分布図……………	37	図28	鉄製品（鉄鋌）……………	49
図21	製塩土器……………	39	図29	愛媛県内祭祀関連遺跡出土鉄鋌・素材裁断片……………	51

写真目次

写真1	調査風景（1次調査）……………	8	写真5	調査風景（2次調査）……………	8
写真2	調査中のレーダー探査（1次調査）……………	8	写真6	豊島から弓削島への渡船上（1次調査）……………	8
写真3	現地説明会風景1（1次調査）……………	8	写真7	管玉のX線画像……………	32
写真4	現地説明会風景2（1次調査）……………	8			

挿表目次

表1	大木遺跡採集石製模造品一覧表……………	41	表3	大木遺跡出土鉄鋌一覧表……………	50
表2	愛媛県内出土石製模造品一覧表……………	45			

第1章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

瀬戸内海の西部に位置する芸予諸島は、広島県（安芸）と愛媛県（伊予）とに属し、海域を東西に分けている。大小数百の島で構成され、瀬戸内海でもっとも島が密集し、典型的な多島海となっている。島と島との間は狭隘な瀬戸が形成されているため、潮流が速く、また変化が激しい。古くから海上交通の要衝であるとともに、通行の難所でもあった。

西瀬戸自動車道（しまなみ海道）が通過する芸予諸島東北部には、広島県に属す向島、因島、生口島があり、この南東に上島諸島が位置する。上島諸島は、すべて愛媛県越智郡上島町に所属し、弓削島、佐島、生名島、岩城島、赤穂根島、津波島などで構成される。この上島諸島から南東へ少し離れたところに魚島群島が位置しており、魚島、高井神島などがある。

豊島は、上島諸島と魚島群島とのほぼ中間に位置する孤島で、上島群島で最大の弓削島から南東約4kmの地点にある。北緯34度13分、東経133度15分にあり、東西方向に細長い島で、北東部には200mほど突出した岬がある。東西約1.3km、南北最小幅約0.2km、最大幅約0.6kmを測り、面積は約0.42km²である。上島諸島、魚島群島のなかでは、比較的小規模な島である。

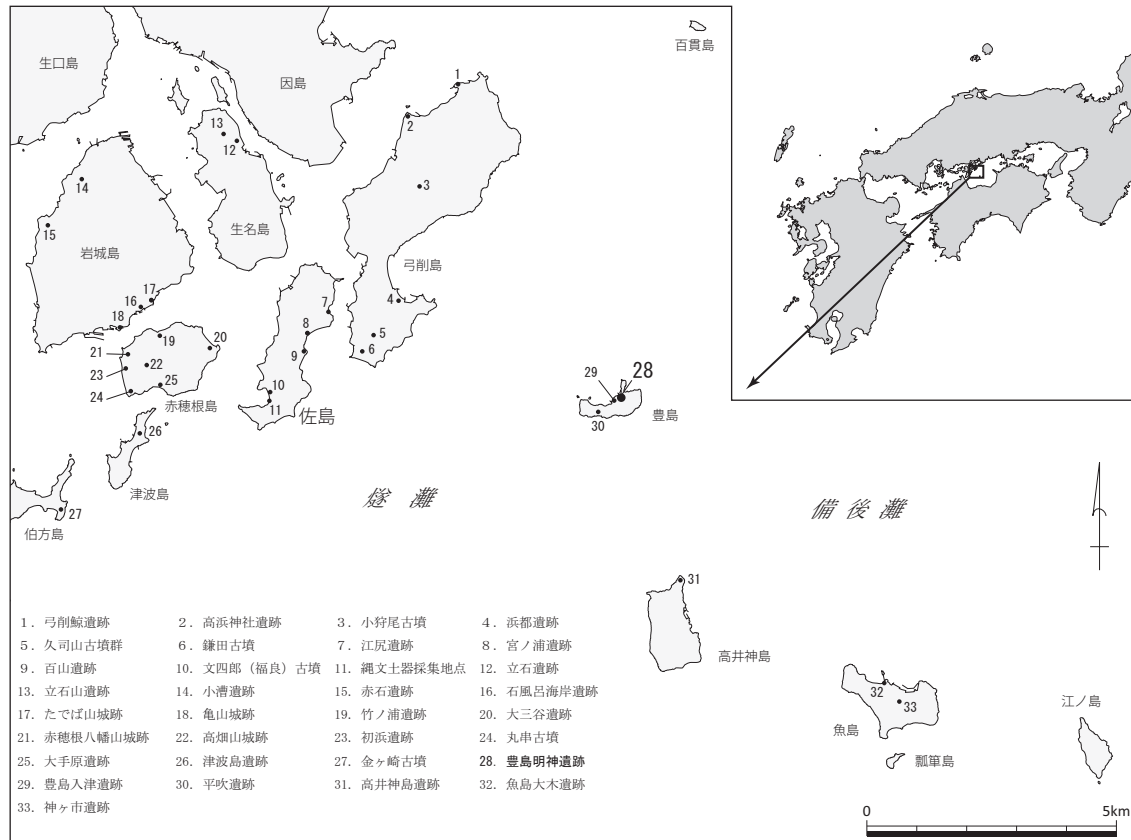


図1 芸予諸島の位置と上島諸島及び魚島群島

標高は、東側のピークが111m、西側のピークは55mであり、稜線が島の中心を東西に通る。島の北側は、東西のピークから海面まで傾斜面が続いている。島の中央部の山は緩丘陵をなしており平坦部は少ない。島は地質学的に、西南日本内帯の領家帯に属し、ほぼ全域が新期領家花崗岩類で形成される。そのため、浸食・風化の影響を受けやすく、海面近くは波蝕崖が形成されている。良質の御影石が採れるため、島の東部では最近まで採石がおこなわれており、山肌が大きく抉られ崖となっている。

2. 歴史的環境

豊島の周囲にある弓削島、佐島、魚島などでは、多数の遺跡や出土遺物が報告されてきたにもかかわらず、豊島における考古学的情報は、1990年代後半に入るまで皆無の状態であった。しかしながら、長井数秋氏や愛媛大学法文学部考古学研究室などの踏査によって、考古資料の存在が明るみになってきた〔長井2004、村上編2005など〕。

島内では、旧石器時代の遺物は確認されていない。ただし、弓削島、佐島など近隣の島嶼でナイフ形石器が採集されていることから、今後、豊島でも旧石器時代の遺物が発見される可能性も否定できない。

縄文時代の遺物は、豊島明神遺跡で採集されている。豊島港からの生活道を敷設するため丘を切り通した際、縄文時代後期中葉、晩期後半に位置づけられる鉢形土器片が採集されている〔幸泉2008〕。

弥生時代の遺物は、豊島明神遺跡でも採集されているが、平吹遺跡でも確認されている。平吹遺跡は、豊島西部の標高約53mの丘陵頂部に位置する。ここでは、緑色片岩製石斧、サヌカイト剥片などの石器片や、弥生時代中期後半に比定される壺胴部片が採集されている〔長井2004〕。この遺跡は小丘陵の頂部に立地しているため、弥生時代のいわゆる高地性集落であった可能性が想定されている。

古墳時代に属する資料として、豊島明神遺跡で多数の製塩土器が表面採集されている〔長井2008〕。発掘調査に伴う成果については、本報告で詳述する。このほかに、豊島入津遺跡でも古墳時代の遺物が確認されている。2006年、豊島中央部の北岸ではじまった宿泊施設建設工事に伴って、島の東西をつなぐ生活道が拡幅された際に、緩丘陵法面から土器片が採集されることが判明したことで、遺跡の存在が明るみになった。2008年には愛媛大学法文学部考古学研究室によって試掘調査が実施され、遺物包含層から土師器片、管状土錘などが得られている〔石井編2008〕。

古代の考古資料は、今のところ発見におよんでいない。ただし、弓削島南東部の砂浜海岸に位置する浜都遺跡では、古代に比定される製塩土器が発見されている。豊島は、この浜都遺跡の対岸に位置しており、今後古代の資料が発見される可能性が高い。

豊島入津遺跡の西側には浅い入り江があり、現在、浮桟橋が設置されている。この入り江は、東西方向に波蝕崖が長くのびているが、風化した花崗岩により、わずかだが砂浜が形成されている。

2003年、この小規模な砂浜で青磁碗片1点が表採された。この青磁片は、山本信夫氏による貿易陶磁編年の龍泉窯系碗15類に該当すると報告されており、13世紀第1四半世紀に比定されている〔中村2005〕。また、同様の資料が、佐島北東部に位置する江尻浜でも採集されている。13世紀前半は、弓削島に東寺領弓削島荘が存在した頃であるが、弓削島を含めた近隣の島嶼で13世紀代に比定される考古資料が確認された例は少ない。東寺領弓削島荘の研究については、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）記憶遺産に登録された『東寺百合文書』を中心とする史学的な研究が先行しているものの、豊島など近隣島嶼の動向が文献史料にあらわれる頻度は寡少であり、周辺地域の実態が明らかになっていない。そのため、このような資料の発見は、弓削島荘との関係性を考察する上で非常に重要といえる。

江戸期には無人島であったようだが、幕末ごろには上弓削村（弓削島）の漁場、採草地として利用されるようになり、山番として入植者が住み着くようになったとされる。大正期以降は、花崗岩（御影石）の採石がおこなわれるようになり、本島の主要な産業であった。第二次世界大戦以降は、漁業、島の西部と北東部の丘陵を開墾した畑作、採石を生業として生活が営まれていたものの、過疎化の一途をたどった。現在、定住者はおらず無人島であり、宿泊施設が建てられているのみである。

（藏本 諭）

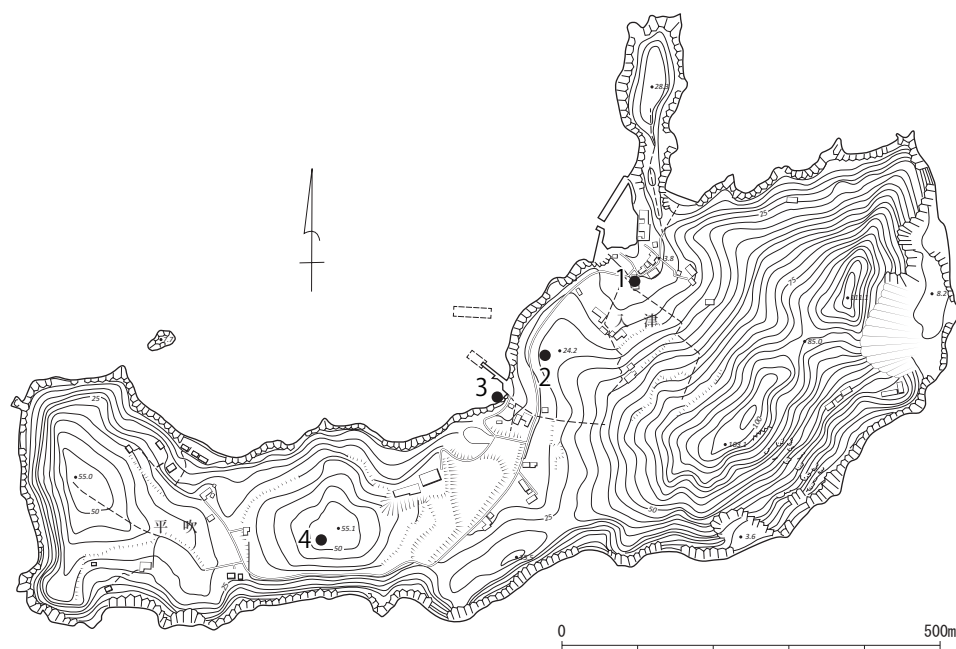


図2 豊島の遺跡分布図

1 豊島明神遺跡 2 豊島入津遺跡 3 青磁碗片採集地点 4 平吹遺跡

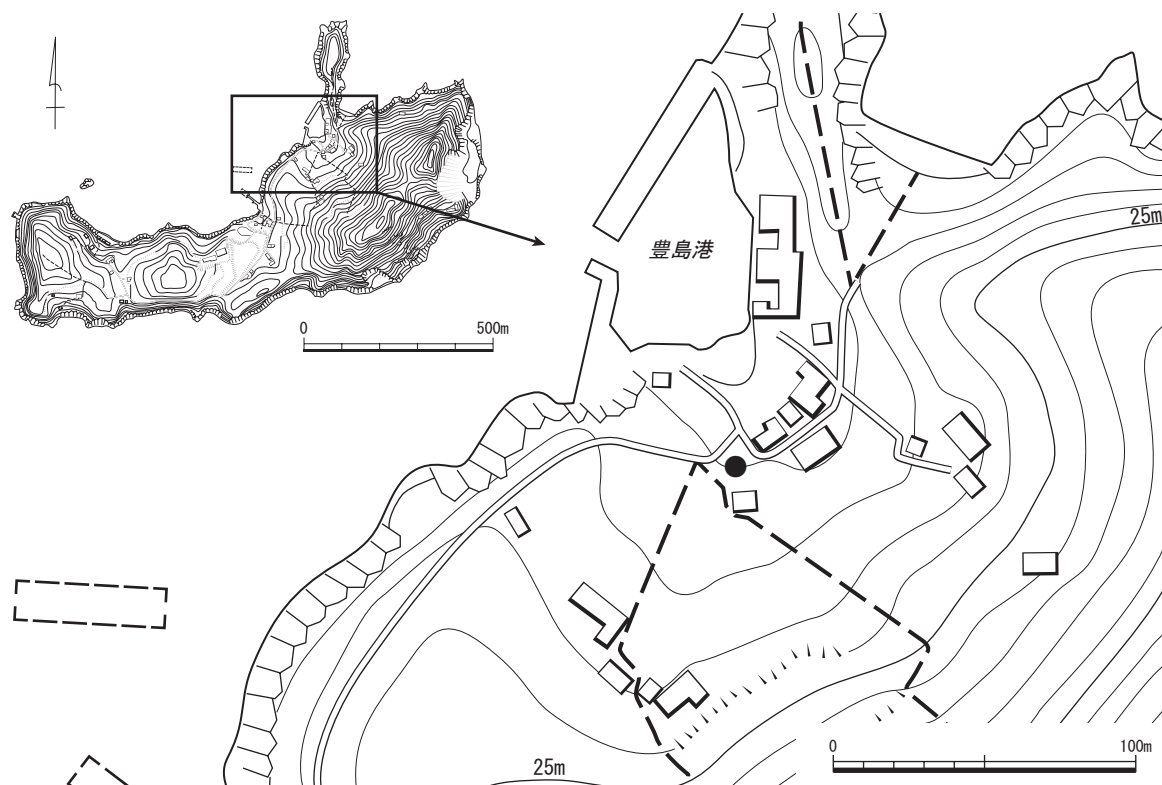


図3 豊島明神遺跡周辺の地形図と調査区的位置（●印）

【参考文献】

- 石井千絵里編2008『豊島明神遺跡・入津遺跡試掘調査報告書』、愛媛大学考古学研究室
- 幸泉満夫 2008「上島町佐島・豊島採集の縄文土器」『豊島明神遺跡・入津遺跡試掘調査報告書』、愛媛大学考古学研究室
- 長井数秋 1975「愛媛県魚島の遺跡・遺物について」『ソーシャル・リサーチ』4、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井数秋 1997「芸予諸島の製塩土器」『古代学研究』第139号、古代学研究会
- 長井数秋 2004「弓削島製塩の黎明期」『しまなみ海道沿線における歴史・文化体験ゾーンの創造—弓削島・塩の里構想—』、愛媛大学法文学部「愛媛地域」文化戦略研究会
- 長井数秋 2008「弓削諸島の考古学」『ソーシャル・リサーチ』33、ソーシャル・リサーチ研究会
- 長井数秋 2012「魚島の考古学」『ふたな』第15号、愛媛考古学研究所
- 長井数秋 2013「遺跡分布図から見る芸予諸島の考古学」『ふたな』第16号、愛媛考古学研究所
- 中村昌博 2005「上島町豊島・佐島採集の青磁」『瀬戸内海西部閉鎖海域における海民文化形成史の考古学的研究Ⅰ』、愛媛大学法文学部考古学研究室
- 村上恭通編2005『瀬戸内海西部閉鎖海域における海民文化形成史の考古学的研究Ⅰ』、愛媛大学法文学部考古学研究室

第2章 調査の経緯・体制・経過

1. 調査の経緯と目的

1999年5月、愛媛県今治市と広島県尾道市とをつなぐ西瀬戸自動車道（通称、しまなみ海道）が開通した。それを機に、愛媛県教育委員会はしまなみ海道沿線における遺跡・文化財・文献・民俗・建造物など多方面の調査を実施した。考古学の分野では中世村上水軍にまつわる今治市来島城や甘崎城などの海城を発掘した〔愛媛県教育委員会編2002〕。

愛媛大学考古学研究室はそれと前後して、遺跡踏査や遺物調査を小規模ながら進めていた。とくに古墳時代の製塩関連資料については、科学研究費の助成を受け、製塩土器についてのみならず、遺跡の立地や環境に関する情報を蓄積することができた〔村上編2002〕。

また、調査活動以外にも新たな取り組みがはじまった。1999年、愛媛大学法文学部人文学科では、教官有志が行政・地域住民と一体となった地域文化の再評価を目的として「愛媛地域」文化戦略研究会を設立した。その際、芸予諸島にはとくに注目し、人文学的諸観点からのアプローチを試みるにいたった。考古学グループではとりわけ製塩史に着目し、遺跡踏査はもちろん、地域住民、自治体関係者、在野の研究者、そして製塩業者など多くの方々との接触の機会を重ねた。この一連の活動は愛媛大学学長裁量経費を受けて実施し、冊子も刊行してきた〔村上編2003、2004〕。

とくに弓削町（現、上島町）の関係者とはいくども交流を重ねた。弓削は中世において京都東寺に塩を貢納した「弓削島荘」があった場所であり、地域住民の原始・古代の製塩に対する関心も高い。村上は弓削町で開催される製塩に関する学習会や遺跡見学に招かれ、過去、未知であった遺跡や資料にも触れることができた。そして2004年度には、学長裁量経費の助成を受け、それらの情報をもとに遺跡踏査と資料調査を実施し、成果の一部を報告した〔村上編2005〕。

このような弓削町（現、上島町）の自治体関係者や住民との交流の一方、島嶼部の遺跡に精通する長井数秋氏（愛媛考古学研究所）に同道し、長井氏がすでに発見していた豊島内の遺跡〔長井1997〕を教示いただき、その後は周辺の踏査をかさねた。とくに長井氏が「豊島東遺跡」と称した地点では古墳時代の製塩土器が多数採集されていたが、その採集地点を見おろす平坦地でも遺物が採集されることがわかった。製塩炉材と想定される被熱礫も大量にみられ、遺構の検出が期待されるようになった。

その後、この平坦面における試掘調査の実施を企図したが、上島町にとっての初めての発掘となることもあり、容易には関係者の理解が得られなかった。そのため、可視的な資料を提示して理解を得るためのひとつの試みとして、2006年6月に地中レーダー探査を実施した。愛媛県内においてすでに地中レーダーの探査歴を有するディーン・グッドマン氏（現、愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター客員研究員）を招聘し、探査にあたった。探査結果は良好で、探査データと大量の表採遺物を提示することによって、関係者の理解を得ることができ、2007年8月、試掘調査に着手す

ることとなった。3 m×0.7mのトレンチ調査の末、脚台式製塩土器、コップ形製塩土器、土師器を多く含む包含層（7層）を検出した。その成果をもって上島町教育委員会、愛媛県教育委員会と協議し、また土地所有者との交渉の末、本格調査を実施することを決定した。

試掘調査では、脚台式製塩土器とコップ形製塩土器の双方が出土し、少なくとも製塩活動に2段階あることがわかった。また花崗岩の被熱礫の出土量が多く、礫を用いた炉の存在が予想され、製塩と炉の関連性を想定できるようになった。本格調査では、脚台式、コップ形をそれぞれ含む包含層を明確にし、存在が予想される炉について明らかにすることを発掘調査の目的とした。

（村上恭通）

2. 調査体制

豊島明神遺跡の発掘調査は愛媛大学考古学研究室が上島町教育委員会と協力して実施することとなった。教育委員会は教育長 小澤宏次を筆頭とし、越智康浩（1・2次調査）、前神 愛（3次調査）が担当者として考古学研究室との連絡調整を行った。

発掘調査は愛媛大学考古学研究室（代表：村上恭通）が担当し、各年度の調査参加者は次の通りである。

第1次調査：石井千絵里（フィールドマスター）、土屋了介、山梨千晶（以上、愛媛大学大学院修士2回生）、垣見奈緒子（修士1回生）、内田優人、大森真衣子、篠原沙知、樋ノ水秀明、武藤洋行（以上、学部4回生）、西原辰郎（同3回生）、青野里香、甲斐晶子、亀澤一平、芝本里美（以上、学部2回生）、伊藤明衣（同1回生）

第2次調査：垣見奈緒子（フィールドマスター、愛媛大学大学院修士2回生）、西原辰郎（学部4回生）、青野里香、甲斐晶子、亀澤一平、芝本里美（以上、学部3回生）、伊藤明衣、藏本諭、小島潤一郎、細貝彩香、玉井拓、本田浩規、丸山耕平、宮下垂季、吉川伸彦（以上、学部2回生）、矢野泰三（研究生）

第3次調査：甲斐晶子、亀澤一平、芝本里美（以上、学部4回生）、藏本諭、玉井拓、宮下垂季（以上、学部3回生）

なお調査にかかる経費は愛媛大学考古学研究室、上島町教育委員会がそれぞれ負担した。とくに財団法人 福武学術文化振興財団（現、公益財団法人 福武財団）および伯方塩業株式会社からの助成・寄付は3次にわたる調査実施を大いに助けた。

3. 調査経過

（1）第1次調査

第1次調査は2008年9月4日から9月16日までの計13日間実施した。調査区は、地中レーダー探査の成果及び2007年度に実施した試掘調査の成果にもとづきA区（8 m×5 m）を設定した。また

包含層の南への広がりを確認するために、A区の南10mの地点にB区（1.6m×0.8m）を設定した。

A区では調査前半に試掘調査で検出した被熱礫群の面的な広がりを意識しながら掘り下げを進めた。後半は調査区南壁よりで検出された集石遺構の精査と記録作業を中心としながら調査を行った。土が予想以上に硬く、掘り下げに支障を来したため、集石遺構を含む調査区の西部、中央部を主として精査し、東部は調査区の掘り下げを停止した。B区は調査前半で掘り下げを終え、後半に記録作業を実施し、すべての作業を完了した。

9月13日には現地説明会を開催し、45名の参加者があった。

（2）第2次調査

第2次調査は2009年8月23日から9月1日までの計10日間実施した。この調査は第1次調査で検出した集石遺構の性格を明らかにし、その他の遺構の検出、包含層の広がりを明確にすることを目的とした。

調査はA区を西部・中央部・東部・東南部に分けて調査を行った。中央部では第1次調査で検出した集石遺構を精査した。その結果、集石遺構の周辺より土器が集中して出土し、土器集中地点として記録し、遺物の取り上げを実施した。また、昨年度、掘り下げを停止した東部では、包含層（8層）が確認され、土師器を中心とする遺物が大量に出土した。西部では遺物の出土量が格段に減少することがわかった。東南部では深掘りを行い、その結果、縄文後期の包含層を2層確認した。

8月30日に現地説明会を開催し、60名の参加者があった。

（3）第3次調査

第3次調査は2010年7月14日から7月24日までの計11日間実施した。本調査は第2次調査で検出した中央部および東部における土器群の広がりを明らかにすべく調査を行った。

調査の結果、東部で土師器やコップ形製塩土器片を濃密に含む包含層を確認し、その西側への広がりを明らかにすることができた。調査前の長雨と豪雨により、調査期間の大半を排水作業に当てることとなり、調査の進捗に大きな影響を与えた。東部の出土遺物をすべて取り上げ、土層の記録作業を終了し、今次の調査を完了した。

7月20日に開催した現地説明会には、前日に行われた上島町・フランス合同シンポジウム『Le Sel・塩』のフランス人出席者を含む70名を越える参加があった。参加者は調査成果や出土遺物の説明に対して熱心に耳を傾け、英語やフランス語での質問に対応する形となった。

（亀澤一平）

4. 謝 辞

豊島明神遺跡の発掘調査にあたり、地権者である長島美保子様、野間喜伴様には御理解いただき、調査に対する承諾を得た。調査期間中の合宿は小川工務店（小川俊治社長）の社員保養所をお貸しいただき、快適な生活を送ることができた。また日常生活においては村上知貴様、村上律子様、村上友美様には格別の御配慮、御支援をいただいた。なお、この調査は財団法人 福武学術文

化振興財団（現、公益財団法人 福武財団）および伯方塩業株式会社からの助成・寄付がなければ実現しなかった。以上のみなさま、機関には衷心より感謝申し上げます。

そして調査期間中、遺跡に足をお運びいただき、御指導、御協力いただきました方々に対して、記名して謝意を表します（敬称略）。

秋山邦雄、大久保徹也、大西健丞、荻谷俊介、栗林誠治、児島公尊、近藤玲、柴田昌児、田川憲、中原計、森下英治、渡邊誠

（村上恭通）



写真1 調査風景（1次調査）



写真2 調査中のレーザー探査（1次調査）



写真3 現地説明会風景1（1次調査）



写真4 現地説明会風景2（1次調査）



写真5 調査風景（2次調査）



写真6 豊島から弓削島への渡船上（1次調査）

【参考文献】

村上恭通 2002『古墳時代の製塩に関する生態学的研究（平成12年度～13年度科学研究費奨励研究（A））』愛媛大学法文学部考古学研究室

村上恭通編2003『しまなみ海道沿線における歴史・文化体験ゾーンの創造』愛媛大学法文学部「愛媛地域」文化戦略研究会

村上恭通編2004『しまなみ海道沿線における歴史・文化体験ゾーンの創造－弓削島・塩の里構想－』愛媛大学法文学部「愛媛地域」文化戦略研究会

村上恭通編2005『瀬戸内海西部閉鎖海域における海民文化形成史の考古学的研究Ⅰ』愛媛大学法文学部考古学研究室

第3章 調査成果

1. 遺跡の概要

豊島の東北部にはほぼ真北に向かってのびる岬があり、その西側基部に豊島港が位置している。現在、豊島港はコンクリートによって護岸・舗装され、本来の海岸線の様子を知ることはできない。島の東部にある脊梁山塊からはこの港に向かって北西へ続く緩やかな尾根が走っており、その尾根の先端部を削平して磯明神社が建てられている。その後背地の高台は、かつては宅地として利用されていた。

磯明神社の西側には旧地表をわずかに残しつつ、港へ向かって南北に伸びる狭い坂道が切り開かれ、島の北岸に沿って走る生活道につながっている。したがって磯明神社と坂道の間にわずかに旧地形が残存しており、磯明神社西側と坂道の両側に旧地形を削った法面があらわになった状態であった（図4）。

この法面から遺物を採集し、包含層の存在を最初に認めたのは長井数秋氏である。長井氏がここで採集した遺物には縄文晩期土器と古墳時代中・後期の製塩土器があり、とくに後者についてはすでに論考の中で報告されている〔長井1997〕。2003年、愛媛大学考古学研究室が弓削島の遺跡踏査を継続する過程で、長井氏に同道して本遺跡を訪れ、その後は地表の観察が可能となる季節を選んで定期的に周辺を踏査し資料の蓄積を進めた。その結果、古墳時代前期にさかのぼる製塩土器が採集されること、港から坂道を登りきったところに存在する平坦地からも土器片が採集されることや、法面におびただしい数の被熱した花崗岩が露出していることがわかった。これらのことから包含層の遺物の供給源がこの平坦地にあると確信し、以後調査することを決定した。この地点が豊島明神遺跡である。

豊島明神遺跡は愛媛県越智郡上島町弓削豊島83番地に所在し、北緯34度13分57秒、東経133

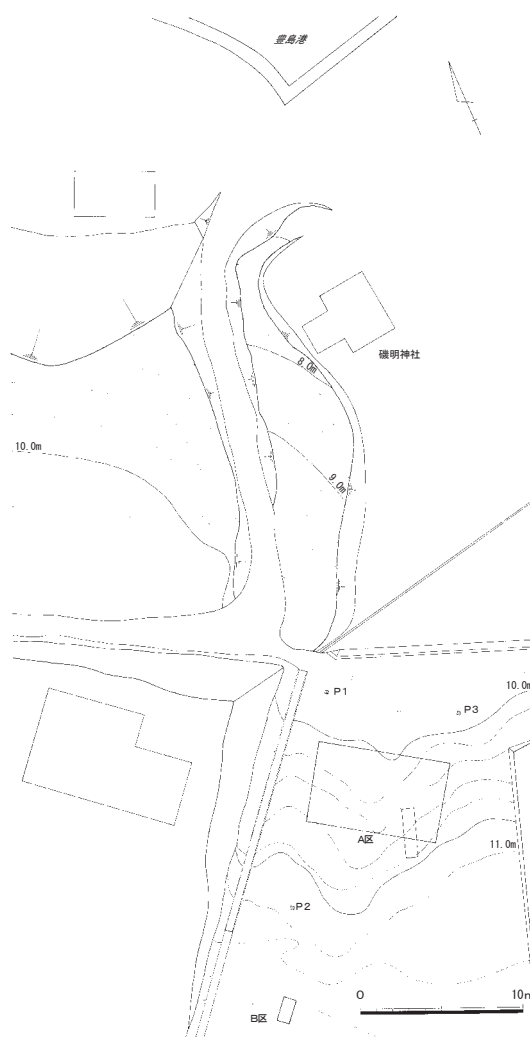


図4 豊島明神遺跡地形図

度15分32秒に位置する。磯明神社を前面に有することから通称明神と呼ばれている地域にある。1963（昭和38）年までは畑地で、周辺に人家が立ち並んでいたが、その後弓削島に移住するものが後を絶たず、家も取り壊されてしまった。現状は竹林に覆われた空き地である。その標高は約10.7 mであり、磯明神社より約4 m高い。この平坦地の北東部には削平されてできた一段低い平坦面があり、藪に覆われた空き家がある。また平坦地の南西部には一段高い盛土があり、貯水施設が設けられている。平坦地は南東方向に向かって、わずかな傾斜をもって高まりつつ細くのびており、その奥には繁茂した竹林と藪の中に空き家が点在している。

2006年6月に地中レーダー探査を実施し、その成果を受けて2007年8月、試掘調査を実施した〔石井編2008〕。その結果、地表下約70cmの5層まで現代の遺物を検出した。その下の6層が土師器のみを含む包含層にあたり、7層で土師器、脚台式製塩土器、コップ形製塩土器、花崗岩の被熱礫を大量に検出した。これにより古墳時代の製塩に関する遺構の存在と包含層の存在が想定されるようになり、本調査を実施することとなった。

（山梨千晶・内田優人）

2. 調査区の設定

地権者により調査許可を受けた範囲を伐開し、測量調査を実施し、等高線に直交する南北軸（P0-P1）を設定した。そしてこの軸を基準としながら、試掘トレンチの範囲を内包するように東西8m、南北5mの長方形を呈する調査区を設定し、これをA区とした。また調査可能範囲の南限における包含層の状況を確認するため南北3m、東西0.8mのB区を設定した。このトレンチも本来P0-P1ラインに平行して設定する予定であったが、現代の廃棄物や竹林の根を避けて設定したため南北軸には平行していない。

（村上恭通）

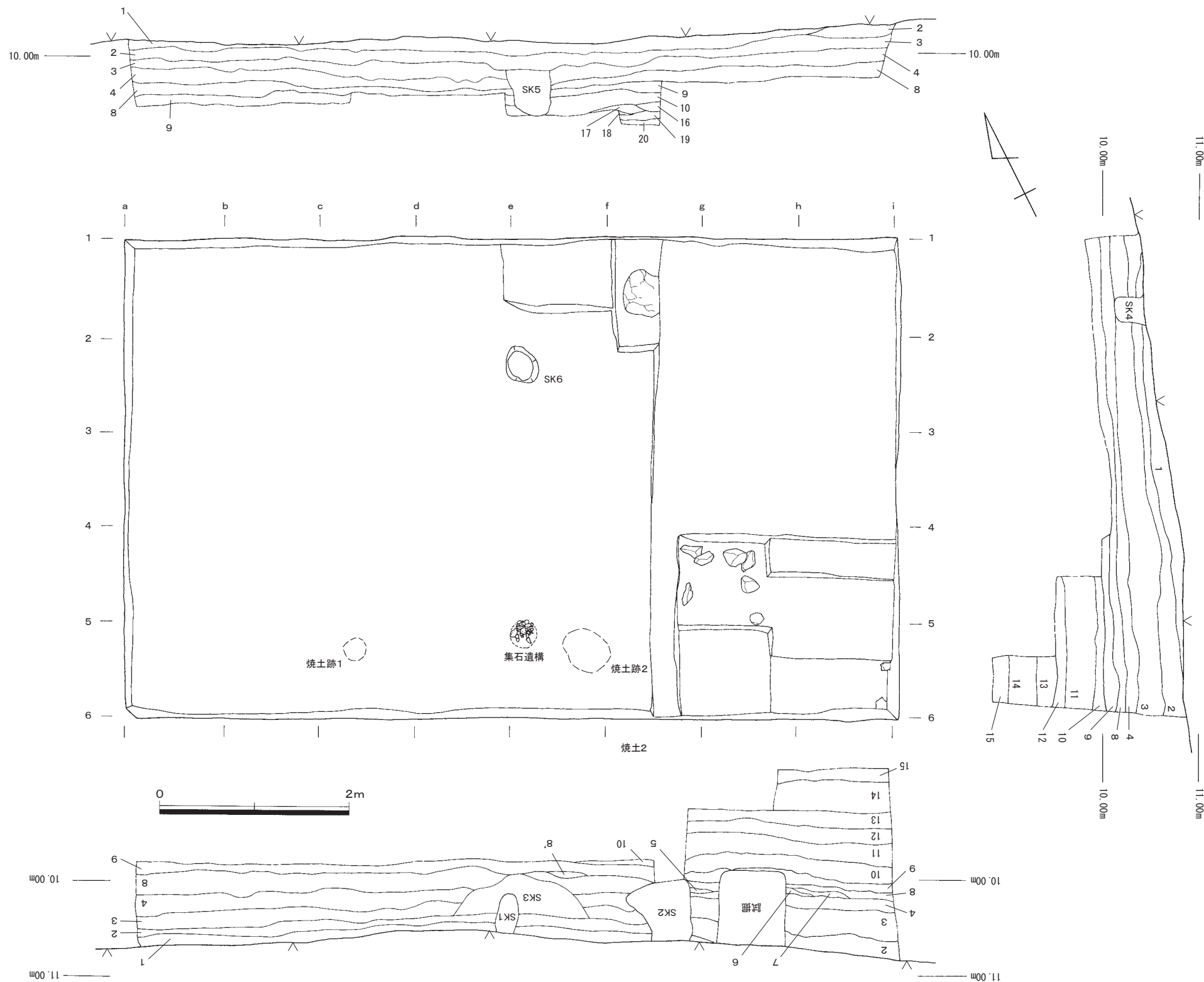
3. 調査の成果

（1）A区（図5）

A区は調査区の西北角を原点とし、東に1 mごとにa～iのポイントを設定し、南に1 mごとに1～6のポイントを設定した。調査区内のポイントはアルファベット小文字とアラビア数字の組み合わせで表現できるようにした。

①層序

A区では16層が確認できた。地表の等高線に反映されているように、表土層から6層までは東に高く、調査区中央部付近から西部にかけてほぼ水平となっている。6層、7層はA区の東南隅のみに認められ、この7層まではタイルなどの現代の遺物を含んでおり、試掘調査時の5層に相当することが判明した。



1層：表土層。 2層：黒褐色（7.5YR3/2）砂質土層。粘性、しまりともに弱く、2mm大の砂礫を多く含む。試掘時の2層に対応。 3層：暗褐色（10YR3/3）砂質土層。粘性、しまりともに弱く、砂礫の大きさが2層よりも細かい。試掘時の3層に対応する。 4層：褐色（7.5YR4/3）砂質土層。粘性がややあり。しまりも3層以上よりは強い。粗砂を多く含む。ガラス、タイルなど現代の遺物を多く含む。試掘時の4層に対応する。 5層：暗褐色（10YR3/3）砂礫土層。粘性、しまりともに弱く、径2mm大の砂礫を多く含む。やや保水性がある。南壁の東寄りでのみ認められるレンズ状に堆積する小規模な層である。 6層：黒褐色（10YR2/2）砂質土。粘性、しまりともに強い。花崗岩のパイラン土を含み、突き固めたように堅い。東南部のみで確認される。土器の小片とともに、微小な陶磁器片、コンクリート片が出土。 7層：暗褐色（10YR3/3）砂質土。粗砂を多く含む、粘性は弱く、しまりがあり、突き固めたように堅い。土器小片とともに現代のタイルが出土している。試掘時の5層に対応。なお、南壁中央部にレンズ状堆積の小規模な層が検出され、層順を勘案して7'層とした。 8層：黒褐色（7.5YR3/2）砂質土。粗砂を多く含む、粘性は弱く、しまりはやや強い。径2指頭大の炭化物が含まれている。土師器、製塩土器の出土量が多い。試掘時の7層に対応。 9層：黒褐色（10YR3/2）砂質土。黒みが強くなり、粘性がある。上面はやや起伏が認められる。木炭の含有が8層よりも多く、被熱礫も多く含まれる。土師器、製塩土器の破片を多く含んでいる。 10層：灰黄褐色（10YR4/2）砂質土。粘性は弱く、しまりは極めて強い。粗砂を多く含む、砂礫もわずかに含む。遺物は土器の小片をわずかに含む。 11層：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土。粘性がややあり、しまりも強い。被熱礫が多く含まれるものの、その他の遺物はみられない。 12層：暗オリーブ褐色（2.5YR3/3）砂質土であり、粗砂をわずかに含む。粘性、しまりともにあり、指頭大の木炭を点々と含む。縄文土器片が出土。 13層：暗灰黄色（2.5YR4/2）砂質土。花崗岩の大型風化礫を多く含む。 14層：暗灰黄色（2.5YR4/2）砂質土。粘性があり、保水性が強い。水分を多く含む。土器の微細な破片を含む。 15層：オリーブ褐色（2.5YR4/3）粘質土層。保水性が強い。1cm大の木炭片をまばらに含む。10cm程度の花崗岩もまばらに含まれる。縄文時代土器片がまとまって出土。 16層：灰黄褐色（10YR4/2）砂質土。粘性は弱く、しまりは極めて強い。粗砂を多く含む、砂礫もわずかに含む。 17層：暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土。粘性がややあり、しまりも強い。被熱 礫が多く含まれるものの、その他の遺物はみられない。 18層：暗オリーブ褐色（2.5YR3/3）砂質土であり、粗砂をわずかに含む。粘性、しまりともにある。 19層：黒褐色(7.5YR2/2)砂質土。粘性、しまりともに弱い。 20層：暗灰黄色(2.5YR4/2)砂質土。

図5 A区の平面図・土層図

8層は粗粒砂を含む黒褐色（7.5YR3/2）砂質土である。この層は調査区全体に広がっており、東から西にかけて、南から北にかけてわずかに傾斜している。遺物を大量に含んでいるが、東西方向ではe～i、南北方向では1～4の範囲に集中し、a～c、1～6の範囲では極端に遺物の出土量が減少する。出土遺物には土師器、脚台式製塩土器、コップ形製塩土器、土錘がある。試掘調査時の7層に相当する。

9層も黒褐色（10YR3/2）砂質土であるが、8層よりも黒みが強くなり、粘性が強くなる。本層は腐食土層と考えられる。木炭の含有量も8層より多くなり、被熱礫も多くなる。調査区南壁よりの中央部、e 5～6付近の調査中、8層と9層の層理面とくに礫が集中して出土することがわかり、集石遺構であると判断した。また集石遺構の東西には焼土跡が2カ所検出され、本層の上面が遺構面であることがわかった。遺物は集石遺構の北側、d～f、4～5の範囲でとくに集中しており、土師器、脚台式製塩土器が出土した。9層中の遺物出土量も多いが、東南隅で大型の脚台を有する製塩土器が出土した以外は、土師器、脚台式製塩土器の小片が多い。

A区東南部では10層以下の包含層を確認するために深く掘り下げた。10層は土器小片、被熱礫片をわずかに含むが、11層は被熱礫が多く含まれるものの、その他の遺物はみられなかった。そして12層の暗オリーブ褐色（2.5YR3/3）砂質土層から縄文時代後期の土器片が出土した。また本層は指頭大の木炭を大量に含んでいることもわかった。13層、14層も被熱礫片や木炭片を含むものの人工遺物は検出されなかった。15層のオリーブ褐色（2.5YR4/3）粘質土層から指頭大の木炭片や花崗岩の被熱礫を伴って縄文時代後期の土器片がまとまって出土した。

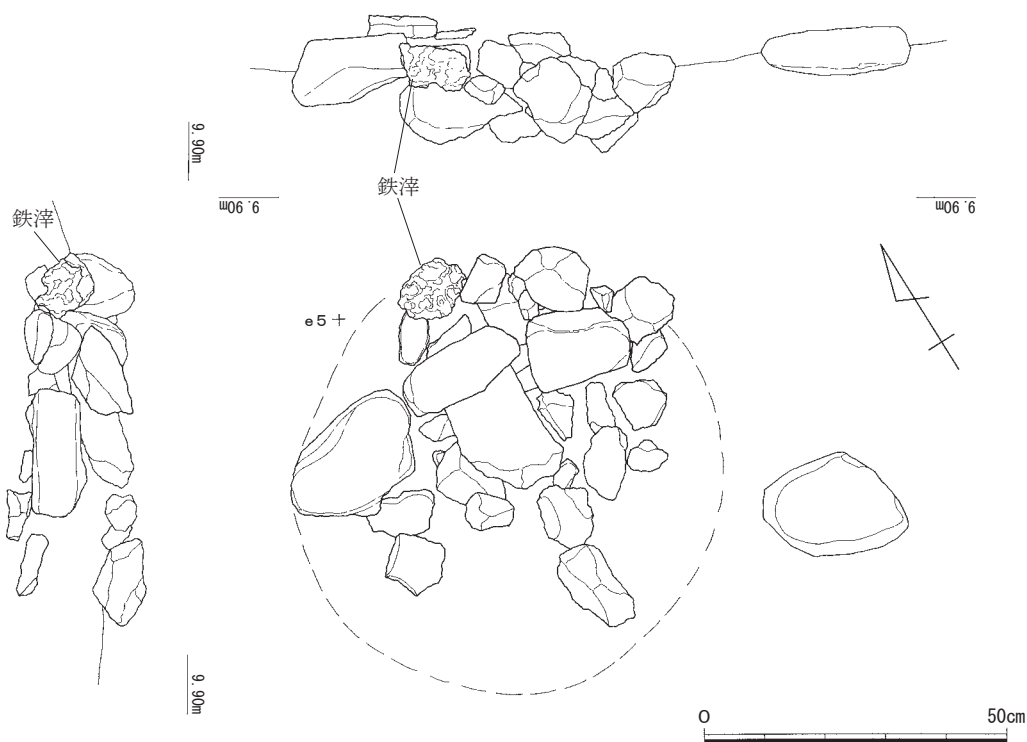


図6 集石遺構平面図・立面図

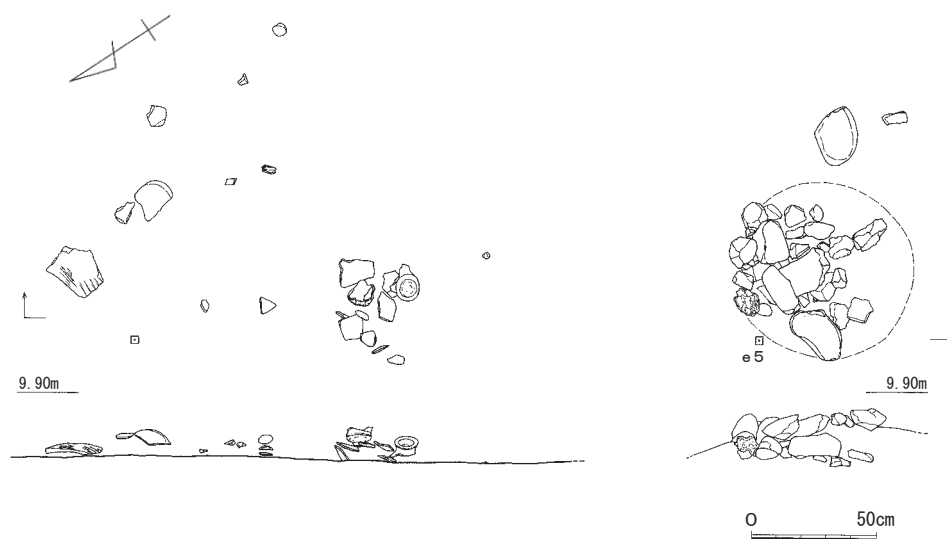


図7 集石遺構と共伴土器の出土状況

16層は調査中に水没したため、掘り下げを中断し、17層以下の様相については不明である。

②遺構

集石遺構（図6・7） ポイントe 5付近において、9層上面で検出された。検出時、集石と認識せずに礫を取り上げたために、東西74cm、南北72cmの範囲のみで集石を残すこととなったが、復元すると直径85cmの略円形の範囲に礫が集中していたことがわかった。集石として確認できた礫は30個であるが、精査前に廃棄した礫が約30点あることがわかり、想定範囲の中に約60個の礫が集められていたことになる。礫の大きさは最大で25cm×17cmを測り、最小で3cm×2cm程度である。破面が稜線として見える礫もあるが、基本的には直角礫と円礫である。

礫の材質は花崗岩、花崗岩中の脈石であるペグマタイト、その他である。花崗岩は被熱して劣化したものが多い。その他の礫は緑灰色を呈し、大きく成長した白い斑晶が数多く観察される礫であり、ほとんどが角の取れた円礫である。産地、産状は不明である。

集石の北西縁で鉄滓2点が礫とともに検出された。大型の1点は表面で確認され、その下から小型の1点が発見された。一種の供献鉄滓と判断される。

集石遺構から北に約1.5mの地点では1.5m×1.5mの範囲で脚台式製塩土器や表面にタタキ目を残す土師器がまとまって出土した。この土器群も層理面で明確に捉えられたものであり、集石遺構の時期と同じであると判断される。

焼土痕（図5） 焼土痕が2カ所検出された。1基はポイントf 5の南側に位置し、長径30cm、短径20cmの略楕円形である。1基はポイントc 5の南東にあり、直径12cmの略円形を呈する。いずれも黄橙色を呈し、その被熱の厚みは1cmにも及ばない。前者は集石遺構の15cm東にあり、後者は西80cmに位置する。9層上面で検出したことは確実であり、被熱礫を含む集石遺構との関連性が想定される。

その他（図5） A区では各所で1層、2層からの攪乱坑を確認できた。そのうちポイントe 2

の南に接するS K 6は8層の精査段階に掘り下げを開始した。その結果、覆土よりガラス瓶片、プラスチック容器片、義歯が出土したが、それらとともに完形の管玉が検出された。

(2) B区

B区は地表から約1.8m掘り下げ、14層を確認した。7層までが調査区のほぼ全体に広がっていることを確認した後、トレンチの北西隅を深く掘り下げ、14層までを確認した。6層が北西隅で厚くなっているため、上層の5層がやや北から南にかけて傾斜をもっているが、その部分を除くとおおむね水平堆積を見せている。

4層までは遺物の出土もなく、5層～7層、11層では土師器、土師質土器、製塩土器の小片が出土した。5、6層では花崗岩の被熱礫がまばらに出土し、11層は焼土粒を含んでいることが判明し

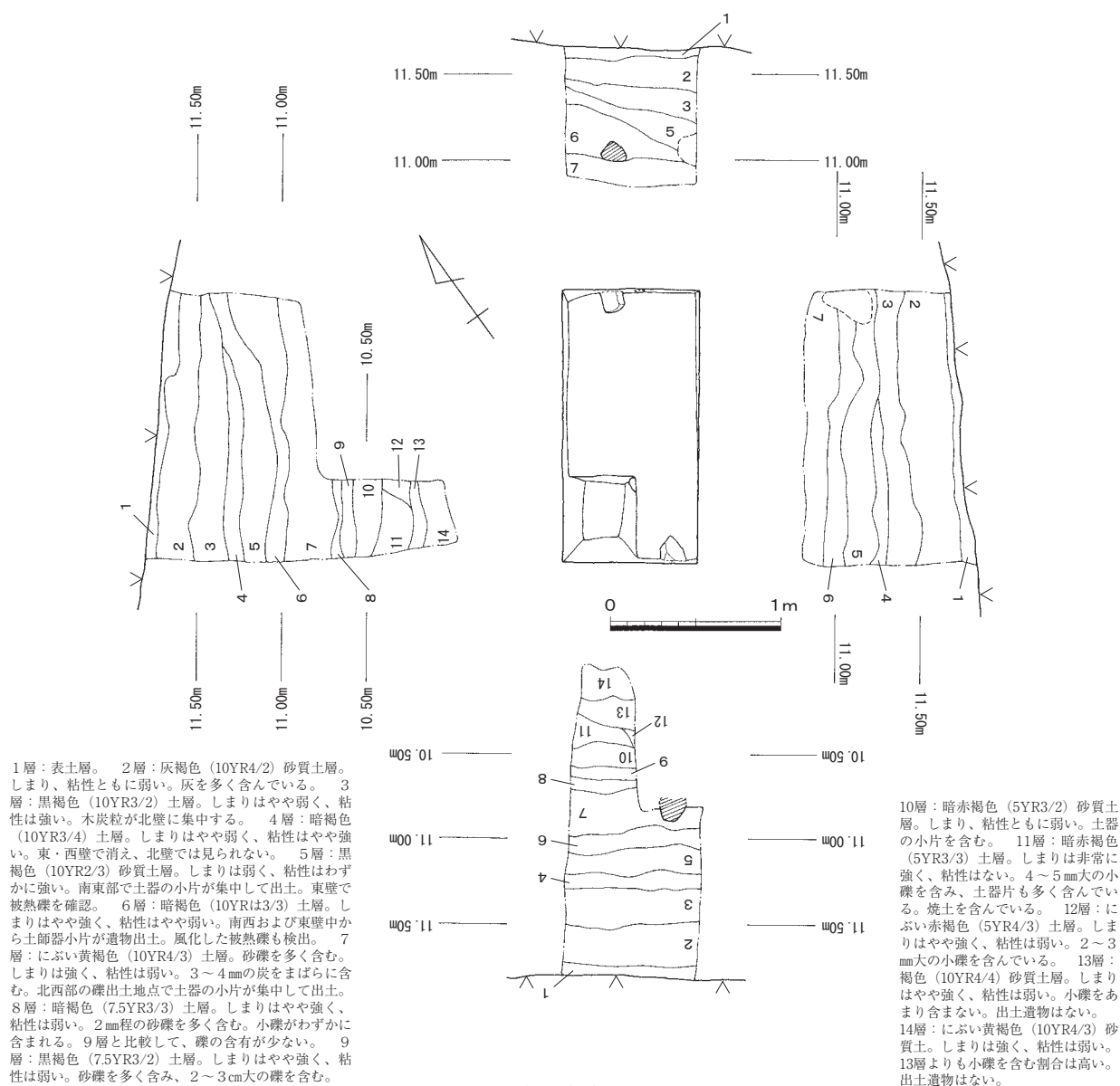


図8 B区の平面図・土層図

た。それ以外の層では遺物の出土がなく、また土質もA区とは異っており、A区の土層との対比は十分にできなかった。

(甲斐晶子・村上恭通)

【参考文献】

- 石井千絵里編2008『豊島明神遺跡・入津遺跡試掘調査報告書』愛媛大学法文学部考古学研究室
長井数秋 1997「芸予諸島の製塩土器」『古代学研究』第139号 古代学研究会

第4章 出土遺物

1. 土器・陶磁器

(1) 縄文土器 (図9)

1～13はA区東南部から出土した縄文土器片である。1、3～7、10、11は15層から、12は12層から出土している。

1は有文深鉢の口縁部片である。口縁に沿って沈線が施されており、口縁端部内面はやや肥厚している。外面、内面はともにナデ調整で、外面には縄文が施されている。中津式の中でもやや新しい段階に位置づけられるものと考えられる。

2～10は有文土器の胴部片である。3の外面には横方向に沈線が施されており、その上方は粗い

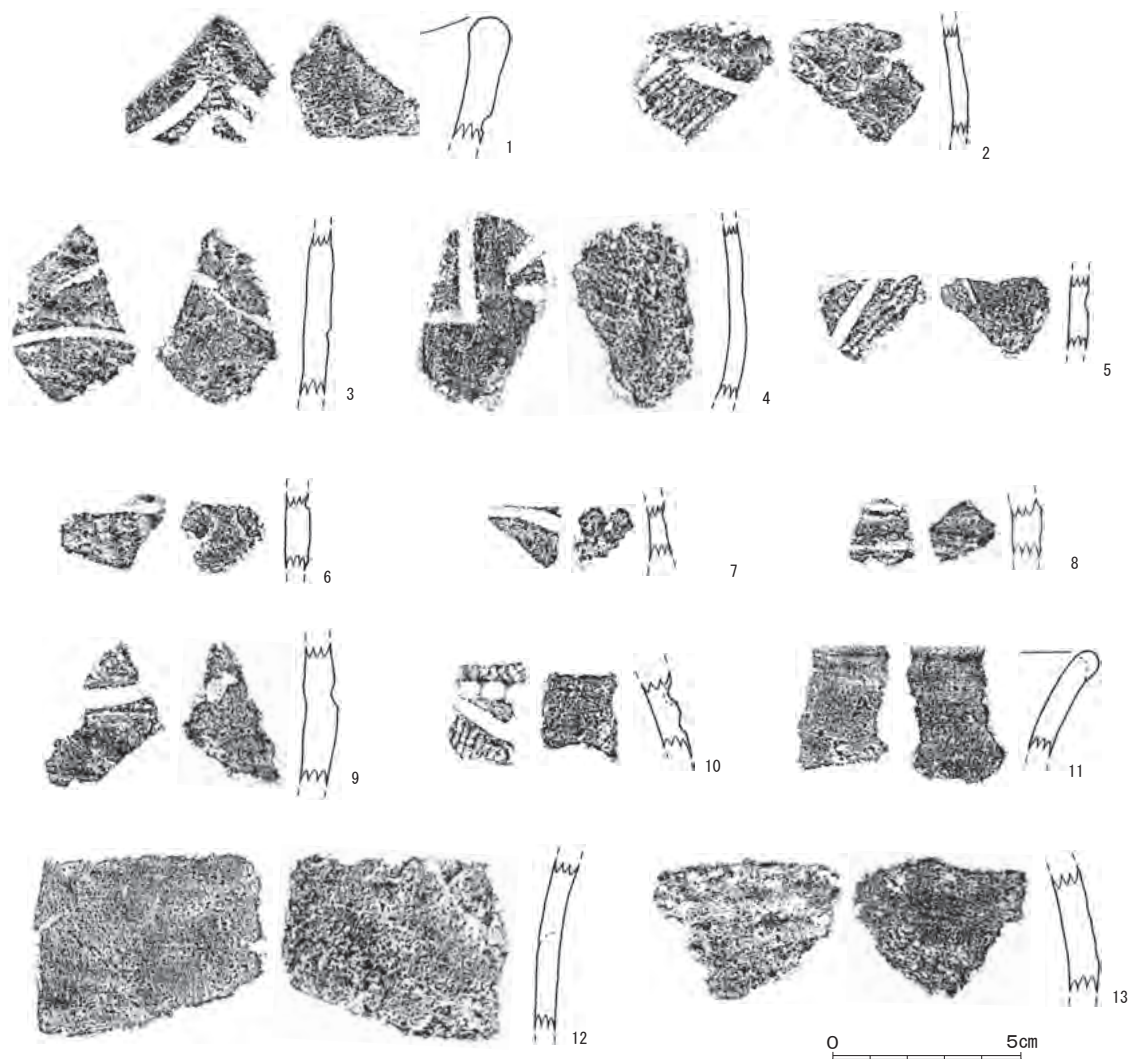


図9 包含層出土の縄文土器

ナデ調整で、棒状工具による削痕が斜め方向に複数入る。横走沈線の下方は、上方に比べて丁寧にナデられている。4の外面にも沈線が施されており、沈線で区画されている中はやや粗いナデで調整されているが、区画外はそれに比べて丁寧にナデられている。9は沈線の下にかすかに横方向の稜線が入っており、胴部屈曲部の破片であると考えられる。その稜線以下は比較的に丁寧にナデられている。10の外面には横走沈線と斜位に走る沈線が施されており、横走沈線内には連続刺突が見られる。横走沈線上部はR L縄文、斜位に走る沈線の下はL R縄文が施されている。これらは小片のため判断が難しいが、2～8は中津式、9、10は縄文後期前葉～中葉に位置づけられるものと考えられる。

11は深鉢か鉢の口縁部片であり、口縁端部外面がやや肥厚している。外面、内面ともに丁寧にナデられている。縄文後期前葉～中葉に位置づけられる。

12・13は無文土器の胴部片である。12の外面はやや丁寧なナデ、内面はナデにより調整されている。13の外面は粗いナデ、内面はナデによって調整されている。いずれも縄文時代後期のものと考えられる。

(福永将大)

(2) 土師器 (図10～15)

① **A区9層出土土器** (図10) 1～3は甕で、1、2は口縁部片、3は底部片である。いずれも集石遺構の北側で、脚台式製塩土器とともに出土した。1は口縁部から肩部にかけての破片で、復元頸部径14.4cmを測る。外反する口縁部からやや張りのある肩部へと続き、胴部最大径は肩部周辺にあり、口径よりも大きい。外面にはタタキ調整が認められ、内面にはハケメ調整が明瞭に残る。焼成は良好で、外面の色調は浅黄橙色 (10YR8/4) であり、内面は浅黄橙色 (10YR8/4) を呈す

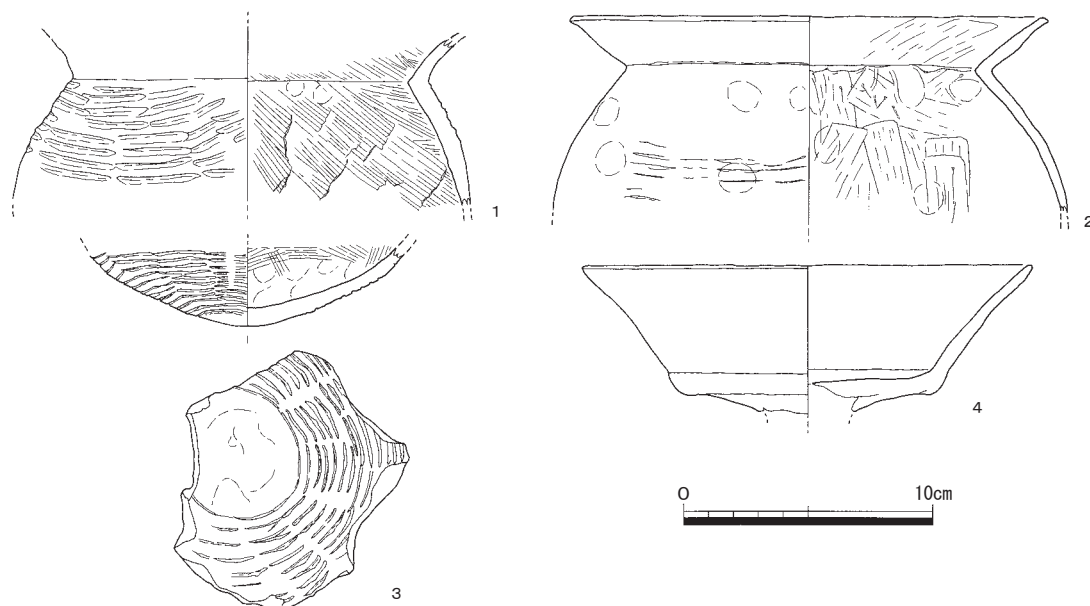


図10 集石遺構に伴う土師器

る。胎土には最大3mm程度の長石などの砂粒を少量含む。2は口縁部から肩部にかけての破片で、復元口径19.1cmを測る。口縁部は外方へ直線的にのび、肩部にはやや張りがあり、肩部周辺に胴部最大径をもつ。口径よりも胴部最大径が大きい。外面はナデを施し、タタキ目も残る。内面はハケメ調整の後ナデが全面に施されている。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤色（10R5/6）を呈する。胎土には最大3mm程度の長石などの砂粒を少量含む。3は丸底の底部であり、外面にはタタキが左から右方向へ施されている。内面はハケメ調整が施され、底部付近には指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土には1mm程度の長石を多く含む。

4は高坏の坏部片であり、復元口径18.0cm、残存高5.6cm、接合部径4.4cmを測る。ほぼ水平な坏底部から、屈曲して明瞭な稜を有し、大きく外反する口縁部へといたる。口縁端部は丸くおさまる。口縁部と坏底部との接合部には、接合を促すための凹凸が認められる。内外面ともにナデ調整が施され、一部にハケメ調整が残る。坏部と脚部の接合方法は底部が欠失しているため不明である。焼成は良好で、色調は内面が橙色（5YR7/8）、外面が明黄褐色（2.5YR5/8）を呈する。口縁部の内外面に赤色顔料が一部認められ、坏底部内外面に黒斑が認められる。

②A区8層出土土器（図11～14） 図11は壺および甕である。5は復元口径12.2cmを測り、やや外反気味に立ちあがる口縁で、端部は丸くおさまり、わずかに内側へ肥厚する。内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好で、色調は内面が明黄橙色（10YR7/6）、外面がにぶい黄橙色（10YR6/3）を呈する。胎土には石英と長石を含む。6・8は二重口縁壺である。6は頸部片で復元径15.4cmを測る。内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好で、色調は内面が橙色（5YR7/6）で、外面は橙色（7.5YR7/6）、断面は灰黄色（2.5Y6/2）である。胎土は粗く、最大5mm程度の長石を含み、金雲母もまばらにみられる。8は復元口径23.8cmを測る大型壺の口縁部片で、屈曲部から緩やかに外反しながら上外方へのびる。口縁端部には明瞭な面をもつ。内外面ともにナデ調整が施され、外面に指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は内面がにぶい橙色（7.5YR7/4）で、外面はにぶい褐色（7.5YR6/3）、断面は褐灰色（10YR5/1）である。胎土は粗く、最大5mm程度の長石などの砂粒を含む。7は口縁部から肩部にかけての甕の破片で、復元口径10.4cmを測る。口縁部は上外方へやや内湾気味にのび、肩部はやや張りがある。内面にハケメ調整が施されている。焼成は良好で、色調は内面がにぶい黄橙色（10YR6/4）で、外面が橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土はやや粗く、最大2mm程度の長石などの砂粒を少量含む。9は復元頸部径9.4cmを測る甕か壺の頸部片である。いかり肩の肩部で、内外面ともにナデ調整が施され、指頭圧痕が残る。色調は内面がにぶい黄橙色（10YR7/4）で、外面は褐灰色（7.5YR5/1）を呈する。胎土は1～3mm程度の石英をまばらに含む。10は復元口径15.2cmを測る甕の口縁部である。なで肩の肩部から「く」字状に屈曲する口縁で、口縁部中位がわずかに肥厚し、端部は面をなす。内外面ともに横方向のナデ調整が施されている。内面の屈曲部には指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は内面が橙色（5YR6/6）で、外面はにぶい褐色（7.5YR5/3）、断面は褐灰色（7.5YR4/1）である。胎土は粗く、最大3mm程度の長石などの砂粒を含む。11は復元口径

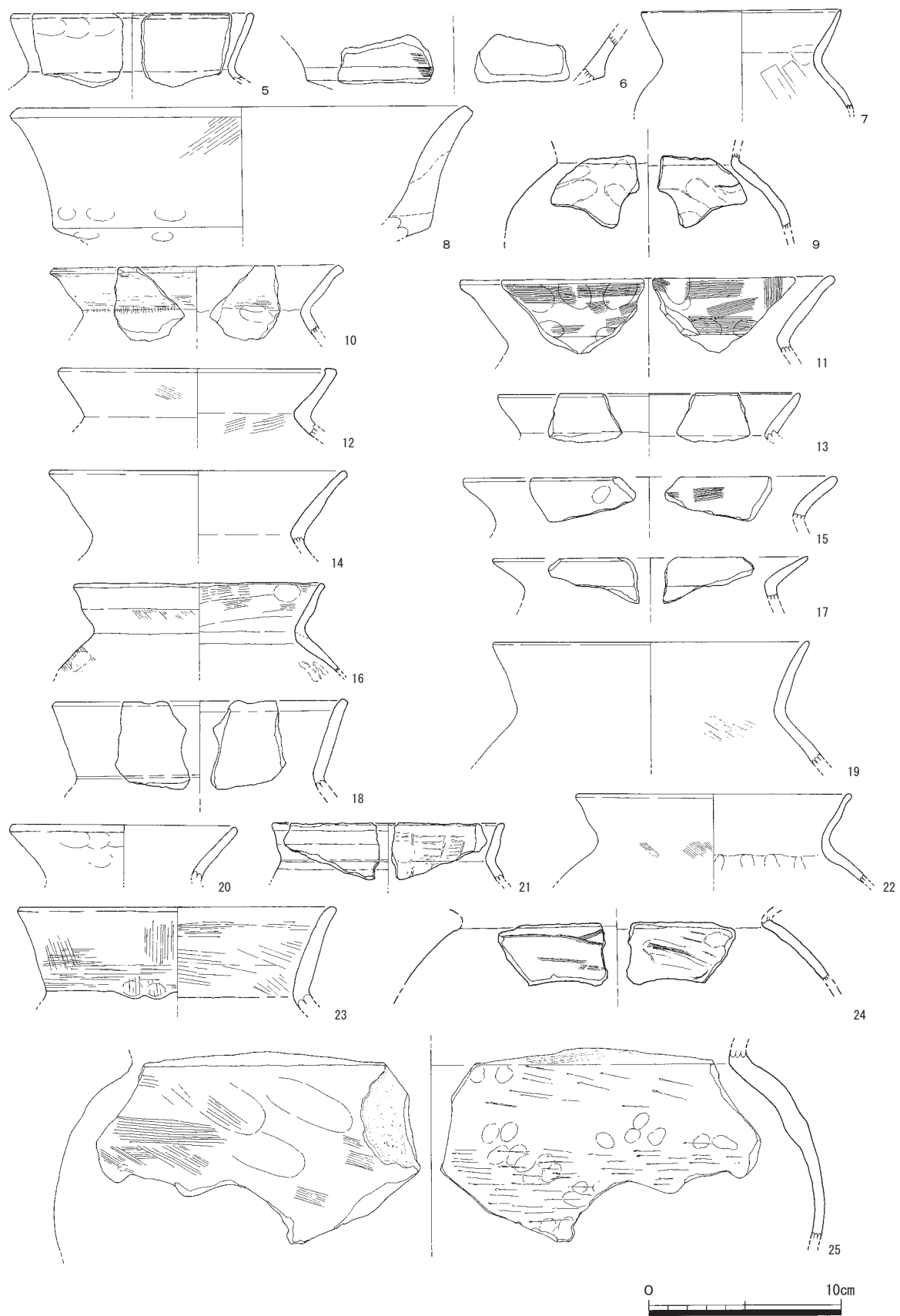


図11 包含層出土の土師器 1

19.4cmを測る甕の口縁部である。口縁は「く」字状に屈曲しており、口縁部中位がわずかに肥厚し、端部は丸くおさまる。内外面ともに横方向のナデ調整が施されている。内面の屈曲部および外面口縁端部には指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は内面がにぶい橙色（7.5YR9/4）で、外面は褐灰色（7.5YR4/1～6/1）を主とし、浅黄橙色（7.5YR8/3）の部分がみられる。胎土は最大3mm程度の長石などの砂粒を含む。12は復元口径14.2cmを測る甕の口縁部である。口頸部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚し面をなす。内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好で、色調は内面が灰黄色（2.5Y6/2）で、外面はにぶい黄色（2.5Y1/4）を呈する。胎土は1mm程度の長石、金雲母をまばらに含む。13は復元口径15.8cmを測る甕の口縁部である。上外方へ直線的にのび、端部は丸くおさまる。14は復元口径15.2cmを測る甕の口縁部である。「く」字状に屈曲する口縁で、口縁部中位がわずかに肥厚し、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好で、色調は内外面ともににぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。胎土は1mm程度の長石、金雲母をまばらに含む。15は復元口径19.4cmを測る甕の口縁部である。上外方へ直線的に立ち上がり、端部は丸くおさまる。16は復元口径13.0cmを測る甕の口縁部である。「く」字状に屈曲する口縁で、口縁部中位がわずかに肥厚し、端部は面をなす。内外面ともにハケメ調整の後ナデが施されている。内面の一部には指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は内外面ともに浅黄橙色（10YR8/4）で、外面に一部黒斑が認められる。胎土は最大2mm程度の長石などの砂粒を含む。17は復元口径16.4cmを測る甕の口縁部である。上外方へ直線的にシャープに立ち上がり、端部は丸くおさまる。焼成は良好で内外面ともに黄褐色を呈する。18は復元口径14.4cmを測る甕あるいは壺の口縁部である。口縁はやや外反気味に立ち上がり、端部には面をもつ。内外面ともにハケメ調整の後ナデが施されている。焼成は良好で、色調は内外面ともに明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土には石英と長石を含む。19は復元口径16.2cmを測る甕の口縁部である。なで肩の肩部からやや外反気味に立ち上がる口縁部を有し、その端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好で、色調は内面がにぶい黄色（2.5Y6/3）で、外面は浅黄橙色（2.5Y7/4）を呈する。胎土には2mm程度の長石などの砂粒を多量に含む。20は復元口径11.9cmを測る甕の口縁部である。緩やかに外反しながら上外方へのび、端部は丸くおさまる。21は復元口径12.0cmを測る甕の口縁部である。やや外反気味に立ち上がる短い口縁で、口縁部中位がわずかに肥厚し、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施され、内面には指頭圧痕が顕著に残る。焼成は良好で、色調は内面が橙色（2.5YR1/8）で浅黄橙色（10YR8/4）を呈する。23は復元口径16.6cmを測る甕の口縁部である。やや外反気味に立ち上がる口縁をもち、端部は丸くおさまる。内外面ともにハケメ調整の後ナデが施されている。頸部内面付近に指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は内外面ともに明赤褐色（5YR5/6）を呈する。胎土は粗く、最大3mm程度の長石などの砂粒を多く含み、金雲母をわずかに含む。24は復元頸部径16.0cmを測る甕の頸部片である。内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好で色調は内外面ともに橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土には石英と長石を含み、まばらに金雲母を含む。25は復元頸部径32.3cm、胴部最大径40.2cmを測る大型の壺である。肩が張り、外面はナデ調整で部分的に指頭圧痕が残り、内面は横位のケズリが顕著にみられる。外面には

焼成破裂痕が認められる。

なお8層でもタタキ目を残す甕の胴部片、底部片が出土しているが、すべて小片であり、また摩滅が著しく、図化にはいたらなかった。

図12は8層出土の高坏であり、26～30が坏部及び坏底部片、31～46が脚部片である。26は復元口径20.0cm、残存高6.0cmを測る口縁部である。やや内湾気味に立ち上がる坏底部から、屈曲して不明瞭な稜を有し大きく外反する口縁部へといたる。口縁端部付近でわずかに傾斜を変え、内面に不明瞭な稜を有する。端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施されている。坏部と脚部の接合方法は底部が欠失しているため不明である。外面に赤色顔料の塗布が認められ、内面には黒斑がみられ、とくに口縁端部付近が顕著である。胎土は最大3mm程度の長石などの砂粒を含み、金雲母もわずかに含む。27は復元口径17.0cm、残存高4.9cmを測る口縁部である。やや内湾気味に立ち上がる

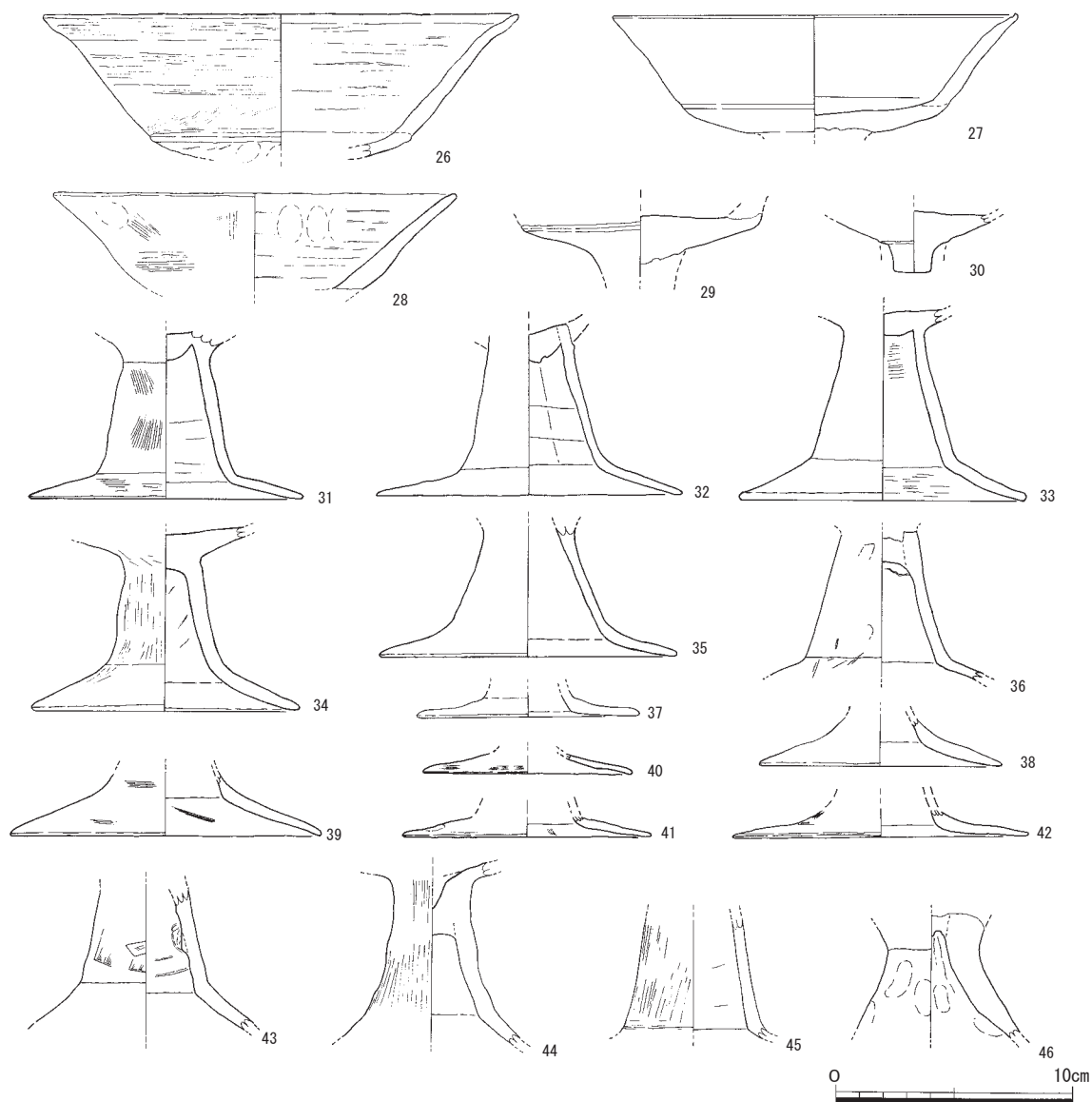


図12 包含層出土の土師器 2

坏底部から、屈曲して不明瞭な稜を有し、大きく外反する口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめつつ、わずかに上方へつまみ出される。内外面ともにナデ調整が施されている。坏部と脚部の接合方法は底部が欠失しているため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色（5YR7/8）を主とし、部分的に明赤褐色（2.5YR5/8）を呈する。口縁部の内外面に赤色顔料（2.5YR4/8）が部分的に認められる。胎土は精緻で最大2mm程度の長石などの砂粒を少量含む。28は復元口径17.0cm、残存高4.0cmを測る口縁部片である。大きく外反する口縁部で、口縁端部は丸くおさまる。外面はナデ調整、内面はハケメ調整の後、ナデ調整が施されている。内外面ともに指頭圧痕が残る。焼成は良好で、胎土には最大5mm程度の長石などの砂粒を多く含む。

29は復元底径10.0cmを測る高坏底部片である。口縁部は欠失しているため不明であるが、坏底部との接合部分にわずかな稜が認められる。坏部と脚部の接合は、坏底部に筒状の脚柱部を接合し、粘土によって接合部を補強したうえで、さらに脚柱内部に粘土塊が挿入されている。内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好で、胎土は精緻で最大3mm程度の長石などの砂粒を少量含む。30は残存高2.7cmの坏の底部片である。やや内湾気味に立ち上がる底部で、欠失している脚柱部内面に挿入されるほぞが作り出されている。焼成は良好で、色調は橙色（2.5YR7/8）である。胎土は最大2mmの長石などの砂粒を多く含む。

31は復元脚部径11.6cm、残存高7.0cmを測る脚部である。中位がやや膨らむ脚柱部から緩やかに屈曲し裾部へと続き、端部は丸くおさまる。坏部は口縁部が欠失しているため不明である。外面はナデ調整が施され、内面はハケメ調整の後、ナデ調整が施されている。坏部と脚部は、接合した後に下方から粘土塊を充填して押し込んでおり、指頭痕が顕著に残る。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色（2.5YR6/8）を呈する。外面に赤色顔料（赤褐色（2.5YR4/8））が認められる。胎土は精緻で最大2mm程度の長石を少量含む。32は復元径12.8cm、残存高7.2cmを測る脚部である。「ハ」字状に開く脚柱部からやや強く屈曲して裾部へと続き、端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施されている。脚柱部内面に突起が認められ、坏部と脚部を接合した後に下方から粘土塊を挿入して補強したものと考えられる。色調は内外面ともに明赤褐色（2.5YR5/8）であり、内外面の一部に赤色顔料（赤色（10R5/8））が認められる。胎土は精緻で、最大2mm程度の長石などの砂粒を少量含む。33は復元脚部径12.0cm、残存高8.0cmを測る脚部である。「ハ」字状に開く脚柱部からやや強く屈曲し裾部へと続き、端部は丸くおさまる。坏部は口縁部が欠損しているため不明であるが、坏底部はやや内湾気味に立ち上がる。外面はナデ調整が施され、内面はハケメ調整の後、ナデ調整が施されている。坏部と脚部は接合した後に下方から粘土塊を充填した後、指頭等をつぶしたうえでナデ調整を施している。焼成は良好であり、色調は内面が明赤褐色（2.5YR5/8）であり、外面が赤色（10R5/8）である。外面は赤色顔料（赤色（10R4/8））による発色である。胎土は精緻で最大5mm程度の長石を少量含む。34は復元脚部径12.2cm、残存高7.7cmを測る脚部である。中位がやや膨らむ脚柱部から緩やかに屈曲し裾部へと続き、端部は丸くおさまる。坏部は口縁部が欠損しているため不明であるが、坏底部はやや内湾気味に立ち上がる。外面はナデ調整が施され、内面はハケメ調整の後ナデ調整が施されている。坏部と脚部は、接合した後に下方から粘土塊を充填し指

頭によりつぶしてナデ調整を施している。焼成は良好で、色調は内外面ともに橙色（2.5YR6/8）を呈する。外面に赤色顔料（赤褐色（2.5YR4/8））が認められる。胎土は精緻で最大2mm程度の長石を少量含む。35は復元脚部径12.4cm、残存高5.4cmを測る脚部である。「ハ」字状に開く脚柱部から緩やかに屈曲し裾部へと続き、端部は丸くおさまる。調整は内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好であり、色調は内面が橙色（5YR7/8）であり、外面が橙色（5YR7/8）を呈する。外面にはほぼ全面および内面裾部に赤色顔料（赤色（10R5/8））が認められる。胎土は精緻で最大5mm程度の長石粒を少量含む。36は残存高5.8cmを測る脚部片である。「ハ」字状に開く脚柱部からやや強く屈曲し裾部へと続く。坏部は口縁部が欠失しているため不明である。坏部と脚部は、接合した後に下方から粘土塊を充填し指頭等でつぶして、その後ナデ調整を施したものと考えられる。調整は内外面ともにナデ調整が施されている。焼成は良好で、胎土は1mm程度の長石粒を多く含む。

37～42は脚底部片である。脚柱部と裾部の境界となる屈曲部の位置が高いもの（38・39）と低いもの（37・40～42）がある。端部は全て丸くおさまるが、42のようにシャープなものもみられる。43～46は脚柱部片である。43は「ハ」字状に開く脚柱部から緩やかに屈曲し裾部へといたる。焼成は良好で、胎土はやや粗く最大3mm程度の長石粒を多く含む。44は残存高7.5cmを測り、筒状の脚柱部から緩やかに屈曲し裾部へといたる。坏部は口縁部を欠失しているため不明であるが、坏底部はやや内湾気味に立ち上がる。内外面ともにハケメ調整の後、ナデ調整が施されている。坏部は欠失しているものの、脚柱部との接合部にくぼみが認められることから、坏部と脚部は、接合した後に下方から粘土塊を充填し指頭により押し込まれたものと考えられる。焼成は不良で、色調は内面が浅黄橙色（10YR8/4）であり、外面は黄橙色（10YR8/6）である。胎土は粗く、最大5mm程度の長石などの砂粒を多く含む。45は「ハ」字状に開く脚柱部から緩やかに屈曲し裾部へといたる。焼成は良好で、胎土は粗く、最大2mm程度の長石粒をわずかに含む。46は「ハ」字状に開き、坏部との接合部には粘土塊を充填し、指頭でつぶしてナデ調整を施した痕跡が認められる。内外面ともに指頭圧痕が残り、内面にはシボリ痕が認められる。焼成は良好で、胎土は粗く最大3mm程度の石英、長石を多く含む。

図13は鉢であり、器形には碗形や浅鉢形などバリエーションがある。47は復元口径8.5cmを測る

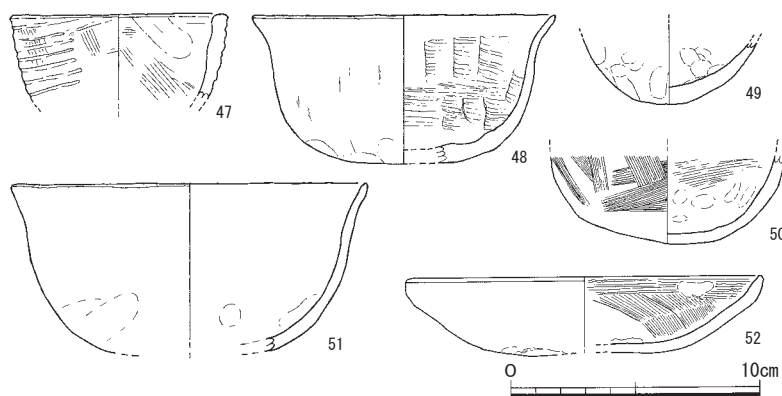


図13 包含層出土の土師器 3

口縁部である。胴部から上外方に立ち上がり、端部には面をもつ。外面にはタタキ調整が認められ、内面はハケメ調整が施され、口縁端部には指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は内面がにぶい橙色（7.5YR6/4）、外面がにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈する。胎土はやや粗く、2mm程度の石英をまばらに含む。48は復元口径12.1cm、器高5.9cmを測る鉢で1/2程度残存している。平底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部付近で屈曲し、端部は丸くおさまる。外面はナデ調整、内面はハケメ調整が認められる。底部付近には焼成破裂痕が認められる。焼成は良好で、色調は内面が橙色（7.5YR6/6）、外面が明黄褐色（10YR6/6）を呈する。胎土は粗く、最大3mm程度の長石を多く含む。49は底部片であり、残存高2.4cmを測る。やや尖底気味で内外面ともに成形時の指頭圧痕が顕著に残る。外面にはナデ調整が施されている。焼成は不良で、内面はにぶい黄橙色（10YR7/2）、外面は灰黄色（2.5YR7/2）を呈する。胎土は最大5mm程度の長石粒を含む。小型壺の底部の可能性も考えられる。50は残存高3.5cmを図る底部片で、丸底を呈する。外面は不定方向のハケメ調整で、底部直下はナデ調整が施されている。内面にはナデ調整がみられるが、底部付近にはみられず指頭圧痕のみが残る。焼成は良好で、内外面ともに橙色（5YR6/8）を呈する。外面の一部に赤色顔料が認められる。胎土は最大5mm程度の長石粒を含み、金雲母をわずかに含む。小型壺の底部の可能性もある。51は復元口径14.2cm、器高7.0cmを測る鉢である。平底の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部付近でわずかに屈曲し、端部は丸くおさまる。外面は底部付近にハケメが残るが、全体的にナデ調整が施されている。内面はナデ調整が施されており、底部付近に指頭圧痕が残る。焼成は良好であり、色調は内外面ともに明赤褐色（2.5YR5/6）を呈する。胎土は粗く、最大4mm程度の白色粒などの砂粒を含む。

52は復元口径14.4cm、器高3.0cmを測る皿である。わずかにくぼむ底部をもち、口縁部はわずかに外側に向けて立ち上がる。端部は丸くおさまられている。内外面ともにハケメ調整の後、ナデ調整が施されており、底部付近には内外面ともに指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は内面がにぶい赤褐色（5YR4/6）、外面は口縁部付近がにぶい赤褐色（5YR4/4）を呈する。胎土には最大3mm程度の長石粒を含む。

③小結

集石遺構を伴う9層上面あるいは9層中から出土した土師器にはタタキ目を顕著に残す甕や坏底部と体部との間に明瞭な屈曲部をもつ高坏がある。時期は布留0式～1式の範囲におさまると考えられる。一方、8層出土の土師器は11のように口縁端部が内側に肥厚する甕や坏部の屈曲がやや不明瞭になる高坏など、9層より明らかに新相を呈している。今回の発掘調査では須恵器が全く出土しておらず、須恵器がこれらに共伴するかどうか論点になろうが、およそ布留4式に併行する土器群が主体と考える。また8層における高坏出土量の多さは注目される。

（亀澤一平）

（3）手捏ね土器（図14）

口径5.8cm、器高2.7cmを測り、2/3程度残存する。丸底の底部で、口縁部は内湾しながら立ち

上がり端部は丸くおさまる。内外面ともにナデ調整が施されているが指頭圧痕が顕著に認められる。焼成は良好で、色調は内面が灰褐色（7.5YR4/2）、外面は橙色（7.5YR6/6）を呈する。胎土は粗く、1mm程度の長石粒を含み、また最大3mm程度の金雲母をまばらに含む。A区7層より出土した。

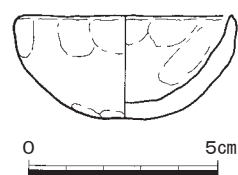


図14 手捏ね土器

（亀澤一平）

（4）製塩土器（図15）

1～11は脚台式製塩土器であり、12～14はコップ形製塩土器である。14以外はすべてA区出土品である。

①脚台式製塩土器

脚台式製塩土器はA区全体で脚台片が約30点が出土しており、そのうち8層出土品が19点、9層出土品が4点である。1は4層、2～7は8層、8～11は9層より、それぞれ出土している。その

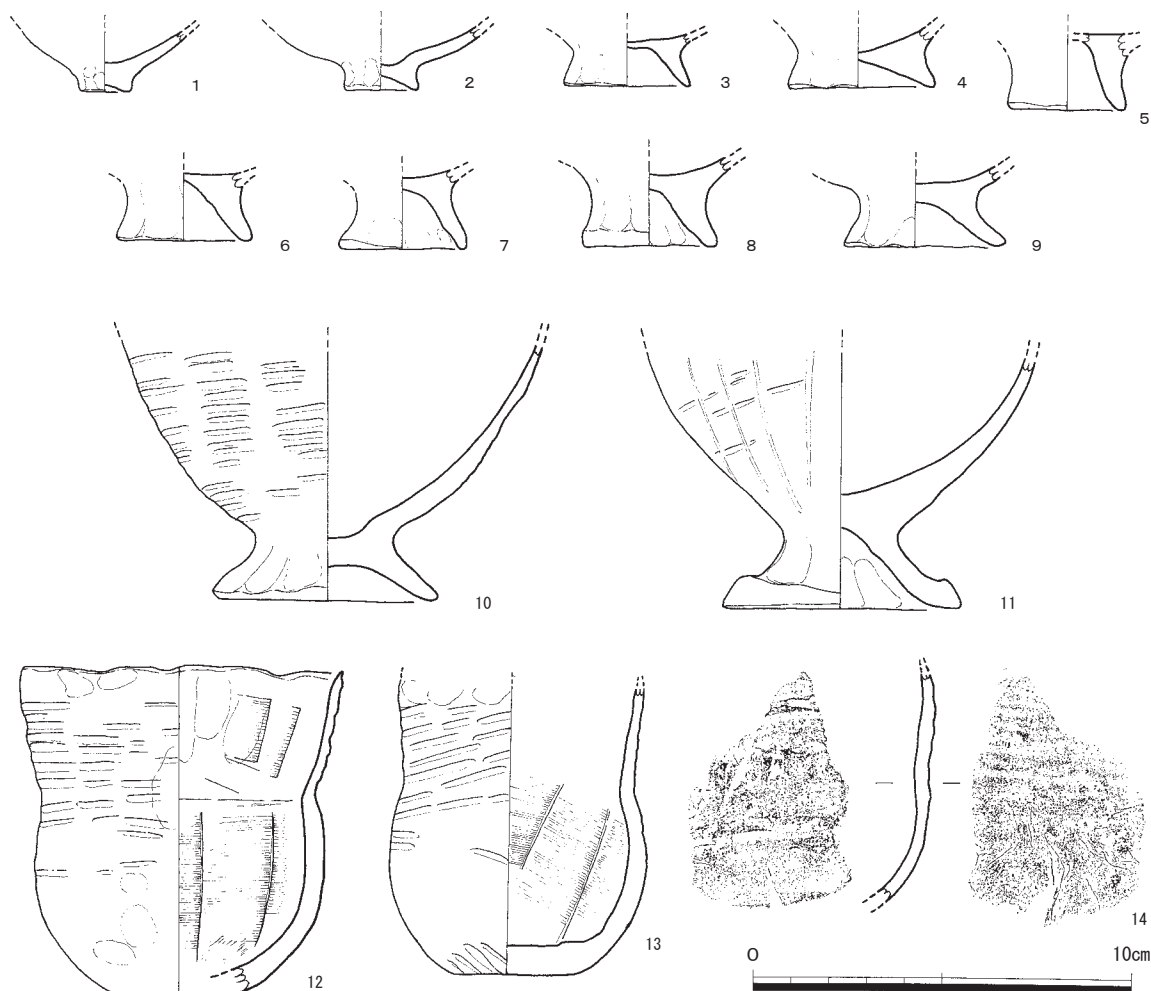


図15 製塩土器

うち8、10は集石遺構から北へ1.5m～2mの範囲の中で出土し、11は調査区東南隅の9層中より出土した。B区でも脚台、体部の小片が数点出土している。

1は現存高1.7cm、脚台底部径1.4cmを測る小型製塩土器の底部である。胎土は精良で、砂粒等の混和材がみられない。焼成がamai。2は残存高1.7cm、脚台底部径2.0cmを測る。胎土は精良で、微小な石英のほか、金雲母がみられる。焼成は良好である。3は残存高1.4cm、脚台底部径2.4cmを測る。胎土は精良であり、胎土には石英、長石粒を多量に含み、金雲母もまばらに含んでいる。4は残存高1.6cm、脚台底部径3.8cmを測る。他の資料に比較して、底部の厚みが厚く、脚台部内面の中央部から底部にかけて直線的にのびる特異な形態を呈している。5～8は脚台底部径が3.2～3.6cmに収まり、1～3に比較して脚台の器壁も厚く、脚台高も高い一群である。胎土は精良で、石英、長石を含み、雲母もまばらに含んでいる。9は残存高2.1cm、脚台底部径4.4cmを測る。胎土は精良であり、焼成も良好である。10は残存高6.9cm、坏部直径11.9cm、脚台底部径6.0cmを測る。体部にはタタキ目を顕著に残し、部分的にナデ調整が行われている。脚台は底部に向けて大きく直線的に広がる。胎土には長石粒を多く含み、焼成はややamai。11は残存高6.9cm、坏部直径10.2cm、脚台底部径6.2cmを測る。タタキ目はかすかに見られる程度である、その上を丁寧にナデ、さらに暗文風の細いナデが施されている。底部はやや湾曲気味に広がり、その端部は折り曲げて厚く作り、安定感がある。

8層、9層出土の脚台底部には煎熬の際に被熱した痕跡が観察される資料は2点であり、その他は被熱痕跡がない。二次被熱のない脚台が多いという点がA区出土品の特徴といえる。

②コップ形製塩土器

12、13はA区8層、14はB区6層より出土した。12は全体の1/2程度残存しており、底部を欠いている。丸い体部から屈曲してやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に整えられている。外面には横位のタタキ目が全体に認められ、屈曲部から底部にかけては丁寧にナデ消されている。内面には横位の細かいハケメ調整が回転しながら施されている。底部は丸底になると推測される。残存高9.0cm、口径8.6cmを測る。13は全体の1/2程度残存しており、口縁端部を欠いている。底部は平底であり、やや丸みをもった体部からわずかに傾きを変え直立気味に口縁部にいたる。外面にはやや斜め方向のタタキ目が全体に認められ、下半部は丁寧にナデ消されている。内面は下半部は斜め方向の細かいハケメが認められ、上半部は丁寧にナデ消されている。残存高7.5cm、胴部最大径6.8cmを測る。12、13ともに胎土は精良であり、焼成も良好である。14は表面の摩滅が著しく、うっすらとタタキ目が認められる。胴部中央部でわずかに径をすぼめ、わずかに内湾しながら口縁部にいたる。これらのほか、薄手で平底の小片も数点出土している。

この3点だけでなく、底部片と考えられる小片にも二次的被熱は観察されない。煎熬に使用されなかった可能性が高い。

③小結

A区では脚台底部径が最小1.4cmから最大6.2cmまで変異があり、大小の脚台式製塩土器が認められた。柴田昌児氏の芸予諸島における製塩土器編年によれば芸予Ⅲ-1類からⅢ-3類までのすべ

てが認められたことになる〔柴田1997〕。そのうち集石遺構付近で出土した製塩土器はⅢ－1類とⅢ－2類との中間的な様相を呈する資料もあるが、おおむねⅢ－1類に属すると評価できよう。

コップ形製塩土器は柴田氏の編年にある薄手コップ形とは形態が異なっている。コップ形製塩土器には形態上のバリエーションが多い可能性が考えられる。A区、B区で出土した12、13、14は口縁にかけての開き方、胴下半部から上半部への変化の様相から組列を示している可能性がある。

(芝本里美)

(5) 古代・中世土器 (図16)

① 須恵器

1は坏蓋のつまみであり、残存高1.2cmを測る。つまみは扁平化した宝珠形であり、中央部と縁が突出する形状を呈する。胎土は0.2mm前後の金雲母をまばらに含む。焼成温度が低いため、色調は浅黄橙(10YR8/3)、にぶい橙(7.5YR7/4)を呈する。都城の編年を参考にすれば、京I期中段階、8世紀末頃の年代が与えられる〔小森2005〕。2は坏もしくは埴の口縁部片で、残存高1.9cmを測る。内外面とも回転ナデがみられる。胎土は0.5mm以下の長石の微細な粒子を全体的に含む。内外面ともに灰色(10Y5/1)で、焼成は堅緻である。小片のため、詳細な時期比定は困難だが、古代の可能性はある。3は坏の高台片で、残存高1.0cm、復元底径6.0cm、高台高0.5cmを測る。貼付け高台を有し、高台貼付け後にヨコナデ、内面および底部は回転ナデが施されている。胎土は0.1mm前後の金雲母をまばらに含む。色調は内外面ともに灰黄色(2.5Y7/2)を呈し、焼成はやや軟質である。

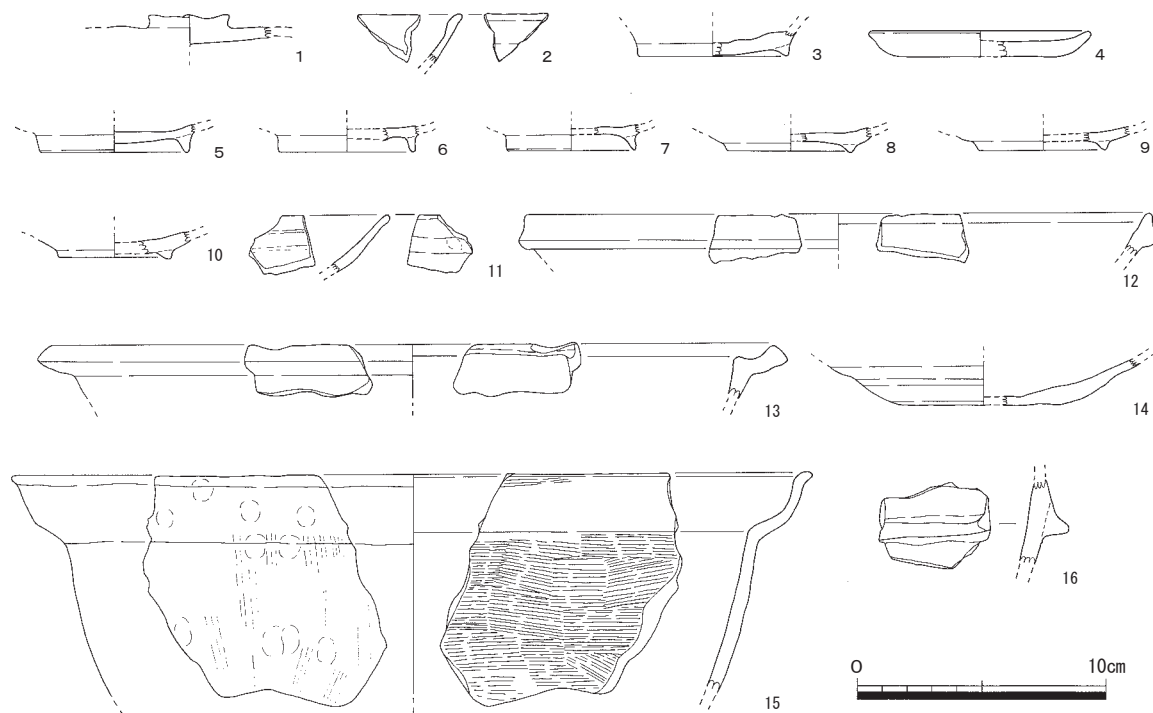


図16 古代・中世の土器・陶磁器

12は東播系須恵器こね鉢の口縁部片で、残存高1.7cm、復元口径25.0cmを測る。やや小振りな個体であり、口縁端部が上下に拡張している。胎土は0.5mm以下の白色粒をまばらに、0.2mm以下の金雲母をわずかに含む。色調は内外面ともに灰色（N6/0）で、焼成は堅緻である。森田編年第三期第1段階のものと思われ、13世紀前半～後半に比定される〔森田1995〕。

14は鉢の底部片である。残存高1.8cm、復元底径6.6cmを測る。平底の底部から、段をもちながら緩やかに立ち上がる。底部の切り離し痕は不明瞭であるが、回転糸切りの可能性が高い。胎土は0.5mm以下の長石粒をまばらに、また0.2mm前後の金雲母をわずかに含む。色調は外面が灰白色（2.5Y7/1）、内面が灰色（5Y6/1）を呈し、焼成は堅緻である。東播系の可能性がある。

②土師器

4は皿である。復元口径8.8cm、器高1.0cm、復元底径6.6cmを測る。底部切り離しは不明瞭であるが、回転糸切りの可能性があり、いわゆる吉備系土師器とは異なる。底部は分厚い。胎土は微細な金雲母をまばらに、0.5mm以下の長石粒を全体的に含んでいる。外面口縁部付近はにぶい黄橙色（10YR7/3）を呈すが、それ以外は灰色（N5/0～7.5Y5/1）である。

5～10は碗の高台片である。これらは総じて貼付け高台を有し、胎土は比較的精良である。また焼成は良好なものが多く、灰白色～にぶい橙色を呈しており、いわゆる吉備系土師器碗である。5は残存高1.1cm、復元底径6.0cm、高台高0.7cmを測る。高台はしっかりとしたつくりであり、器体を安定させる機能を保っている。0.2mm前後の金雲母を全体的に含み、色調は内外面ともににぶい橙色（10YR7/3）を呈す。6は残存高1.0cm、復元底径5.4cm、高台高0.65cmを測る。高台貼付け後のヨコナデ、内面のナデ調整は丁寧に施されている。胎土は微細な金雲母をごくわずかに含み、色調は内外面ともに淡黄色（2.5Y8/3）である。5、6ともに草戸Ⅰ期前半、すなわち13世紀中頃～後半に比定される〔鈴木1996〕。7は残存高1.0cm、復元底径5.2cm、高台高0.6cmを測る。高台は粘土紐貼付け後、ヨコナデにより形を整えており、器体を支える機能を有している。高台内面は外面に比べてヨコナデが省略気味であり、つくりの簡略化傾向が表れ始めている。0.2mm前後の金雲母を全体的に含み、色調は内外面ともに灰白色（10YR8/1、8/2）である。草戸Ⅰ期前半～Ⅰ期後半段階に属し、13世紀中頃～14世紀初頭頃に比定される。8は残存高0.9cm、復元底径4.9cm、高台高0.3cmを測る。低く小さな断面三角形状の輪高台が付されている。胎土は0.2mm前後の金雲母を全体的に含み、内外面ともににぶい黄橙色（10YR7/4、7/3）を呈する。9は残存高0.9cm、復元底径5.0cm、高台高0.4cmである。断面三角形状の低く小さな輪高台が付されている。0.2mm以下の金雲母をまばらに、0.5mm以下の白色不透明粒をわずかに含み、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。8、9ともに草戸Ⅱ期前半に比定され、14世紀前半頃の年代が与えられる。10は残存高1.0cm、復元底径4.6（10YR8/3）cm、高台高0.3cmを測る。高台貼付け後のヨコナデは省略され、畳付は潰れ気味である。粘土紐が輪状に繋がらない、もしくは不正円形の可能性がある。胎土は0.1mm前後の金雲母をわずかに含み、内外面ともに灰白色（2.5Y8/2）を呈す。草戸Ⅱ期後半古段階頃のものと考えられ、14世紀中頃に位置づけられる。

15は鍋の口縁部～体部にかけての破片で、復元口径32.0cm、残存高8.8cmを測る。口縁部は受口状

に内湾する形状を呈しており、草戸千軒町遺跡の分類では、土師質土器鍋Cとされるものである〔鈴木1996〕。外面は指頭圧痕が顕著で、縦位のハケメ調整が施されているが、ナデ消されているようである。内面は横位のハケメ調整が施される。胎土は3mm以下の白色粒・白色透明粒を多く、0.2mm前後の金雲母をわずかに含む。色調は外面がにぶい橙色～橙色（5YR7/4～2.5YR6/6）を、内面がにぶい橙色～褐灰色（7.5YR7/4～4/1）を呈し、焼成は良好である。13～14世紀代の年代が与えられる。

③瓦器

11は和泉型瓦器碗の口縁部片で、残存高2.3cmを測る。外面には指頭圧痕が、内面には2条のヘラミガキが認められる。胎土は0.2mm以下の金雲母をごくわずかに含む。焼成があまり、外面は黄灰色～灰黄色（2.5Y5/1～2.5Y7/2）、内面は灰色（2.5Y8/1）を呈している。尾上編年Ⅲ期頃、すなわち13世紀初頭前後に位置づけられる〔尾上1983〕。

④瓦質土器

13は鍋の口縁部片で、復元口径30.0cm、残存高2.2cmを測る。急な角度で短く外反したのち、内湾する。端部は面をなしており、草戸千軒町遺跡の分類において瓦質土器鍋Cとされるものである〔鈴木1996〕。内面には横位のハケメ調整が施されていたものと思われるが磨滅しており、不明瞭となっている。胎土は0.2mm前後の金雲母を多く含み、色調は外面が灰色（N4/0）、内面が灰白色（5Y8/1）を呈している。焼成はやや軟質である。16は鍋の体部片で、残存高3.3cmを測る。外面には体部に対して直角に突帯がめぐっており、口縁部直下の破片であると考えられる。草戸千軒町遺跡の分類〔鈴木1996〕では瓦質土器鍋Fとされる。胎土は0.5～1.0mm程度の白色粒・白色透明粒と、0.2mm前後の金雲母を全体的に含んでいる。焼成はややあまり、外面は灰色～灰黄色（N4/0、5/0、2.5Y7/2）、内面は灰黄色（2.5Y7/2）を呈している。

以上の古代・中世土器はすべて4層、6層、7層から出土した。

（織田誠司）

（6）土錘（図17）

土錘は小片を含めると約20点出土した。1は管状土錘、2、3は有溝管状土錘、4～7は有溝土錘である。8、9は管状土錘であるが、破片資料であるため有溝管状土錘の可能性もある。3～6は胎土が精良で、焼成が堅緻である。色調は黄白色、黄橙色を呈する。それ以外は胎土が粗く、大型の長石粒を多量に含み、焼成があまり。色調は赤褐色を呈する。1、8が8層から出土している以外は、すべて4層より出土している。重量は、完形品の5、6、7がそれぞれ29.3g、29.5g、131.4gを測る。それ以外については、1が55.5g、2が27.1g、3が44.2g、4が29.0g、8が115.8g、9が90.4gである。

（斧香菜子）

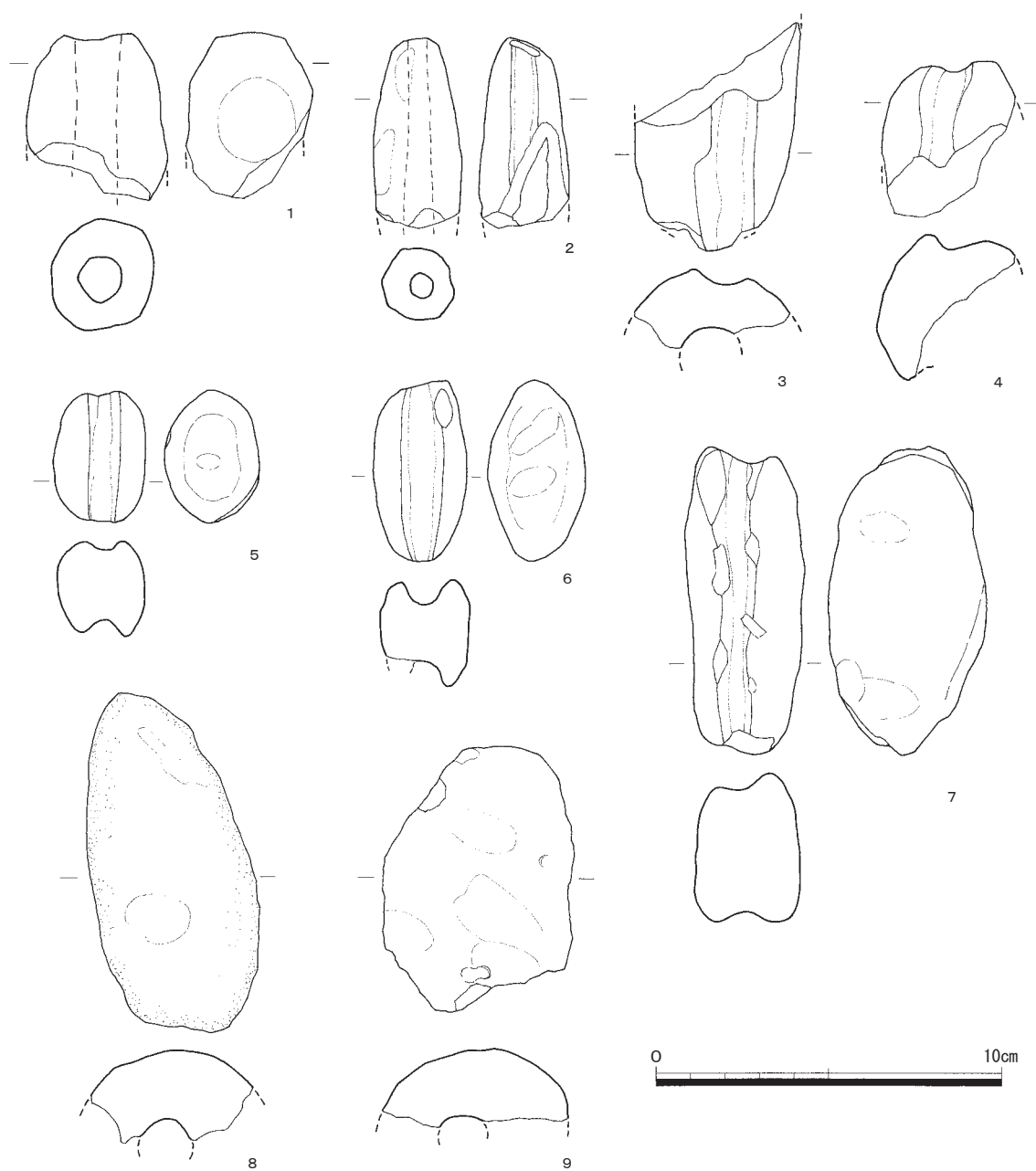


図17 土錘

(7) 管玉 (図18)

A区の攪乱坑S K 6よりガラス片、プラスチック片とともに出土した。完形品であり、両端部の周縁部をわずかに欠いている。全長3.0cm、直径1.2cmであり、口径はそれぞれ2.5mm、1.8mmを測る。穿孔は片面から施されたことがわかる。石材は鉄石英であり、暗赤褐色（5YR3/4）を呈する。

(藏本 論)

(8) 鉄滓 (図19)

A区の集石遺構で礫とともに集積されていた鉄滓2点である。集石の表面にあった大型品1は長さ4.8cm、幅2.6cm、厚み1.5cmの不定形である。1の下から発見された小型の2は長さ2.1cm、幅1.7cm、厚み1.0cmの不定形を呈する。いずれも木炭の噛み込みがなく、軽質の鉄滓であり、鍛錬鍛冶滓と考えられる。

(村上恭通)

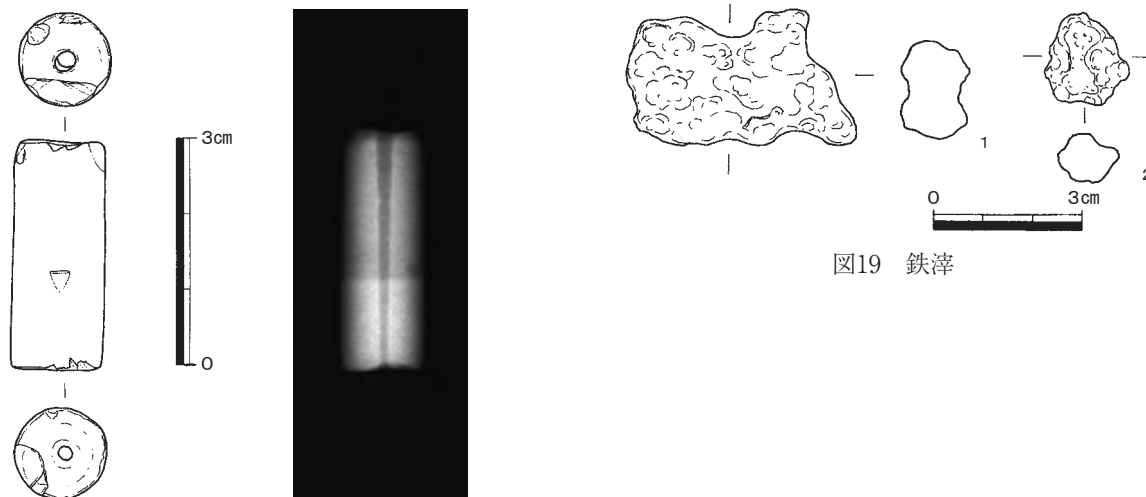


図19 鉄滓

図18 管玉 写真7 管玉のX線画像

【参考文献】

- 尾上 実 1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- 小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開 7世紀～19世紀－』真陽社
- 柴田昌児 1997「芸予諸島及びその周辺地域における土器製塩研究の成果と課題－とくに愛媛県の最近の調査事例を中心に－」『シンポジウム製塩土器の諸問題』塩の会シンポジウム実行委員会
- 柴田昌児・松村さを里 2014「愛媛県における古式土師器の基礎的研究」『古式土師器の編年的研究－四国島の古墳時代前期の土器様相－』四国考古学研究会
- 鈴木康之 1996「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』広島県教育委員会
- 谷若倫郎編1993『出作遺跡Ⅰ 出作圃場整備事業埋蔵文化財調査報告書』松前町教育委員会
- 三吉秀充 2011「西部瀬戸内における古墳時代後期土師器の研究」『愛媛大学法文学部論集 人文学科編』第30号、愛媛大学法文学部
- 森田 稔 1995「中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会

第5章 まとめ

豊島明神遺跡は、過去の表採活動や試掘調査において脚台式製塩土器やコップ形製塩土器、そして花崗岩の被熱礫が多数発見されていたことから、製塩遺跡であることを想定して本調査に着手した。しかしながら3次にわたる発掘調査の結果、製塩土器は予想をはるかに下回る出土量であり、被熱礫も大きさ・形状ともに多様であり、製塩炉の部材として認めることができないことから、製塩活動の痕跡と判断するにはいたらなかった。

そして製塩土器と被熱礫は製塩活動とは異なる行為と結びついていることがA区の調査で判明した。A区9層上面では調査区南端部で焼土跡が2カ所検出されたことから、この面が一定期間地表化し、安定していたことがわかる。黒みの強い粘性をもった9層は腐食化が進んだ土壌であり、本層の形成期には周辺において動植物の活動が活発な温暖湿潤期であったと推測される。

2カ所の焼土跡にはさまれるように約60個の礫を積み上げた集石遺構は、被熱した花崗岩を含みつつ、多様な円礫、亜角礫が使用されており、加えて大小2個の鍛冶滓がその縁に配されていた。被熱礫、自然礫を一定範囲に積み上げ、その一角に鉄滓を添え置くといった一連の行為が集石遺構の構築の背景にあると考えられ、この非日常的な行為を祭祀行為と判断することは許されるであろう。集石遺構の東西両脇にある焼土跡と併せて石と火による祭祀行為の痕跡と判断したい。ただし、これらが9層上面で検出されたことは事実であるが、同時に使用されたかどうかは判断できない。むしろ40㎡の調査範囲以外にも、このような集石遺構や焼土跡が点在していた可能性を考えておきたい。この遺跡も高台から北側に現在の豊島港を見おろす地の一角にあり、海との関わりの強い祭祀場であったと推測できる。

この集石遺構はその北側に土師器、脚台式製塩土器の集中地点を同じ9層上面にもつ。土師器はタタキ目を顕著に残す丸底甕の底部、底部から体部への屈曲が明瞭な高坏などの存在から布留1式段階を下限とすると判断される。共伴する製塩土器の脚台は柴田昌児氏の編年研究によれば芸予Ⅲ-1期に相当すると考えられ〔柴田1997〕、土師器の年代観との齟齬はない。集石遺構に伴った鍛冶滓は当該期の鉄器生産址、住居址以外で初めての出土例であり、祭祀遺構への供献鉄滓としても最古の例である。

さらに9層中の製塩土器脚台部はさらに大型であり、また8層では小型の脚台が認められるため、脚台式製塩土器存続期のほぼ全期間、すなわち古墳時代前期を通じてこの地点が利用されたことは間違いない。しかし報文にもあるように8層、9層の出土品併せても脚台部の出土量は23点であり、生産址という判断根拠にならない。さらに23点中、2点のみが二次被熱痕を有しており、大多数の脚台部は煎熬の際の火を受けていないということになる。単に塩を蓄える容器であれば、製塩土器である必然性もないため、あえてそこに製塩土器を採用している点に集石遺構、焼土跡に見いだした祭祀行為との接点があると考ええる。

一方、8層は薄手コップ形製塩土器を含む包含層であり、土師器は布留4式併行期主体と報告さ

れている。本層から出土する土師器の最大の特徴は高坏が卓越する点である。大小の高坏があり、坏部、脚部の形状そして胎土や色調が極めて多様である。製塩土器の少なさ、供献用器種の顕著さ、手捏ね土器の存在は、8層出土遺物にも祭祀的性格を見いだすことができるであろう。2007年度に実施した試掘調査においても、包含層より二枚貝形の不明土製品が出土しており、また手捏ね土器も表採されていた〔石井編2008〕。本調査の成果にみるこの遺跡の祭祀的性格と整合するものといえよう。またA区攪乱坑（SK6）より出土した鉄石英製管玉も、副葬が行われるような埋葬址が付近にあるわけでもないの、祭祀に供された装身具と判断される。今後、魚島大木遺跡の時期との関係が課題となるが、古墳時代前期から中期へという移行期における島の祭祀の解明に新たな資料を追加したこととなった。

今後の課題は多々あるが、そのうちの一つは薄手コップ形製塩土器の問題である。豊島明神遺跡のコップ形製塩土器のうち、形態の判明する2点は体部中央に屈曲部をもち、口縁が外に広がることから、形態的には柴田氏のいう「粗製厚手鉢形」の古段階資料に近く、薄手ながらも柴田氏の薄手コップ形にはほど遠い。柴田氏は薄手コップ形製塩土器と粗製厚手鉢形製塩土器をTK73～TK208型式に相当するとしているが、豊島明神遺跡では初期須恵器の出土は1点もない。したがって、脚台式製塩土器段階後の製塩土器の起源、年代、型式変化についてはなお一層検討の余地があるといえよう。

なお7層以上の包含層は決して遺物の遺存状態は良好とはいえなかったが、古代末期から中世にかけての土器を大量に検出することができた。土師質土器、瓦器の検討によってそれぞれの年代が明らかにされた。東寺領荘園、弓削島荘を抱えた上島町であればこそこの段階の遺物についてメスが入れられた意義は大きい。確実に漁網用の土錘が伴うことから、中世段階には漁村的な景観がこの地域に広がっていた可能性がある。周辺地域の踏査等も含めて継続し、豊島の古代・中世についても関心を傾けていきたい。

（村上恭通）

【文献】

石井千絵里編2008『豊島明神遺跡・入津遺跡試掘調査報告書』愛媛大学法文学部考古学研究室

柴田昌児 1997「芸予諸島及びその周辺地域における土器製塩研究の成果と課題－とくに愛媛県の最近の調査事例を中心に－」『シンポジウム製塩土器の諸問題』塩の会シンポジウム実行委員会

附編 魚島大木遺跡採集遺物調査報告

第1章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

魚島の属する魚島群島は、芸予諸島の南東部にある。主要な島嶼である高井神島、魚島、江ノ島が東西方向に連なり、北は備後灘に、南は燧灘に接する。このうち、有人島は魚島と高井神島のみである。

魚島は、北緯34度10分、東経133度19分にあり、上島諸島の弓削島から南東約14kmに位置する離島である。魚島の西約4.5kmに高井神島、東約4kmに江ノ島がある。不整な四角形の島で、島の南側は人討ノ鼻と呼ばれる岬が突出する。東西幅約1.6km、南北最大幅約1.1km、最小幅約0.4kmで、北西に向けてすぼまるような平面形である。面積は約1.49km²で、魚島群島では最大の島であるが、芸予諸島全体では決して大きくはない。最高地点は島のおおよそ中央に位置し、標高は約169.5mである。この東側に位置するピークは城山と呼ばれ、標高は約147mである。島の規模に比べて標高が高いために山がちで、緩斜面や平坦地は北部にわずかにみられるのみである。島は地質学的に花崗閃緑岩が主体であるため、海面近くは風化・浸食作用が進行し、波蝕崖を形成する。とくに島の南部では、この傾向が顕著にみられる。島の人口は約200人であり（2016年現在）、居住域は緩斜面が広がる北部の篠塚地区に集中している。

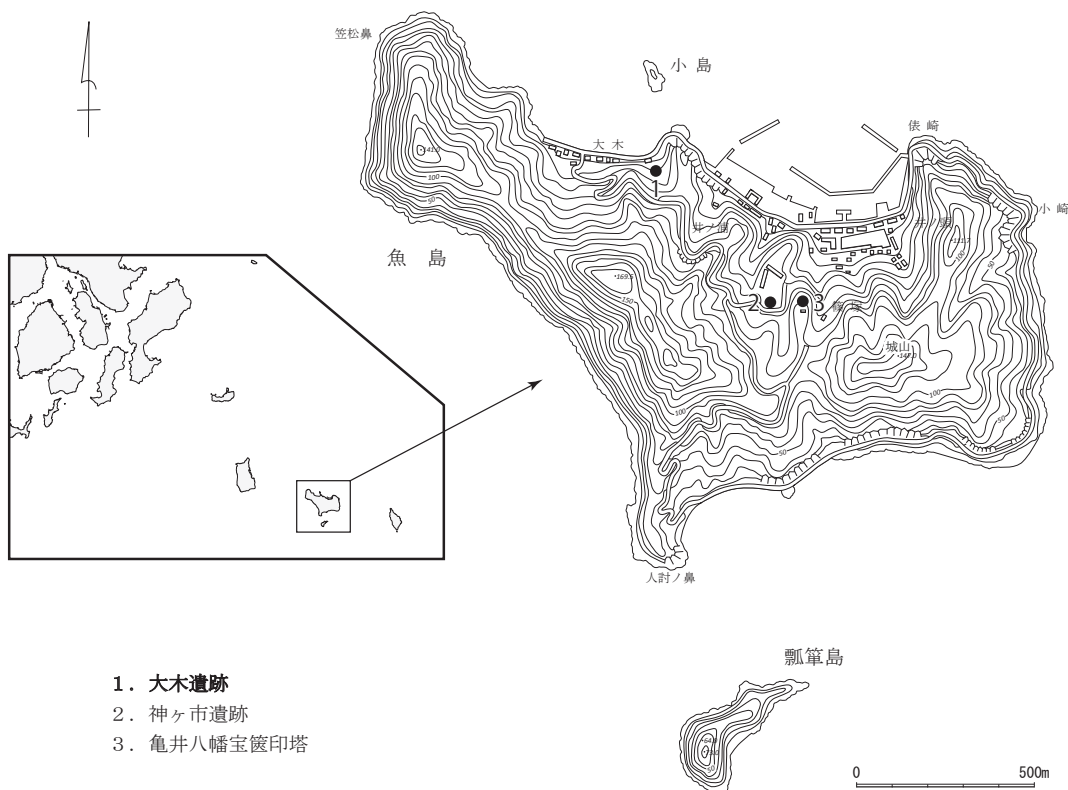


図20 魚島群島の遺跡分布図

大木遺跡は、篠塚地区西隣の大木地区にある。両地区は北へのびた丘陵状の小さな岬によって隔てられており、遺跡はこの小岬の付け根にあたる北西側の緩斜面上に位置する。遺跡前面は砂浜海岸に接し、標高はおおよそ5～10mである。1968（昭和43）年の遺跡発見当初は、黒褐色の遺物包含層が厚さ20～30cmで堆積していたと報告されているものの〔長井1975〕、現在は包含層もほとんどが流出し、地形が大きく改変されている。

2. 歴史的環境

魚島では、旧石器時代、縄文時代の遺物は発見されていない。しかし、島内での正式な発掘調査は実施されていないものの、弥生時代以降の遺物が数ヶ所で採集され、その概要が断続的に報告されてきた〔長井1975、2008〕。

弥生時代の遺物としては、篠塚港で海底から引き揚げられた壺の存在が知られている。昭和40年代の浚渫に伴って引き揚げられたこの土器は、口縁を除いてほぼ完形であり、その形状や肩部の櫛描波状文などの特徴から、弥生時代中期前葉に比定されている〔今治市村上水軍博物館編2014〕。また、神ヶ市遺跡でも弥生土器の出土事例がある。神ヶ市遺跡は、大木遺跡の南東約450m、魚島中学校校庭に位置する。島内最高所と東の城山とを繋ぐ尾根筋から、北へ向けて複雑に分岐する尾根に挟まれた谷状地にあり、標高は約50mである。昭和30年代、魚島中学校の校庭造成工事中に遺跡の存在が明らかになったが、造成工事以前の遺跡の状況は不明である。長井数秋氏によって、出土した弥生土器甕口縁部片と壺口縁部片とが報告されており、弥生時代中期前葉に相当する〔長井1975、2012など〕。以上のように、出土土器の時期や遺跡立地を考慮して、いわゆる高地性集落であった可能性も指摘されている〔古瀬ほか2003〕。

神ヶ市遺跡では、このほかにも古墳時代の遺物として、土師器、須恵器、小型手捏ね土器、製塩土器、滑石製白玉が出土している〔長井2008など〕。とくに、手捏ね土器や白玉といった遺物からは、大木遺跡と同様に祭祀の様相を強く窺うことができる。時期的に大木遺跡に先行すると考えられており〔長井2008、古瀬2003など〕、大木遺跡の成立過程を検討する上で重要な資料である。

古代の資料は今のところ発見されていないものの、続く中世の資料が少数確認されている。国指定重要文化財の亀井八幡神社宝篋印塔がその一例であり、型式や製作手法から鎌倉時代後期の作と考えられている。すでに何度も触れた神ヶ市遺跡でも、中世の土器が出土したとの報告がある〔長井2012〕。

「魚島」の地名は、付近が好漁場であることが由来であり、なかでも鯛漁が有名である。中世は一本釣り漁が中心だったと想定されるが、近世慶長期になると効率的な網漁が導入され、さらに明治20年代には縛網による漁が主流となる。この様子を描いた鯛縛り網漁図、韓国出漁図が島内に残されており、往時の大漁ぶりが窺える。縛漁は、鯛の漁獲量減少を理由に1929（昭和4）年以降は行われなくなるが、魚島の周辺では現在も好漁場として知られている〔山本2011、古瀬ほか2003〕。

第2章 採集遺物

1. 遺物の概要

長井数秋氏の報告（以下、長井報告と称する）によれば大木遺跡採集資料として製塩土器、ミニチュア土器、石製模造品、鉄製品が図示され、説明されている〔長井1975〕。これらは上島町魚島開発総合センターにある郷土資料室に保管されていた。2008年度の第1次調査期間中、雨天で発掘調査作業が中止になった際、魚島に渡り、大木遺跡採集遺物を見学した。採集遺物の中でもとりわけ鉄製品は桐箱に敷かれた綿の中にくるまれるように埋没し、大半は錆汁がしみ出して綿を容易に外せない状態となっていた。そこで上島町教育委員会と協議し、鉄製品のクリーニングを行うこととした。宿舎でのクリーニング中、小さな鉄片どうしが接合することが判明し、随時接合作業を進めた。その後、再度教育委員会と協議し、業者に委託して、接合作業を継続し、また錆の進行を防ぐために脱塩、含浸処理を実施することに決定した。この作業は2008年3月に完了した。処理後、納品された鉄製品はさらに接合が進み、一部はまさに「鉄鋌」の姿になった。また鉄短剣が含まれたことも判明し、鉄鏃も形態が明確になった。

この成果を受け、上島町教育委員会の協力を得て2010年より愛媛大学考古学研究室に大木遺跡採集遺物を借用し、すべての資料の再調査を開始し、2012年度末までには整理報告書をまとめ、その刊行を待つだけとなっていた。

2. 製塩土器（図21）

長井報告では3点のコップ形製塩土器が図示されているが、その内1点は口縁部を欠損しており、報告時の姿をとどめていない。その他の2点については1点が平底であり、もう1点が丸底の製塩土器である。1は平底のコップ形製塩土器であり、器高9.8cm、口径8.6cm、底径6.6cm、胴部最大径9.0cmを測る。わずかに膨らむ胴部をもち、わずかに内湾して、再度口縁部近くで内湾気味に口縁部が立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。口縁部から胴部最大径

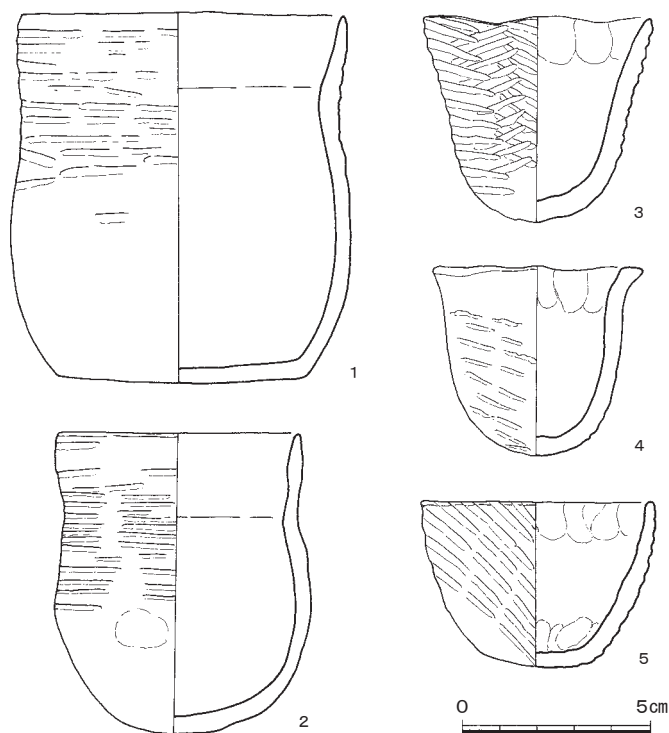


図21 製塩土器

付近まで横位のタタキ目が残し、その下部はタタキ目が丁寧にナデ消されている。内面もナデ調整が施されている。2は丸底の製塩土器であり、器高8.0cm、口径6.5cm、胴部最大径6.8cmである。わずかに膨らむ胴部をもち、内湾しながら再度直線的に口縁部が立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。口縁部から胴部最大径付近まで横位のタタキ目が残し、その下部はタタキ目が丁寧にナデ消されている。内面もナデ調整が施されている。

(芝本里美)

3. ミニチュア土器 (図21)

ミニチュア土器には丸底を呈するものが2点、やや丸底気味の平底が1点ある。3、4は口縁が外側に開いており、4は口縁端部がやや屈曲して外に開いている。いずれも外面に斜めのタタキ目を残すが、3は方向を変えながらタタキが施され、タタキ目が綾杉状を呈している。4は斜め方向のタタキ目を弱くナデ消している。内面はナデが認められ、口縁部付近には指頭圧痕が残る。3は器高5.4cm、口径6.2cm、4は器高5.0cm、口径5.6cmである。5は器高に比べて口径が大きく、鉢状を呈している。外面には斜め方向のタタキ目を残し、内面には口縁部と底部に指頭圧痕が残る。器高4.4cm、口径6.2cmを測る。

(芝本里美)

4. 石製模造品

(1) 概要

長井報告によれば、大木遺跡で採集された石製模造品は約30点であり、そのうち26点が紹介されている。今回の再整理において確認できたのは25点であり、その内訳は有孔円板24点(1～24)、勾玉1点(25)である。未製品や素材剥片はなく、すべて完成品である。このほか白玉67点が糸に通した形で保管されていた。

(2) 有孔円板 (図22、表1)

有孔円板はその形態から正円形(A類)、楕円形(B類)、隅丸方形(C類)、不整多角形(D類)に分類される⁽¹⁾。A類は仕上げが丁寧であるのに対し、B～D類は不整形で研磨も粗雑である。大きさには変差があり、最大例(19)が長径3.9cm、短径3.6cm、最小例(14)が長径2.0cm、短径1.7cmをそれぞれ測る。22が単孔である以外はすべて双孔で、その比率は圧倒的に双孔が高い。双孔は間隔が狭く中央寄りのものや間隔が広く両側縁寄りのもの、その中間で幅に対してほぼ等間隔に穿たれているものがある。なお、左右の穿孔径が異なるもの(11)や、左右の穿孔方向が異なるもの(3)もある。すべて片側穿孔である。研磨は表裏・側面のすべてに施されており、素材面を広く残す例はない。表裏面の研磨方向は縦・横・斜めがあり、なかには不定方向のものもみられる。

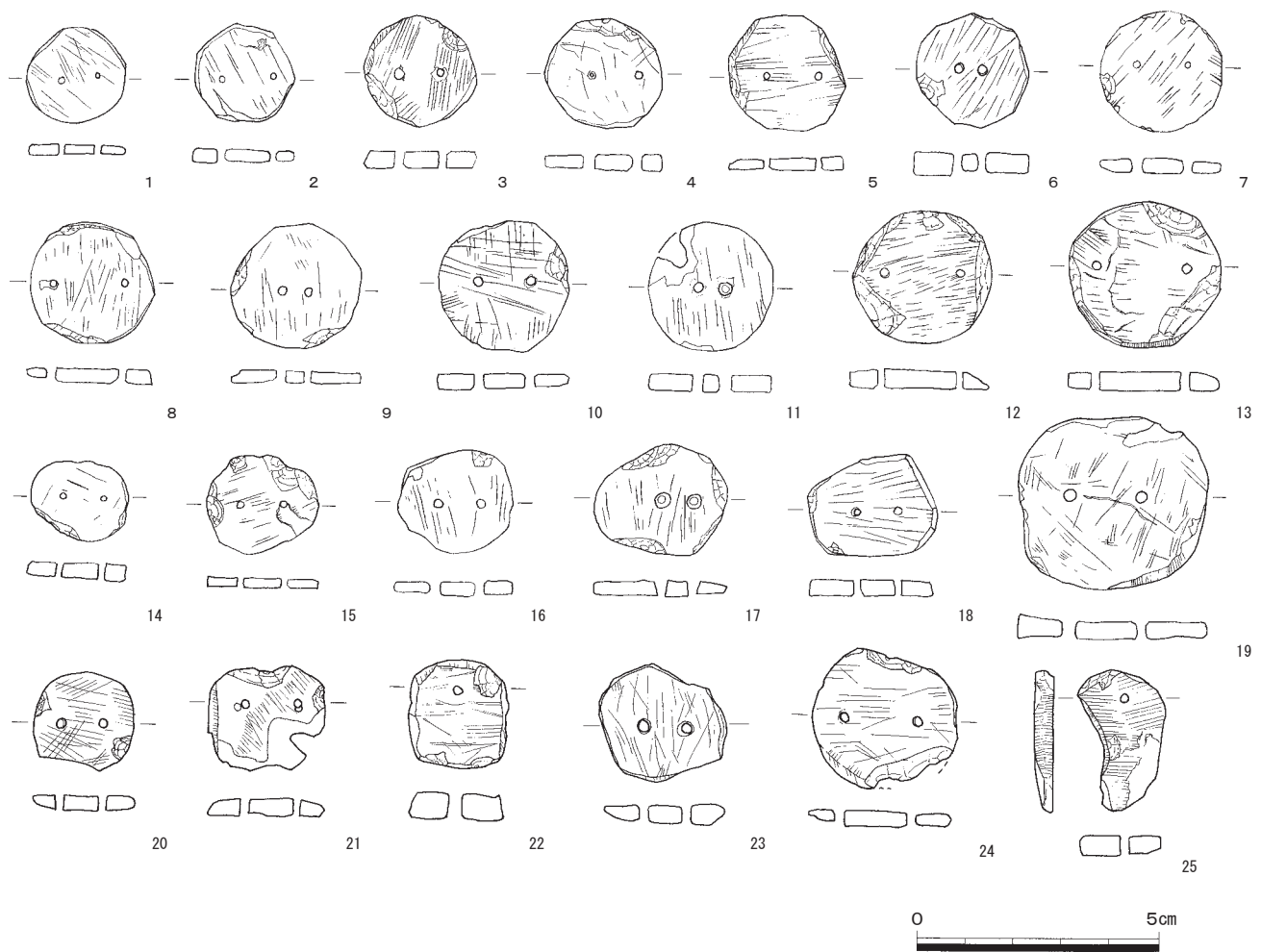


図22 石製模造品

表1 大木遺跡採集石製模造品一覧表

番号	器種	形態	穿孔	長径(cm)	短径(cm)	厚み(cm)	重量(g)	石材	残存(%)	備考
1	有孔円板	A	双孔	2.1	2	0.2	2.31	B	100	
2	有孔円板	A	双孔	2	2	0.3	2.08	B	100	
3	有孔円板	A	双孔	2.3	2.3	0.3	3.32	D	100	左右の穿孔方向異なる
4	有孔円板	A	双孔	2.4	2.3	0.3	3.5	C	100	
5	有孔円板	A	双孔	2.4	2.3	0.3	3.03	C	100	
6	有孔円板	A	双孔	2.3	2.3	0.5	4.75	A	100	
7	有孔円板	A	双孔	2.5	2.5	0.3	2.99	B	100	
8	有孔円板	A	双孔	2.6	2.5	0.4	3.64	A	95	完成後欠損
9	有孔円板	A	双孔	2.7	2.6	0.3	3.84	A	100	
10	有孔円板	A	双孔	2.7	2.7	0.3	4.26	A	100	
11	有孔円板	A	双孔	2.7	2.5	0.3	4.11	D	90	完成後欠損、左右の穿孔径異なる
12	有孔円板	A	双孔	2.8	2.7	0.4	5.23	C	100	
13	有孔円板	A	双孔	3.1	3	0.4	7.12	C	100	
14	有孔円板	B	双孔	2	1.7	0.3	1.94	A	100	
15	有孔円板	B	双孔	2.3	2	0.2	1.94	A	100	
16	有孔円板	B	双孔	2.4	2.1	0.2	2.94	B	100	
17	有孔円板	B	双孔	2.8	2.3	0.3	5.35	A	100	
18	有孔円板	C	双孔	2.6	2.1	0.3	3.64	B	100	
19	有孔円板	C	双孔	3.9	3.6	0.5	11.91	A	95	完成後欠損
20	有孔円板	C	双孔	2.1	2	0.3	2.61	A	100	
21	有孔円板	C	双孔	2.4	2.3	0.4	2.8	A	90	完成後欠損
22	有孔円板	C	単孔	2.3	2	0.7	5.24	A	100	
23	有孔円板	D	双孔	2.6	2.6	0.4	3.49	A	100	
24	有孔円板	D	双孔	2.9	2.8	0.3	3.9	A	90	完成後欠損
25	勾玉	—	単孔	2.9	1.7	0.4	2.53	A	100	

1～13はA類である。8、11、12は側面が丁寧に研磨され正円形を呈し、それ以外は側面の調整が粗雑で角をもつ。8、12、13は長さ・幅が2.5cm以上の大型品である。双孔の間隔は狭く中央寄りのもの、広く両側縁寄りのもの、両者の中間がある。1、3、8、11には穿孔剥離がみられる。11には新しい欠損がみられる。基本的に表裏・側面とも丁寧な研磨が施されているが、5、9、13は素材成形時にできた階段状剥離痕を残す。1、10、13の側面には横方向、3、8には斜め方向の研磨が施されている。

14～17はB類である。いずれも側面は丁寧に整形されておらず、研磨も粗雑である。17は双孔の間隔が狭く、側縁に片寄っている。また初孔と終孔の径が異なる。15には穿孔剥離がみられる。15の側面には斜め方向の研磨が施されている。

18～22はC類である。いずれも表裏・側面に粗雑な研磨が施されている。18の側面には斜め方向の雑な研磨が施されている。21は全体的に粗雑で、成形の段階でできた階段状剥離痕が明瞭に残る。また新しい欠損がみられる。左側の穿孔は中断されており、その横に新たな穿孔が行われている。右側は穿孔が重なり合っていて、穿孔途中のものは器壁に対して垂直でなく斜めに穿たれている。22は単孔である。四隅は研磨によって丸くおさめられている。単孔の位置は上縁に片寄っている。器壁は厚く0.7cmを測る。18、22には穿孔剥離がみられる。

23・24はD類である。不整形で、側面は粗雑な研磨が施されており、部分的に自然面を残す。24は後世の欠損がみられる。また穿孔剥離が明瞭に残る。

(3) 勾玉

25は頭部幅1.7cm、尾部幅0.9cmを測る。頭部は腹側がやや突出し、嘴状を呈する。腹部はわずかに内湾し、頭部と尾部をつなぐ背部はやや直線的である。断面は扁平である。腹部側面に横方向の研磨が施されている。頭部中央に片側穿孔が行われている。

有孔円盤と勾玉の石材について 石材は大きく4種類に分けられる。一つは珪質泥質片岩であり、淡い緑色を呈し、きめが細かく、石英、雲母を含み、表面に雲母光沢が観察される（A類）。最も個体数が多く、6、8、9、10、14、15、17、20～25の14点がこれに属する。続いて個体数が多いのは同じ珪質泥質片岩であるが、鉄分を含み、赤錆を表面にふいているものである（B類）。1、2、7、16、18の5点がこれに属する。続いて泥質片岩は雲母光沢などがみられない石材であり（C類）、4、5、12、13がこれに当たる。4つめは珪質片岩であり（D類）、3、11の2点がこれに属する。

(4) 白玉（図23）

平面形はおおよそ円形を呈しているが、直径は1個体のなかで0.01～0.02cmの変差が認められる。直径は大型品が0.57cm、小型品が0.39cmを測り、厚みは0.25～0.35cmの範囲にほぼ収まる。重量は小型品で0.08g、大型品で0.12gである。両面が平坦なもの、面をもたないものの両者があり、平坦な場合でも面が水平ではなく、わずかに傾斜するものも少なくない。

側面は弱い稜線が認められる例も多く、成形時の痕跡を残している。また側面に素材面をわずかに残す例も散見される。

石材は白玉が小型であり、破面がない限り、詳細な検討ができないが、雲母光沢が顕著な珪質泥質片岩が目立っており、しばしば赤錆をふいた珪質泥質片岩もみられる。

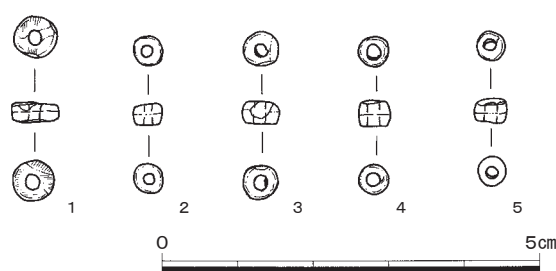


図23 白玉

(5) 愛媛県内出土石製模造品(図24、表2)

大木遺跡を除くと、愛媛県内では32遺跡から総数318点の石製模造品が出土している。その内訳は有孔円板160点、勾玉63点、未製品95点である。

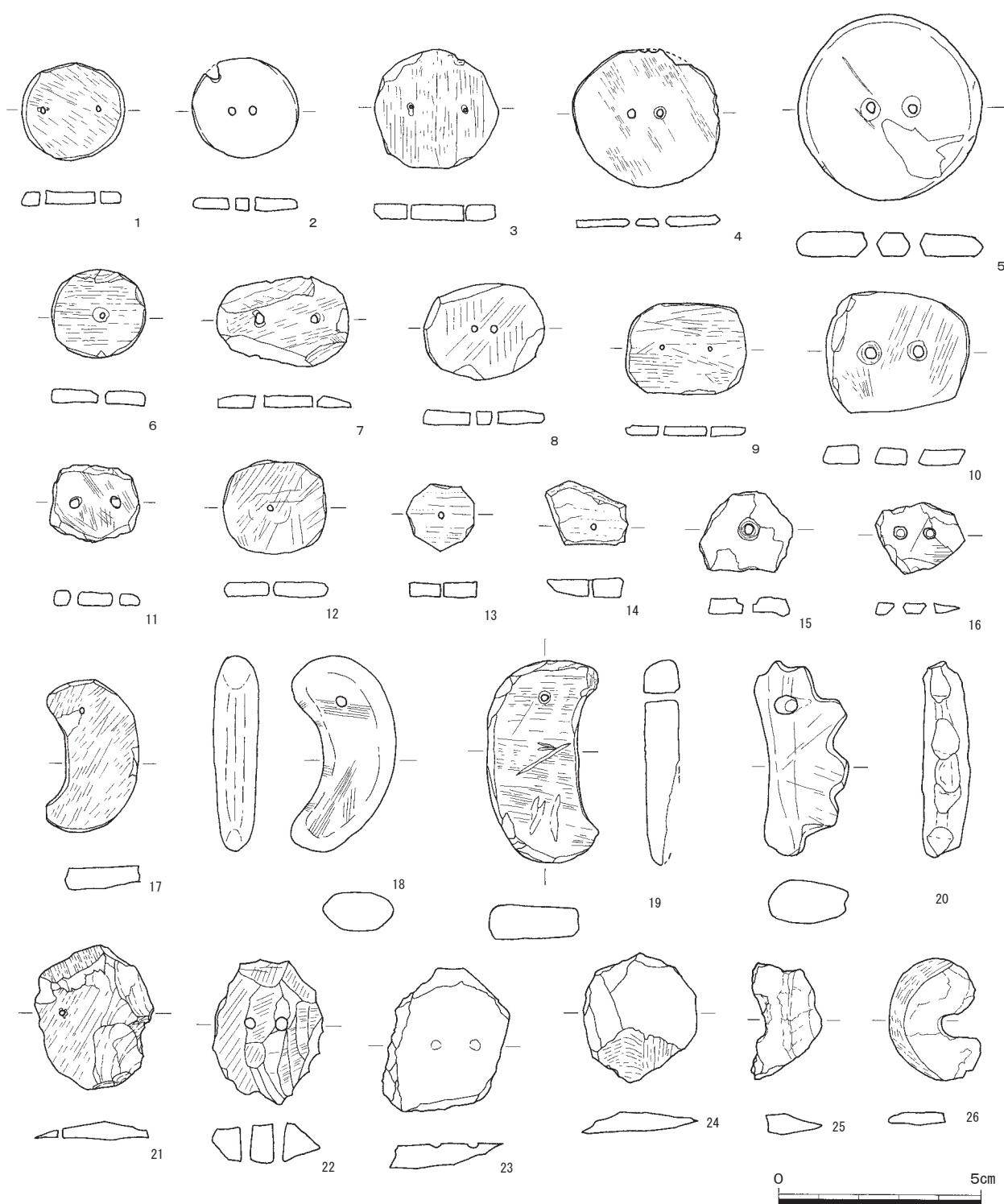
1～16は有孔円板である。1～6はA類、7、8はB類、9～12はC類、13～16はD類にそれぞれ分類される。A類(1～6)はいずれも表裏・側面に丁寧な研磨を施す。双孔(1～5)と単孔(6)があり、双孔の間隔は狭く中央寄り、広く両側縁寄り、両者の中間がある。4、5は両側穿孔である。5は長径4.8cm、短径4.5cmを測り、県内でも大型品に属する。B類(7・8)とC類(9～12)はB類ほど側面を丁寧に整形されておらず、研磨も粗雑である。不定方向の研磨が目立つ。D類は不整形で形も歪んでいる。

17～19は勾玉で、20は子持勾玉である。いずれも頭部と尾部が突出し、「コ」字形を呈する。研磨も丁寧で、断面も厚く本来の装飾品に近い形状を呈する。21～26は未製品である。

県内で最も出土数が多いのは出作遺跡で、有孔円板141点、勾玉14点、未製品91点の合計246点を数える〔谷若編1993〕。有孔円板の内訳はA類47点、B類32点、C類47点、D類15点である。A、B類は仕上げが丁寧であるのに対し、C、D類はA、B類ほどには丁寧ではない。有孔円板における単孔と双孔の比率は1：3と双孔円板が多い。未製品や素材剥片も多く、出作遺跡において石製模造品が製作されていた可能性が指摘されている〔相田1991、谷若編1993、米田2002〕。未製品が出土している点は大木遺跡とは異なっており、祭祀遺跡のなかで性格の相違がある。

(6) 大木遺跡採集石製模造品の位置付け

大木遺跡採集の有孔円板はそのほとんどが双孔である⁽²⁾(表1)。中・四国地方における滑石製模造品生産の地域性を検討した米田克彦氏は、双孔円板を主体とする地域は愛媛県と広島県であるとし〔米田2002〕、大木遺跡も同じような様相を呈しているといえる。形態別にみると、A、B類は比較的丁寧な調整が施されているのに対して、C、D類は調整が荒く粗雑な感を受ける。出作遺跡出土の有孔円板を検討した谷若倫郎氏は、完成品の表裏および周縁の仕上がり具合について、円形ないし楕円形は入念で、隅丸方形・隅丸長方形ないし不整な多角形はそれほど入念でないことから、前者を「厳密な完成品」、後者を「手抜きの完成品」としている〔谷若編1993〕。大木遺跡出土の正円形ないし楕円形有孔円板は17点で、「厳密な完成品」が全体の半分以上を占めてい



1・4・6～10・16・17・21～26. 出作遺跡、2. 樽味高木遺跡（11次）、3. 樽味四反地遺跡（1次）、5. 松山大学構内遺跡（2次）、11. 樽味四反地遺跡（18次）、12. 樽味四反地遺跡（13次）、13・14. 三島神社古墳、15. 樽味四反地遺跡（6次）、18. 松山北高等学校遺跡、19. 船ヶ谷遺跡（4次）、20. 長網Ⅰ遺跡（2次）

図24 愛媛県内出土の石製模造品

表2 愛媛県内出土石製模造品一覧表

番号	遺 跡	所 在	時 期	有 孔 円 板				勾玉	未製品	合計	備 考
				A類	B類	C類	D類				
1	樽味四反地遺跡（5次）	松山市		1	0	0	0	0	0	1	
2	北久米浄蓮寺遺跡（3次）	松山市	5世紀？	1	0	0	0	0	0	1	
3	樽味四反地遺跡（1次）	松山市		1	0	0	0	0	0	1	
4	筋違A遺跡	松山市		0	0	1	0	0	0	1	
5	松山大学構内遺跡（2次）	松山市	中期	1	0	0	0	0	0	1	
6	岩崎遺跡Ⅲ区	松山市		1	0	0	0	0	0	1	
7	福音小学校構内遺跡	松山市									
8	船ヶ谷遺跡（4次）	松山市		1	0	0	0	3	0	4	
9	樽味四反地遺跡（5次）	松山市		1	0	0	0	0	0	1	
10	樽味四反地遺跡（6次）	松山市	MT15	0	0	0	0	0	2	2	
11	西石井遺跡（3次）	松山市		2	0	0	0	0	0	2	
12	樽味高木遺跡（11次）	松山市		1	0	0	0	0	0	1	
13	樽味四反地遺跡（9次）	松山市		0	0	0	1	0	0	1	
14	樽味高木遺跡（13次）	松山市	5世紀後半	0	1	0	0	0	0	1	
15	樽味四反地遺跡（13次）	松山市		0	0	1	0	0	0	1	
16	樽味四反地遺跡（18次）	松山市	5世紀後半	0	0	0	1	0	0	1	
17	筋違H遺跡	松山市		0	0	0	0	1	0	1	
18	三島神社古墳	松山市	6世紀初頭	0	0	0	2	0	0	2	
19	新城42号墳西	松山市		0	0	1	0	0	0	1	
20	多々羅製塩遺跡	今治市	前期	0	0	0	0	1	0	1	
21	松山北高4次	松山市		0	0	0	0	1	1	2	
22	持田町3丁目	松山市		0	0	0	0	0	1	1	
23	出作遺跡	松山市松前町		47	32	47	15	14	91	246	
24	火内遺跡	今治市	布留式新相	0	0	0	0	1	0	1	
25	二の谷2号墳	今治市	TK208～TK23	0	0	0	1	1	0	2	
26	高地栗谷4号墳	今治市	5世紀	0	0	0	0	1	0	1	
27	富田遺跡10地点	今治市		0	1	0	0	0	0	1	
28	姫路山	今治市		0	0	0	0	1	0	1	
29	長網Ⅰ遺跡（2次）	西条市		0	0	0	0	1	0	1	子持勾玉
30	高知丸山遺跡	西条市		0	0	0	0	1	0	1	
31	オクシゴエ遺跡	松山市		0	0	0	0	36	0	36	詳細不明
32	かがり山遺跡	松山市		0	0	0	0	1	0	1	詳細不明

る。しかし、A類のなかでも図22－5のように丁寧に研磨されていない例もある。また、B類に関しては丁寧な仕上げが施されているとは言い難く、「厳密な完成品」とは言えない。このことから、たとえA類であっても丁寧に仕上げられたものは少ないといえることができる。また大木遺跡の勾玉は図23－17～19のように「コ」字形を呈しておらず、断面も扁平である。

以上のことから、大木遺跡で採集された石製模造品は愛媛県や広島県に特徴的な形態を有している一方で、仕上げが粗雑なものが多く、円形を呈していてもそれらが「厳密な完成品」とは必ずしも言えないことがわかる。また未製品や素材剥片は出土しておらず、祭祀遺跡でありながらも生産の痕跡を残す出作遺跡とは様相を異にしている。

（亀澤一平）

5. 青銅製品

（1）小型青銅鏡（図25）

鈕を欠損しているが、ほぼ完形の小型青銅鏡である。面径は最大で3.9cm、最小で3.6cm（残存径）を測る。縁は素文の平縁で、圏線によって区画されている。周縁部は一部劣化し、剥落がみられる。主文様は鈕を中心に同心円状に二重の圏線がめぐる。圏線間には間隔の広い櫛歯文が放射状

に配されている。櫛歯は圏線に直交しないものや、圏線と交差し突き抜けているものもみられる。櫛歯は15本確認できる。鏡面はほぼ平坦で、端部はわずかに反りを有する。鈕の破面は細い瓢箪状に青銅の地肌がみえることから、薄い橋状の鈕が付されていたと想定される。厚さは0.20～0.25cmを測り、均質ではない。薄い部分は鏡背の文様も朦朧としている。これは、この部分が湯口に近く、注がれた湯が急速に冷却され、収縮したためと推測される。

（2）西日本の祭祀遺跡における小型青銅鏡

大木遺跡で採集された小型青銅鏡（以下、大木鏡と称する）については、1次報告のなかで長井数秋氏が「青銅製重圏文儀鏡」と呼んだ〔長井1975〕。また大木鏡に論及した論考では「素文儀鏡」や「重圏文鏡」などの呼称も用いられている〔赤崎1991、阿部・伊藤ほか1998〕。ここでは、先行の報告にあるような祭祀遺物に限定する「儀鏡」という呼称はもちいず、小型青銅鏡として論じることとしたい。

古墳時代の祭祀関連遺跡から出土した小型鏡は西日本各地で出土している（図26）。中・四国においては愛媛県1例（火内遺跡）、香川県1例（船越遺跡）、鳥取県1例（長瀬高浜遺跡）、岡山県3例（斎富遺跡、下湯原B遺跡、高島遺跡）の6遺跡が挙げられる。近畿地方においては、三重県1例（土山遺跡）、滋賀県2例（木曾遺跡、下長遺跡）、大阪府2例（千手寺山遺跡、西ノ辻遺跡）、兵庫県3例（藤江別所遺跡、長越遺跡、下坂部遺跡）奈良県1例（山ノ神遺跡）の9遺跡を数える。九州では福岡県3例（第三宮址遺跡、坂の下祭祀遺跡、沖ノ島遺跡）が確認されている。それらの大半が古墳時代中期あるいは後期に属している。

大木鏡は広義の櫛歯文鏡である。同様の例は、鳥取県長瀬高浜遺跡（図26-3）〔清水ほか編1981、1982〕や兵庫県藤江別所遺跡（5）〔稲原編1996〕の出土例などが挙げられる。いずれも櫛歯文が圏線に直行しないという点で大木鏡と類似するが、いずれも櫛歯の間隔は狭く、配する櫛歯の数自体も多いという点で異なっている。文様構成は精緻であり、鋳上がりも良いこれらの例と比較すると、大木鏡は粗雑な作りといえる。

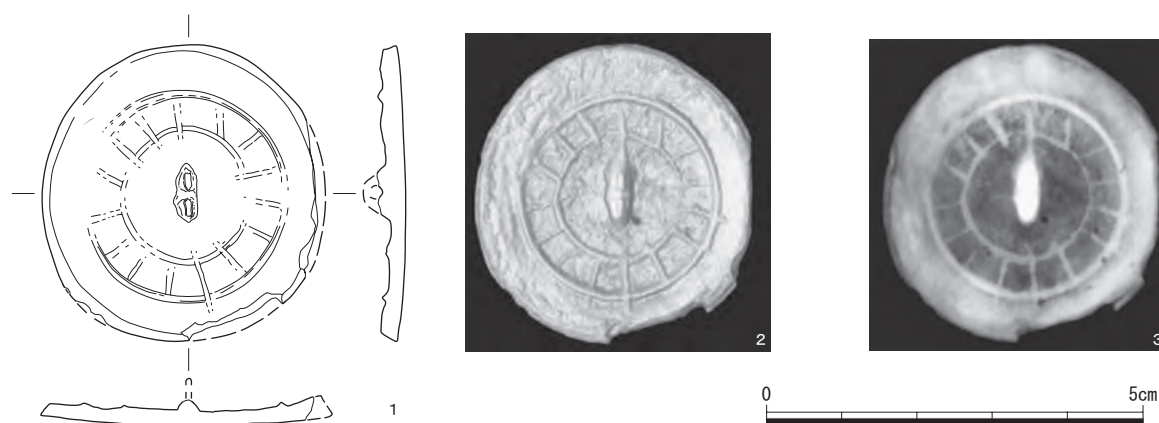
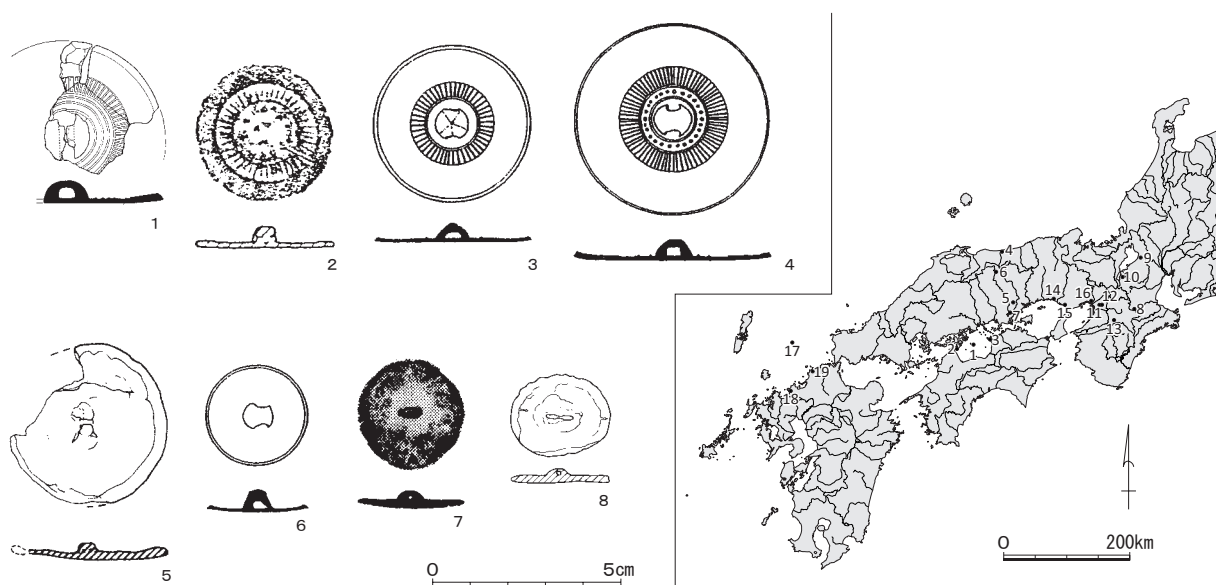


図25 小型青銅鏡実測図（1）・3次元計測図（2）・X線CT画像（3）



鏡—1. 火内遺跡（重圈文鏡）／2. 長瀬高浜遺跡（橢歯文鏡）／3. 藤江別所遺跡（橢歯文鏡）／4. 藤江別所遺跡（珠文鏡）
5. 下湯原B遺跡（素文鏡）／6. 藤江別所遺跡（素文鏡）／7. 沖ノ島12号遺跡（素文鏡）／8. 長瀬高浜遺跡（素文鏡）

分布図—1. 大木遺跡／2. 火内遺跡／3. 船越遺跡／4. 長瀬高浜遺跡／5. 斎富遺跡／6. 下湯原B遺跡／7. 高島遺跡
8. 土山遺跡／9. 木曾遺跡／10. 下長遺跡／11. 千手寺山遺跡／12. 西ノ辻遺跡／13. 山ノ神遺跡／14. 長越遺跡
15. 藤江別所遺跡／16. 下坂部遺跡／17. 沖ノ島遺跡群／18. 坂の下祭祀遺跡／19. 第三宮址遺跡

図26 西日本における小型青銅鏡の分布図

また大木鏡の鈕については薄い橋状の鈕を想定したが、先述の鳥取県長瀬高浜遺跡出土例（3）や愛媛県火内遺跡（2）〔阿部・伊藤ほか編1981〕の例をはじめ多くは円鈕である。大木鏡と同様の例は、福岡県沖ノ島12号遺跡（7）〔宗像神社復興期成会編1958〕や鳥取県長瀬高浜遺跡出土例（8）にみられる。しかし、鏡式はいずれも素文鏡である。

以上のことから、大木鏡は精緻なつくりで重厚な円鈕をもつ橢歯文鏡と、簡略化した薄い鈕をもつ素文鏡との中間的な特徴を有する小型鏡として注目される。

また、先に挙げた18例のうち、海浜や島の祭祀関係の遺跡は、愛媛県火内遺跡、香川県船越遺跡、岡山県高島遺跡、福岡県沖ノ島の4例である。それら4例と同様に、大木遺跡もまた海上交通に関係した祭祀の場であったと推察されているが、小型鏡もその場に必要とされた道具であったと考えられる。

本資料の調査に当たっては、九州国立博物館・今津節夫先生の調査協力を得た。記して感謝したい。

（宮下亜季）

6. 鉄製品

鉄製品には鉄剣、鉄鏃、鉄鋌がある。いずれも採集後、接合・修復等はなされておらず、1975年

に初めて本資料が紹介されて以降、破片の状態で保管されていた〔長井1975〕。接合作業の結果、鉄鏃は腸袂の形状が判明し、短剣の存在もわかり、また鉄鋌も一部は復元できた。

(1) 鉄剣 (図27-1・2)

小型の短剣であり、10数片の小片が接合され現状にいたった。鋒と茎は欠損している。鋒は非対称形で一方は直線を呈する。剣身は刃部がほぼ並行し、片丸造である。関部で緩やかに弧状を呈し、茎にいたる。関も鋒と同様に非対称である。茎は端部にかけてわずかに幅を減ずるものと思われ、その横断面は台形を呈する。現存長15.7cm、剣身長14.3cm、身幅2.0cm、関幅1.5cmであり、身、茎部の厚みはそれぞれ0.35cm、0.40cmを測る。大きさ、横断面形、非対称形という諸要素から非実用的、祭器的な剣であると判断される。

(2) 鉄鏃 (図27-3・4)

平造の平根式有茎鉄鏃であり、鏃身は三角形を呈する。鋒にはふくらがあり、身の中程よりわずかに内湾し外に張り出した逆刺にいたる。一方の逆刺を欠損している。逆刺の端部は直線を呈し、面をもち、鋭角に茎と接続している。茎は横断面長方形の板状であり、0.9cmを残して折損している。鏃身の中央部には縦0.35cm、横0.5cmの長方形透孔を有する。現存長6.2cm、茎の現存長0.9cm、逆刺部の復元幅4.5cmを測る。厚みは鋒付近で最大0.4cm、身中程、茎部で0.3cmである。

(3) 鉄鋌 (図28)

長井氏は24点の鉄器の採集を報告しているが〔長井1975〕、再整理の開始時点で破片45点を確認した⁽³⁾。そして接合作業の結果、鉄鋌は27点になった。そのうち1点はほぼ完形に復元できた(図28-3)。これを除くと、接合はできたものの旧状が判明するほどには復元できなかった。

復元作業後、残存長が最大のものは15.8cmを測り、最小は1.7cmである。また幅は最大で3.75cm、最小で0.5cmと大きさに幅がある。

愛媛県松前町出土遺跡より出土した鉄鋌について、谷若倫郎氏は平面形状に注目して分類を行っており〔谷若編1993〕、この分類案にしたがって検討したい。

大木遺跡採集の鉄鋌は身より端部の幅が広いもの(A類)と身部と端部の幅がほぼ等しいもの(B類)と大きく2類に分けることができる。

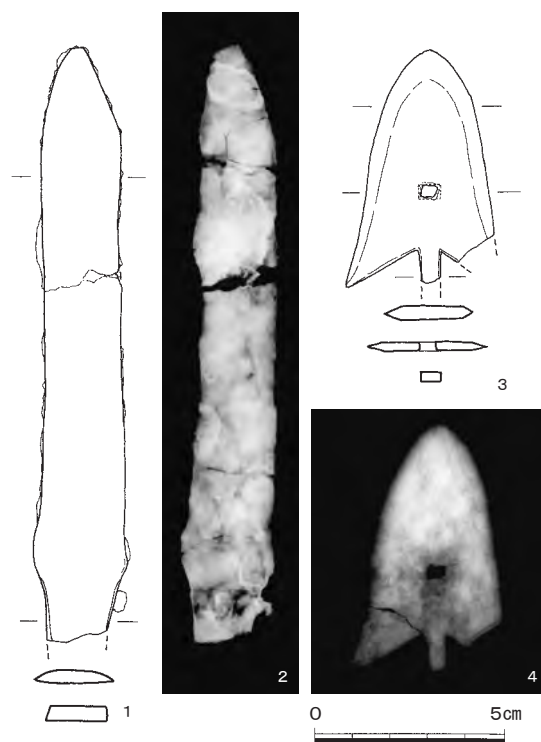


図27 鉄剣・鉄鏃実測図・X線画像

A類（1～12）は端部が残存するものを細分すれば、平面形が握り拳状を呈するもの（1～3）と、端部が撥状に広がるもの（4～6）に細分が可能である。1の左先端には0.2cmほどの亀裂が確認できる。3は折り曲げによって切断された痕跡を下端部に残す。

B類（13～19）は端部が残存するものを細分すると、端部が丸まり舌状を呈するもの（B a類：13～15）、端部が直線的で全体に長方形を呈するもの（B b類：16～19）に細分できる。とくにB a類の13は、ほかに比べて異質な鉄鋌である。横断面形は凸レンズ状を呈し、多少の錆化を考慮してもかなり厚めに仕上げられている。最大幅も3.75cmと他を凌駕し、整形もかなり精緻である。

このほかに20～27は身部のわずかな破片であるため、詳細な分類ができなかった。26、27はA a類の先端、もしくは先端が先細る形状のものとして分類できる可能性もある。



図28 鉄製品（鉄鋌）

A類：1～12（A a類：1～3、A b類：4～6）、B類：13～19（B a類：13～15、B b類：16～19）、その他：20～27

(4) とくに鉄鋌について

①研究抄史

長井氏は「24点出土」した大木遺跡の「鉄器」を「一種の仮器的な意味を持つもの」として報告した〔長井1975〕。『魚島村誌』〔村上和編1994〕によれば、この「鉄器」が「鉄鋌」として認識されるようになったのは、1978年、松本敏三、亀井正道両氏の観察以降とされる。加えて亀井氏は、沖ノ島遺跡（福岡県宗像市）出土鉄鋌と関連付け、朝鮮半島との関係性を示唆した。のちに亀井氏は1985年に開かれた歴史シンポジウム『弥生から古墳時代へ』⁽⁴⁾の中で、「畿内的な色彩の強いもの」として大木遺跡採集鉄鋌を挙げ、大木遺跡を「畿内的な色彩が強い遺跡」とであると評価した〔亀井ほか1987〕。

この大木遺跡採集鉄鋌を個別研究の対象として俎上に載せたのは東 潮氏である。東氏は日本列島および朝鮮半島から出土した鉄鋌を集成したうえで、大木遺跡採集鉄鋌の「形状は、いずれも大和6号墳（奈良県奈良市）のものに類似する」と評価している。また、大和6号墳出土鉄鋌が朝鮮半島南部・洛東江下流域（釜山、金海地域）に淵源を求められることから、出作遺跡出土鉄鋌とともに、朝鮮半島から供給された可能性があることを指摘した〔東1987、1993、1999〕。

②愛媛県内出土の鉄鋌（図29）

愛媛県内では出作遺跡、火内遺跡（今治市吉海町）で鉄鋌が出土している⁽⁵⁾。出作遺跡ではSX01から26点の出土が報告されている〔谷若編1993〕。左記の基準にしたがえば、1～5はA a類、6～8はA b類、10～14はB b類に分類できる。火内遺跡では、遺物包含層から1点出土しており（9）〔阿部・伊藤ほか編1998〕、A b類に分類できる。ただし大木遺跡で認めたB a類の存在は類例のなかに確認できなかった。

③大木遺跡採集鉄鋌の位置づけ

大木遺跡採集鉄鋌と県内出土鉄鋌との比較検討を試みたい。まず鉄鋌のサイズ、形態についてみると、出作遺跡例は比較的均質に成形されている。奈良県大和6号墳例は「明瞭に大小鉄鋌の二群に」分けることができ〔東1987、1999〕、「ある程度の規格品」が意図され、成形されたと評価されている〔古瀬編2004〕。東氏はこのうち小型の鉄鋌を細型鉄鋌B（長さ8.0～18.0cm、最小幅1.0～2.5cm）に分類し、出作遺跡例や大木遺跡例もこの範疇に入るとしている〔東1987、1999〕。しかし

表3 大木遺跡出土鉄鋌一覧表

番号	残存長 (mm)	最大幅 (mm)	最小幅 (mm)	最大厚 (mm)	最小厚 (mm)	型式
1	92	23	9.5	3.6	1.5	Aa
2	30	14	10	(5.5)	0.9	Aa
3	79.5	29	17	(3.2)	1.5	Aa
4	32	13	7	2.5	1	Ab
5	22	18	14	(5.5)	(2.5)	Ab
6	17	17.5	14	2.1	0.5	Ab
7	25	14	12	2.5	1.4	A
8	17	15.5	13	2.1	1	A
9	27	25	11.5	1.5	1	A
10	86	15	10	3.5	1.7	A
11	28.5	24	19	2	0.8	A
12	158	20	16	3.5	2.1	A
13	52	37.5		5.7	2.5	Ba
14	40	25.5	24	1.1	1.9	Ba
15	45	24	22	2.1	0.9	Ba
16	59.5	30	25	3.5	1.6	Bb
17	46	25	21.5	(6.3)	1.5	Bb
18	43.5	9	8	(3.1)	0.8	Bb
19	27	13.5	12	1.3	(0.8)	Bb
20	17	18		4.2	2.5	—
21	22	21	15.5	2	1.5	—
22	29	21	17	3.5	2	—
23	31.5	14	9	3	1.5	—
24	34.5	21	17	(6.1)	0.9	—
25	65	22.5	18	3.2	1	—
26	35.5	22.5		2.3	1.5	—
27	19.5	16.5		1.5	0.9	—

※（ ）内は、銹化が著しいため参考値。

実際には、大木遺跡例は形状のバリエーションに富み、さらに同じ型式に属していても大きさにバラつきがあるなど、統一された規範に沿って成形されたとは考えにくい。また大木遺跡例に完形品が存在しないため、長さに関する検討は困難だが、最小幅をみると図28-4は7mm、同18は8mmと、細型鉄鋌Bに属さない鉄鋌も含まれている。このため、おしなべて大和6号墳例や出作遺跡例などに類似性を求めることは、やや困難といえよう。

また共伴した鉄製品にも差異がある。出作遺跡では、鉄鋌とともに、その裁断片（図29-15～25）が多数出土している〔谷若編1993〕。これは鉄鋌を素材として、その場で鍛冶が行われていたことを意味するものである。「鍛冶と祭祀が結びついた様相」〔村上1994a〕と述べられるように、鍛冶という所作も祭祀のひとつであった。しかし、大木遺跡において素材裁断片は確認できない。鉄鋌本来の鉄素材という性格を失い、純粋な祭祀遺物としての性格が色濃く表れた結果として考えられる。

以上のように、大木遺跡採集鉄鋌は、出作遺跡出土鉄鋌、大和6号墳出土鉄鋌のいずれとも異なる様相であることがわかる。かつて潮見浩氏は、古墳出土鉄鋌の成分分析をもとに「古墳出土の鉄

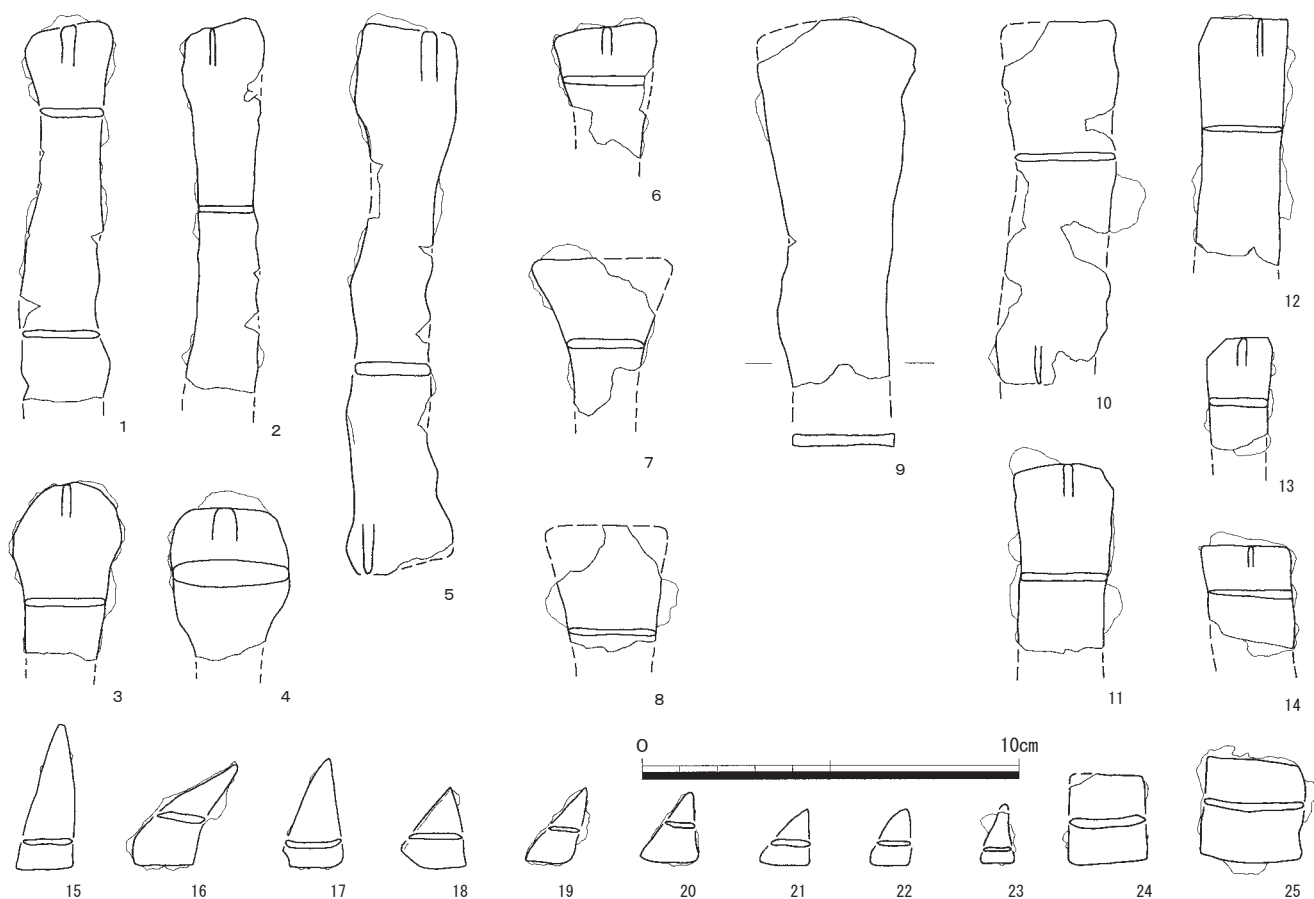


図29 愛媛県内祭祀関連遺跡出土鉄鋌・素材裁断片

A類：1～9（Aa類：1～5、Ab類：6～9）、Bb類：10～14、素材裁断片：15～25
（出作遺跡：1～8、10～25 火内遺跡：9）

鋌が、すべて朝鮮半島からもたらされたとするには、かなり疑問が残る」との見方をしている〔潮見・和島1966、潮見1982〕。潮見氏はとくに古墳出土の鉄鋌を分析の対象として、この見解に達している。しかし、祭祀遺跡である大木遺跡で採集された鉄鋌についても、そのすべてが朝鮮半島から持ち込まれたものとするには再考の余地が残されている。ただし、他の鉄鋌出土例と比較して「祭祀」の性格が強いことから、東氏〔1987、1999〕らの唱えるように、瀬戸内海の海上交通に深く関わったものであることに異論はない。

（藏本 論）

【註】

- （1）平面形態は〔谷若編1993〕を参考に分類している。
- （2）表2の作成にあたっては〔埋蔵文化財研究会編2005〕を参考に新出の資料を追加し若干の修正をおこなった。なお、今回対象とした資料は有孔円板と勾玉、それらの未製品である。
- （3）長井数秋氏による報告〔長井1975〕と、大きく矛盾した総数であった。また、長井報告による資料すべての残存長の和は、約1092mm（鉄鏃、刀子片含む）であるのに対し、今回の再整理では1183mm（鉄鏃、刀子片含まず）となるなど、おおよそ資料2、3点分以上が新たに判明した計算になる。破片資料の総数が増えた原因は、今のところ不明である。
- （4）1985年10月12・13日、松山市で開催。
- （5）このほかにも、多々羅古墳（今治市上浦町）の2号木棺墓粘土床から、鉄鋌1点（A b類）が出土している〔長井・西岡1994〕。しかし今回は、祭祀遺跡に焦点を絞り類例をまとめている。

第3章 総 括

大木遺跡採集遺物を再整理し、今回報告することができた。主な作業は鉄製品の接合、保存処理、小型青銅鏡の工学機器類を用いた精査、石製模造品の石材同定であり、白玉を除く全ての遺物について再実測を実施した。

その結果、鉄鋌の可能性が想定されていた鉄片は接合が進み、間違いなく鉄鋌であることが判明し、その大きさ・形状についても判別できるようになった。一部の鉄片は短剣に復元できた。平根式有茎鉄鏃も逆刺片を発見し接合でき、ほぼその全体形がわかった。小型青銅鏡は肉眼ではとらえられなかった文様の特徴を把握することができた。また石製模造品には多様な石材が利用されていることが判明し、素材の原産地や原産地における産状も検討課題となった。

採集品であるとはいえ、大木遺跡の祭祀遺物には製塩土器、石製模造品、小型青銅鏡、剣形鉄製品、鉄鏃、鉄鋌があり、その組成と量は島嶼部の小さな遺跡としては異例である。日用土器などの共伴がないため、時代の限定は容易ではないが、これまで評価が与えられているように古墳時代中期後半、5世紀代後半という年代を想定するのは妥当である〔長井1975〕。これは乗岡実氏が指摘した備讃瀬戸における島嶼部祭祀の第1ピーク時期とも齟齬を来さない〔乗岡2002〕。

採集時の状況から大きく姿を変えた鉄鋌は亀井正道氏らにより古くから取り上げられ、海上交通に関わる祭祀に関連するものとして評価されてきた〔亀井ほか1987、村上和編1995〕。臨海地域の祭祀遺跡で出土する鉄鋌にはしばしば加工痕を残す例やその裁断片、そして鉄鋌を加工して作られた雛形鉄器が含まれる場合があり、それらをもとに「鍛冶祭祀」という概念が提示された〔村上恭1994、1997、2013〕。鍛冶祭祀そのものは、一般的な集落内の鍛冶工房にも認められるため、鍛冶祭祀が必ずしも海上交通に関わる祭祀に伴うわけではない。その際、本島か島嶼かという遺跡の所在地、島の規模、島における遺跡立地という視点が重要であり、島での鍛冶祭祀が大規模な島のやや内陸で行われていることが指摘されている〔村上恭2013〕。兵庫県南あわじ市木戸原遺跡がその典型例である〔南あわじ市教育委員会編2005〕。愛媛大学考古学研究室でこの遺跡の出土鉄製品を整理した結果、鉄鋌に加えて、鉄器製作に伴う各種の鉄片類が存在することがわかった。愛媛県出土遺跡の例も併せて考えるならば、島、臨海地域における鉄鋌を伴う祭祀場ととらえられる遺跡でも、一定の居住空間を伴う場合と居住空間を伴わない場合とがあり、木戸原遺跡が前者であり、大木遺跡が後者であると評価できる。

一方で祭祀の挙行者については、亀井氏が大木遺跡などの島嶼部遺跡を「海の祭祀遺跡3類型」のうち第2類とし、在地勢力がその主体であったとした〔亀井1988〕。しかし、厳しい海域での航行祭祀は海域外の航行者の関与・発願が当然想定されてよい。その際、祭具の産地、調達地など新たな視点での検討が必要となってこよう〔村上恭2013〕。その意味では、今回精査できた石製模造品に多様な石材使用が認められることから、今後、原産地同定などが進められれば、祭具の調達地あるいは航行者の寄港地などの議論に展開できる可能性が高い。

今回報告した遺物が採集された大木遺跡は魚島北西部に広がる湾の最奥部に位置する。採集地点は北に面し、狭い砂浜を見おろす急斜地である。現在、上り下りすることすら困難な斜地であることから、採集地点が祭祀場そのものではなく、祭祀場が崩れ、遺物が斜面上に滑落した可能性が高い。祭祀場の存在が想定される斜地の頂部はほんのわずかな平坦地が残されているに過ぎず、藪に覆われ、容易に近づけない状況である。海上交通に関わる祭祀の研究を推進し、当時の祭祀のリアリティーを明らかにするという意味では、大木遺跡の正式な発掘調査が必要と考える。

(村上恭通)

【参考・引用文献】

一論 考一

赤崎敏男ほか 1991「4 祭祀具」『古墳時代の研究 第3巻 生活と祭祀』雄山閣

東 潮 1993「1 出作遺跡出土の鉄鋌をめぐって」『出作遺跡Ⅰ 出作圃場整備事業埋蔵文化財調査報告書』松前町教育委員会

東 潮 1999「第5章 鉄鋌の基礎的研究」『古代東アジアの鉄と倭』、溪水社（初出：1987『考古学論攷』12、奈良県立橿原考古学研究所）

稲原昭嘉 1999「藤江別所遺跡の祭祀井戸と儀鏡」『考古学ジャーナル』446、ニュー・サイエンス社

愛媛県史編さん委員会 1982「第四章 古墳文化の発達と社会の充実」『愛媛県史 原始・古代Ⅰ』愛媛県

岡本健児 1972「四国」『神道考古学講座』第2巻、雄山閣

亀井正道 1971「祭祀遺跡－製塩に関連して－」『新版考古学講座』第8巻、雄山閣

亀井正道 1988「海と川の祭り」『古代を考える 沖の島と古代祭祀』吉川弘文館

亀井正道ほか 1987『弥生から古墳時代へ』（財）愛媛県文化振興財団

北武蔵古代文化研究会 1993『第2回 東日本埋蔵文化財研究会 古墳時代の祭祀－祭祀関係の遺跡と遺物－』東日本埋蔵文化研究会

潮見 浩・和島誠一 1966「2 鉄および鉄器生産」『日本の考古学』Ⅴ 古墳時代（下）、河出書房新社

潮見 浩 1982「第三章 日本の初期鉄器文化」『東アジアの初期鉄器文化』吉川弘文館

柴田昌兄 1997「芸予諸島及びその周辺地域における土器製塩研究の成果と課題－とくに愛媛県の最近の調査事例を中心に－」『シンポジウム製塩土器の諸問題』塩の会シンポジウム実行委員会

清水真一 1999「鳥取県羽合町・長瀬高浜遺跡の祭祀遺構と儀鏡」『考古学ジャーナル』446、ニュー・サイエンス社

白石太一郎 1985「神まつりと古墳の祭祀－古墳出土の石製模造品を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館

白石太一郎ほか編1993『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集 共同研究「日本出土鏡データ集成」2、国立歴史民俗博物館

白石太一郎ほか編2002『国立歴史民俗博物館研究報告』第97集 共同研究「日本出土鏡データ集成」3、国立歴史民俗博物館

相田則美 1991「道後平野における古墳時代の集落内祭祀」『松山市道後北城遺跡群 松山大学構内遺跡－第2次調査－』松山市文化財調査報告書20 松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

高倉洋彰 1999「儀鏡の誕生」『考古学ジャーナル』446、ニュー・サイエンス社

田中 謙編2014『芸予諸島・海民文化の考古学』平成26年度今治市村上水軍博物館開館10周年記念特別展、今治市村上水軍博物館

長井数秋 1975「愛媛県魚島の遺物・遺跡について」『ソーシャル・リサーチ』第4号、ソーシャル・リサーチ研究会

長井数秋 2008「弓削諸島の考古学」『ソーシャル・リサーチ』第33号、ソーシャル・リサーチ研究会

- 長井数秋 2012「魚島の考古学」『ふたな』第15号、愛媛考古学研究所
- 長井数秋 2013「遺跡分布図から見る芸予諸島の考古学」『ふたな』第16号、愛媛考古学研究所
- 野島 永・脇山佳奈編2012『舞鶴市千歳下遺跡発掘調査報告書』広島大学大学院文学研究科考古学研究室報告2・舞鶴市文化財調査報告46
- 乗岡 実 2002「備讃瀬戸の祭祀遺跡と海上交通」『瀬戸内海に関する研究』財団法人福武学術振興財団
- 古瀬清秀編2004『東アジアにおける鉄鍛冶技術の伝播と展開』平成12年度～平成15年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書（課題番号12410105）
- 古瀬清秀・打田知之・八幡浩二 2003「瀬戸内海島嶼部及び沿岸部の遺跡踏査－古代海上交通と祭祀に関して－」『内海文化研究紀要』第31号、広島大学大学院文学研究科内海文化研究施設
- 南あわじ市教育委員会編2005『木戸原遺跡現地説明会資料』
- 村上和馬編1994「魚島のあけぼの（原始時代）」『魚島村誌』自然・歴史編、越智郡魚島村
- 村上恭通 1994a「出作遺跡における鍛冶と祭祀」『出作遺跡とそのマツリ－古墳時代松山平野の祭祀と政治－』愛媛県松前町教育委員会
- 村上恭通 1994b「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究』第41巻第3号、考古学研究会
- 村上恭通 1997『倭人と鉄の考古学』青木書店
- 村上恭通 2007「第4章 古墳時代中・後期における鉄・鉄器生産」『古代国家成立過程と鉄器生産』青木書店
- 村上恭通 2013「芸予諸島の遺跡から見た祭祀と交流」『愛媛大学考古学研究室第13回公開シンポジウム 製塩・祭祀・交流－瀬戸内・弓削諸島の発掘成果から－』愛媛大学考古学研究室
- 村松洋介 2006「古墳時代の祭祀遺物 鏡の祭祀－非副葬鏡の問題を中心に－」『季刊考古学』第96号
- 山本秀夫 2011「瀬戸内の鯛網漁」『近世瀬戸内「浦」社会の研究』清文堂
- 米田克彦 2002「中・四国における滑石製模造品の生産」『環瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－下巻』古代吉備研究会
- －報告書・資料集－
- 阿部勝行・真鍋昭文編1998『火内遺跡・臥間遺跡 来島大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集』埋蔵文化財発掘調査報告書第70集、(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 石井千絵里編2008『豊島明神遺跡・入津遺跡試掘調査報告書』愛媛大学法文学部考古学研究室
- 稲原昭嘉編1996『藤江別所遺跡』明石市教育委員会
- 清水真一ほか編1981『長瀬高浜遺跡発掘調査報告』Ⅲ、財団法人鳥取県教育文化財団
- 清水真一ほか編1982『長瀬高浜遺跡発掘調査報告』Ⅳ、財団法人鳥取県教育文化財団
- 谷若倫郎編1993『出作遺跡Ⅰ 出作圃場整備事業埋蔵文化財調査報告書』松前町教育委員会
- 内藤善史ほか編2002『下湯原B遺跡・藪澄山城跡』岡山県教育委員会
- 長井数秋・西岡信次編1994『上浦町多々羅古墳』愛媛県越智郡上浦町教育委員会
- 埋蔵文化財研究会編2005『古墳時代の滑石製品－その生産と消費－』第54回埋蔵文化財研究集会
- 松下勝ほか編1979『播磨・長越遺跡（本文編）』兵庫県文化財調査報告第12冊、兵庫県教育委員会
- 宗像神社復興期成会編1958『沖ノ島』吉川弘文館
- 宗像神社復興期成会編1961『続沖ノ島』吉川弘文館

圖 版



1. 豊島明神遺跡遠景（北から、▲の交点が遺跡）



2. 遺跡近景（北から）



3. 磯明神社（北から）



4. 藪に廃棄された歴代の蛸壺（2の右手藪）

図版 2

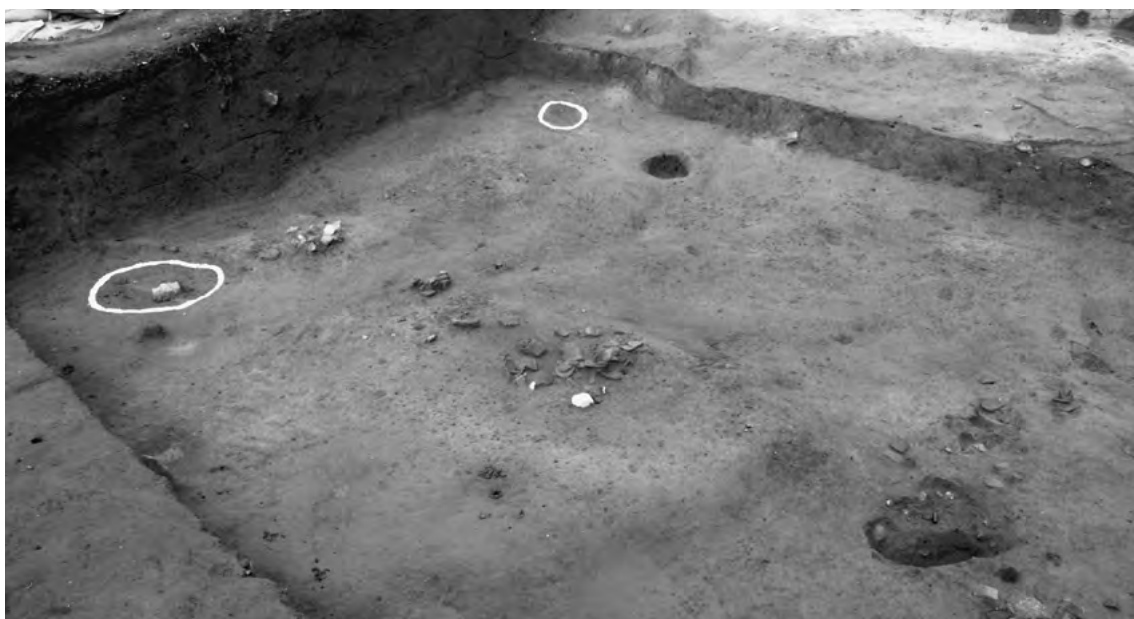
豊島明神遺跡



1. 調査前状況（北から）



2. 調査前状況（東から）



1. A区集石遺構・焼土跡・土器出土状況 1 (北東から)



2. A区集石遺構・焼土跡・土器出土状況 2 (北から)



3. 集石遺構 (西から)



4. 鉄滓出土状況 (西から)



1. 集石遺構北側の脚台式製塩土器・土師器出土状況（北から）



2. 搅乱孔（SK 6）の管玉検出状況（北から）



3. 管玉検出状況（西から）



1. A区発掘終了状況（北から）



2. A区西壁（東から）



3. A区南東部自然礫出土状況（北から）



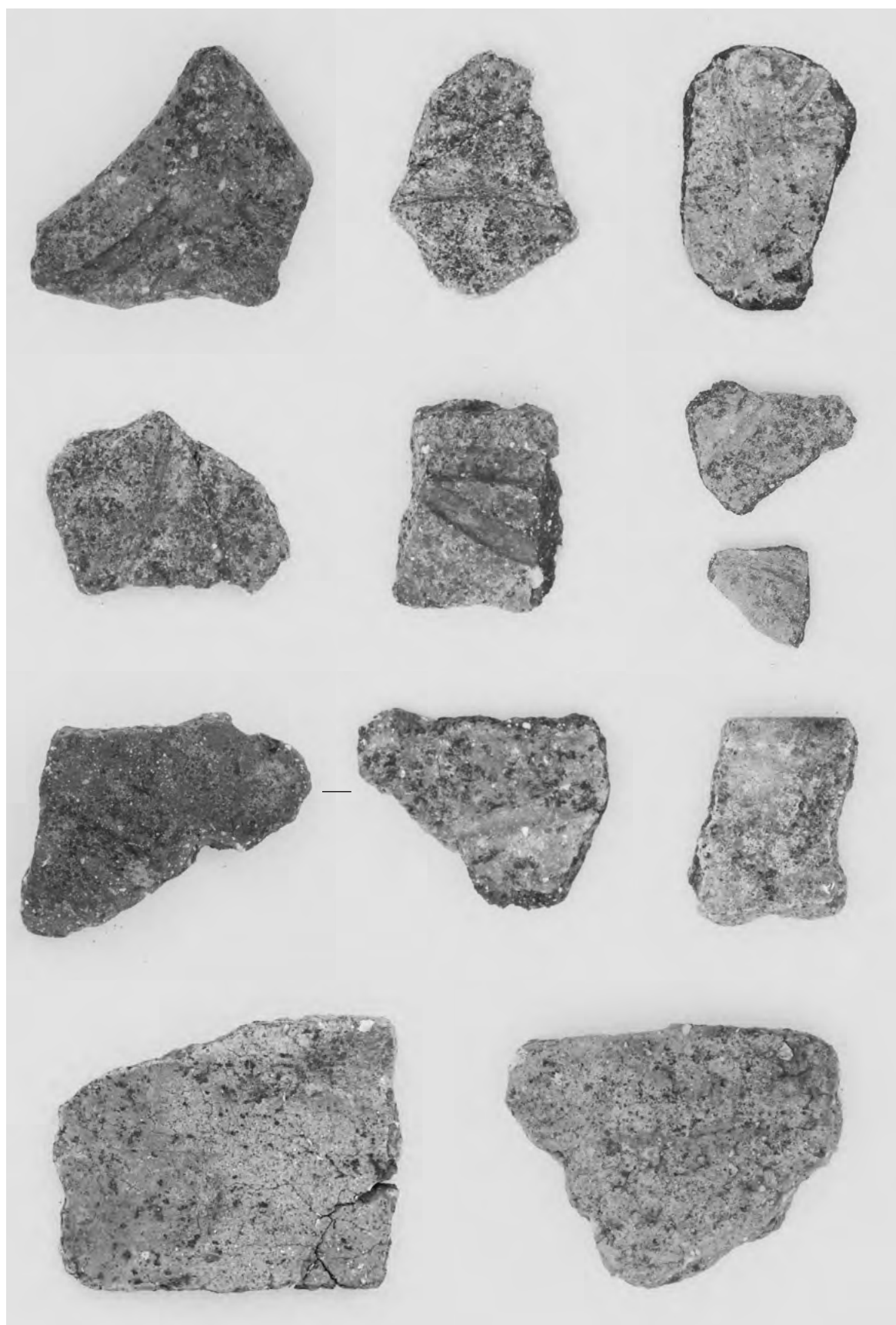
1. B区発掘終了状況（北から）



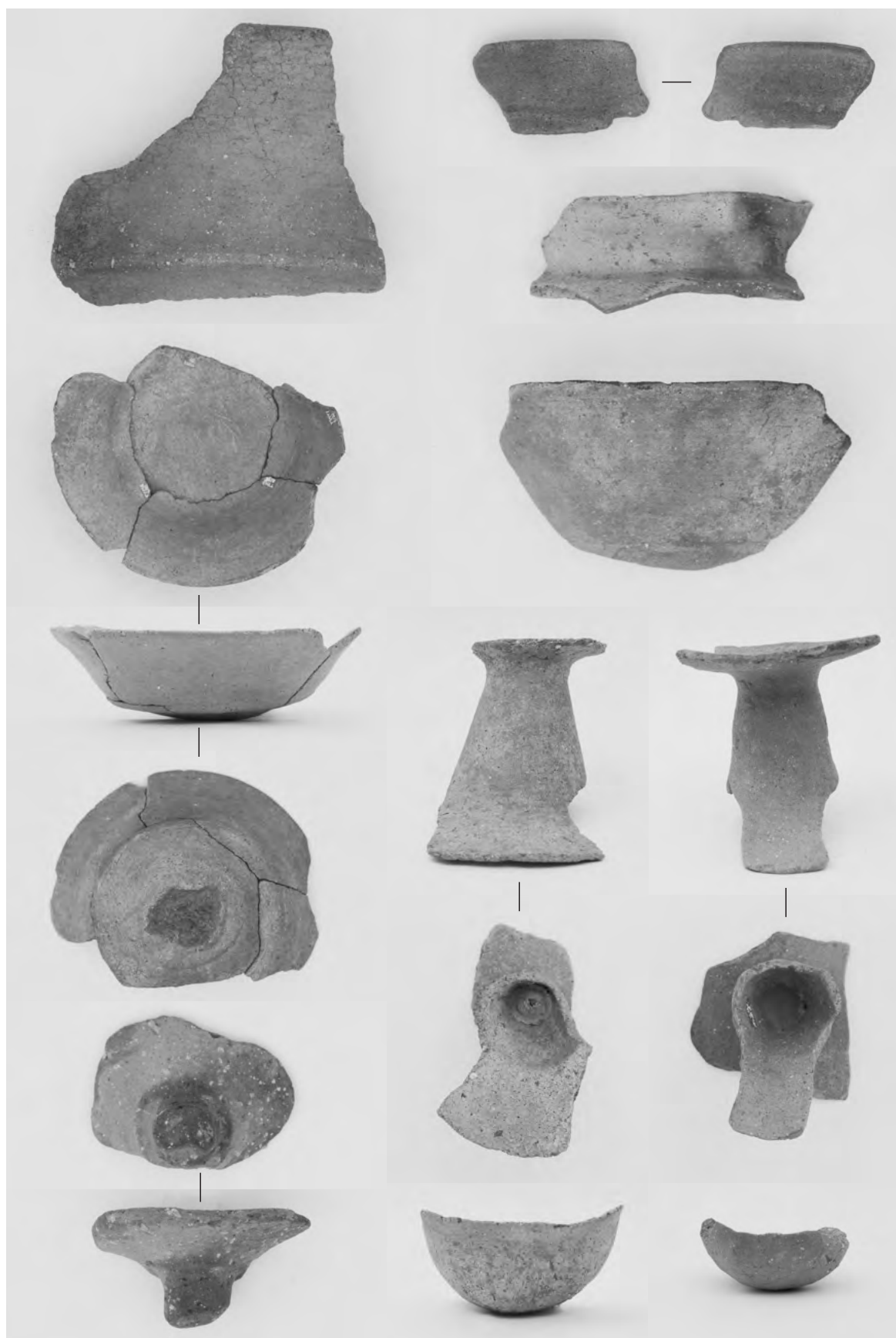
2. B区東壁



3. B区北壁



縄文土器



土師器・手捏ね土器



1. 脚台式製塩土器



2. コップ形製塩土器



3. 古代・中世土器

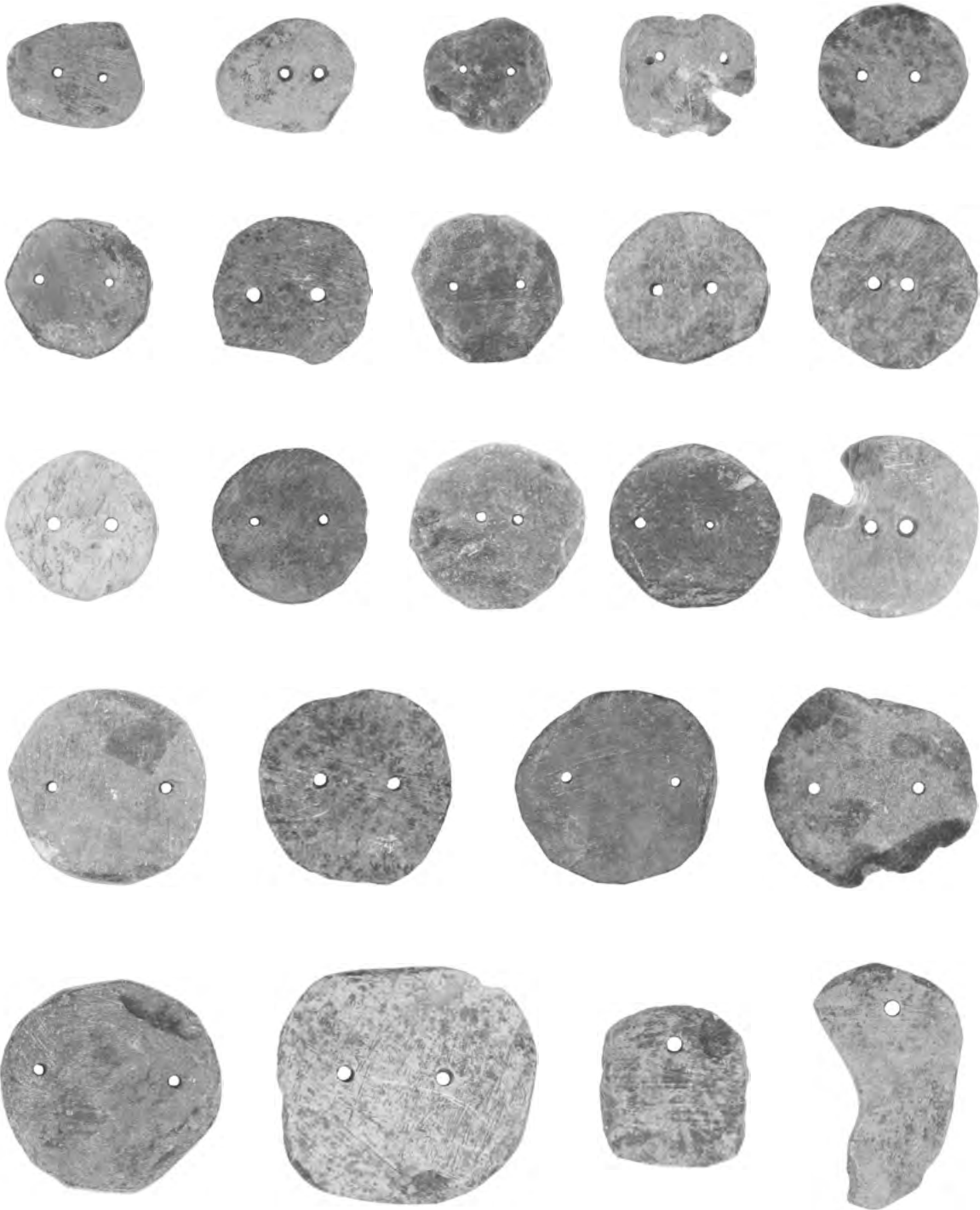


4. 管玉



5. 鉄滓

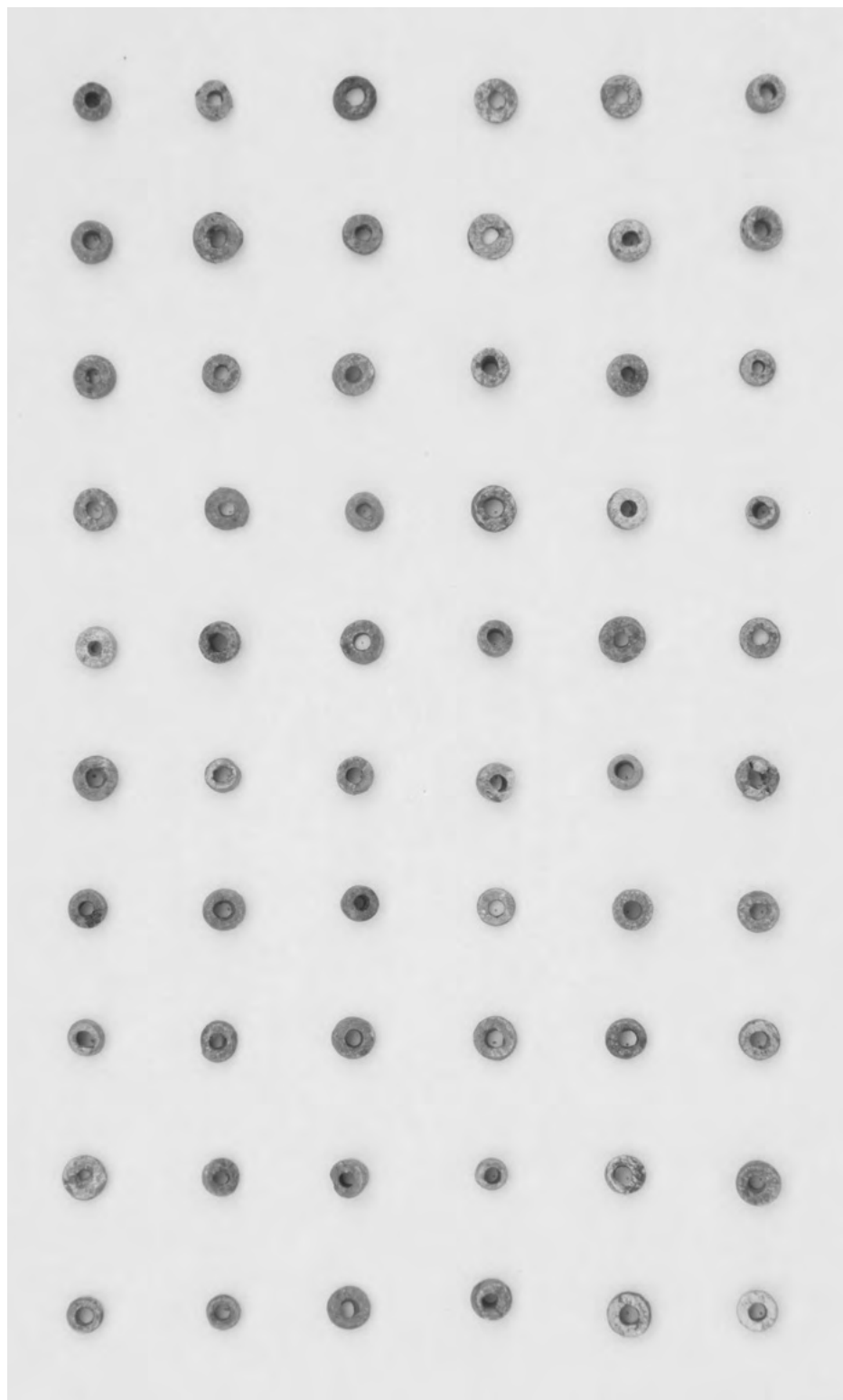




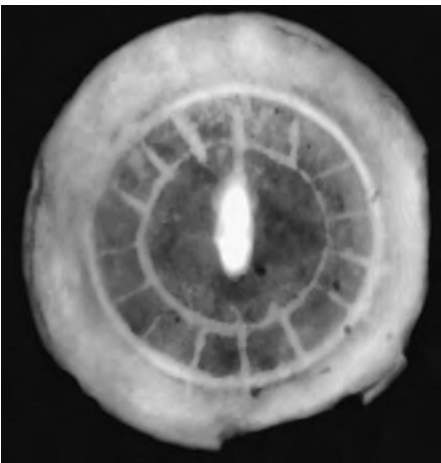
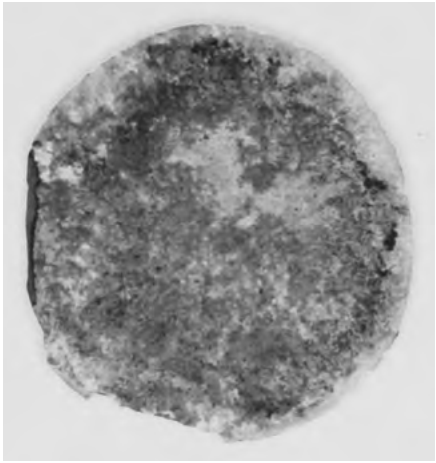
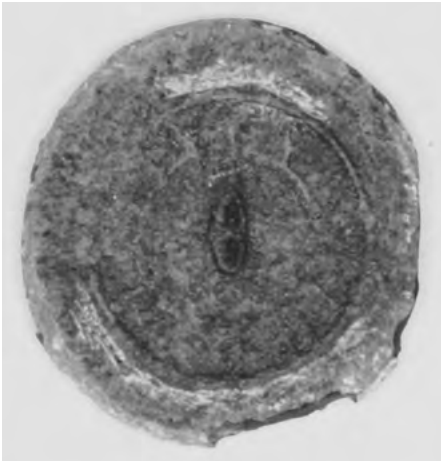
石製模造品

图版12

大木遺跡



白玉



小型青銅鏡

図版14

大木遺跡



鉄製品

報告書抄録

ふりがな	えひめけんおちぐんかみじまちょう とよしまみようじんいせき							
書 名	愛媛県越智郡上島町 豊島明神遺跡							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	3							
編著者名	(編集) 村上恭通 (執筆) 石井千絵里、内田優人、亀澤一平、垣見奈緒子、藏本諭、福永将大、武藤洋行、山梨千晶、村上							
編集機関	愛媛大学法文学部考古学研究室							
所 在 地	〒790-8577 愛媛県松山市文京町 3							
発行機関	上島町教育委員会							
所 在 地	〒794-2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地 TEL 0897-77-2128							
発行年月日	2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とよしまみようじん いせき 豊島明神遺跡	えひめけん おちぐん 愛媛県越智郡 かみじまちょう 上島町 ゆげとよしま 弓削豊島	38356		34° 13′ 57″	133° 15′ 32″	20070816 ～20070823 20080903 ～20080917 20090822 ～20090904 20100710 ～20100731	2.1㎡ ㎡ ㎡ ㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
とよしまみようじん いせき 豊島明神遺跡	祭祀	縄文時代 古墳時代 中世 近世		集石遺構 焼土跡 包含層	縄文土器、土師器、製 塩土器、須恵器、陶磁 器、土錘、鉄滓			
要 約	A区においては古墳代前期の遺構面（9層上面）で集石遺構、焼土跡を検出した。これらは古墳時代前期前葉の古式土師器、脚台式製塩土器を伴うことがわかった。8層は須恵器出現以前の土師器、コップ形製塩土器を主として含む包含層であり、7層以上の包含層では古墳時代から中世にいたる遺物を含んでいた。なお12層、16層では縄文時代後期の土器が検出された。							

愛媛県越智郡上島町
豊島明神遺跡

(上島町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告第3集)

2016年3月31日発行

編集 愛媛大学法文学部考古学研究室
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3
発行 愛媛県越智郡上島町教育委員会
〒794-2520 愛媛県越智郡上島町弓削佐島583番地
印刷 岡田印刷
〒790-0012 愛媛県松山市湊町7-1-8
